

「車屋謡本」新考(三) : 第二章 鈔写車屋謡本(その二)

著者	表 章
雑誌名	能楽研究 : 能楽研究所紀要
巻	14
ページ	1-100
発行年	1989-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020402

「車屋謡本」新考(三)

第二章 鈔写車屋謡本(その二)

表章

本稿は、五回以上に分載することになると思われる同題の論考——江島伊兵衛氏著『車屋本之研究』(昭和19年11月15日刊)の増訂を目的としている——の三回目であり、第一回分(はしがき・序説・第一章)は『能楽研究』第十三号(昭和63年3月)に、第二回分(第二章その一)は『法政大学文学部紀要』第三十三号(昭和63年3月)に載せた。既発表分を含む本稿全体の構成は、左の形を予定している。

はしがき——江島伊兵衛氏と本論考——

序説(一) 車屋本研究史

序説(二) 基礎的諸事項の確認

第一章 謡本以外の鳥養宗晰の墨跡

一 「喜勝目録」と宗晰書状 二 『庭訓往来』と『消息詞手本』 三 連歌卷子本、その他

第二章 鈔写車屋謡本の諸本

一 曄道博士旧蔵天正三年宗晰署名三番綴本 二 天正期の卷子本五種

三 下間少進法印手沢五番綴本 四 文禄年間の小謡二種

〔以上、既発表分〕

五 文禄前後の曲舞本二種 付 浅井家旧蔵曲舞集『曲海』

六 吉川家旧蔵鳥養道晰手沢本 付 永禄三年本転写『鳥養宗慶所持書札法』

七 毛利家旧蔵文禄二〇慶長二年沙弥道晰奥書五番綴百番本 付 毛利本転写五番綴百番本

八 吉川家旧蔵文禄五年沙弥道晰奥書五番綴百二十番本

九 高安博士旧蔵本願寺伝来本二種 付 慶長二年沙弥道晰奥書三番綴別本

一〇 慶長四年沙弥道晰奥書二番綴本

一一 鳥養宗晰・鳥養休右署判一番綴本 付 車屋休衛門節付本転写〔羅生門〕

一二 野上博士旧蔵無署名一番綴百番本

一三 無署名五番綴升型百番本

一四 車屋本系写本各種

第三章 整版車屋謡本について

第四章 偽車屋本と古活字車屋謡本について

第五章 車屋謡本をめぐる諸問題

第六章 鳥養道晰の経歴をめぐる

付載記事若干(車屋謡本曲目一覧・関連年表・あとがき等)

今回は第二章の五と六だけである。凡例的な事どもは第一回分を参照されたい。車屋謡本関係の資料一覧も第一回分の序説(二)に掲出している。

五 文禄前後の曲舞本二種

付 浅井家旧蔵曲舞集『曲海』

前節では文禄前後のものと推定される鳥養宗晰筆の小謡二種を一括して考察した。同じく文禄前後の曲舞本二種が伝存しているので、同じく一括して述べ、関連資料たる『曲海』についてもここで言及することにする。

1 文禄四年沙弥宗晰署名本『曲舞』(資料ネ《曲舞本》)

吉川家(旧岩国藩主)旧蔵本で、やはり同家旧蔵の《吉川小本》(資料ハ)と共に昭和二十四年四月に鴻山文庫蔵となった。江島本の「八、鈔写車屋本」の節の「五 吉川本」の項に「(甲) 曲舞」と題して考察されており、表も『鴻山文庫本の研究』の第一章「鈔写謡本」の「二下掛り写本」の項で、**20** 文禄四年宗晰節付本「曲舞」一冊」と題し、江島本の説をも参照しつつ解題を加えている。以下はそれを修正しつつ大幅に増補した見解である。

(一) 書誌等の大概

資料ネの《曲舞本》は、縦245ミリ、横168ミリの大形半紙本(美濃本)で、綴帖装。綴糸は赤味を帯びた薄茶色。表紙は焦茶色地に金の砂子・切箔や銀の野毛を散らし、白茶色地の見返しにも金銀の砂子・切箔・野毛を散らす。表紙の左上部に金泥で柳を描いた斐紙の長形題簽(縦120・横43ミリ)を貼り、「曲舞」と墨書する。外側が黒色の帙(左上の金色題簽

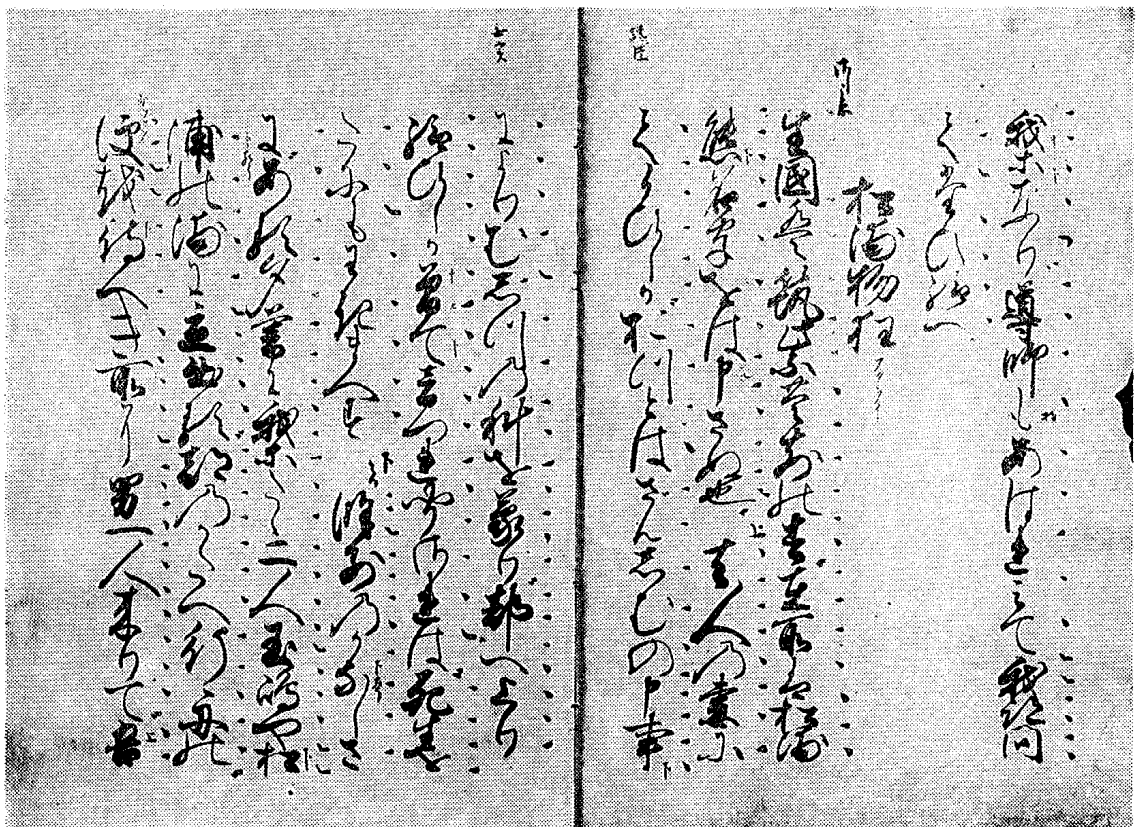
に「曲舞／宗晰」と墨書）に収め、それを金砂子まぶしの黒漆塗りの箱に収め、それをさらに被せ蓋付きの桐箱に収めているが、帙も箱も鴻山文庫に入ってから以後の物のようである。桐箱の表には江島氏の手で「岩国吉川家伝来／車屋謡本 曲舞 壹帖／旧重美／重要文化財／書二〇〇七号 指定書別置」と墨書されており、昭和三十五年三月に本書が重要文化財に指定された際の関係文書一袋（旧重要美術品の認定書の写真もある）が桐箱に同置されている。

料紙は厚葉の斐楮交漉紙で、全七十三丁を四帖（各九枚・七枚・十枚・十枚半）に綴じる。料紙全体を濃い目の茶色に染めてあるが、その色がかなり斑らで、模様風に見える所すらある。最初の一丁が目録で、別記の三十曲を三段五行に列記し、曲順は表の上段・中段・下段、裏の上段・中段・下段の順。第二丁から七十二丁までが本文で、最終丁は奥書のみ。本文の書体は鳥養流系の達筆で、片面六行に書き、字面の高さは上に飛び出た節付部分を含めて200ミリ前後、横は135ミリ程度で、上下左右の余白がかなりある。内題の曲名は一行どりで、次曲は一行空けて続けて書くが、表側の六行目で前曲の本文が終わった場合は裏側の第一行に次曲の曲名を書いている（前丁から次丁への境で曲が終わった場合は次丁の第一行を空ける）。12の〈由良物狂〉と15の〈嶋廻〉の二曲のみは内題の曲名を削り、そこに後人が小字でクセに先行する「さしこゑ」の文句を加筆している。節付や歌い方や文句に関連した数次にわたるらしい加筆（一部は朱筆）がかなりあるが、それについては別に述べる。

〔二〕奥書をめぐって

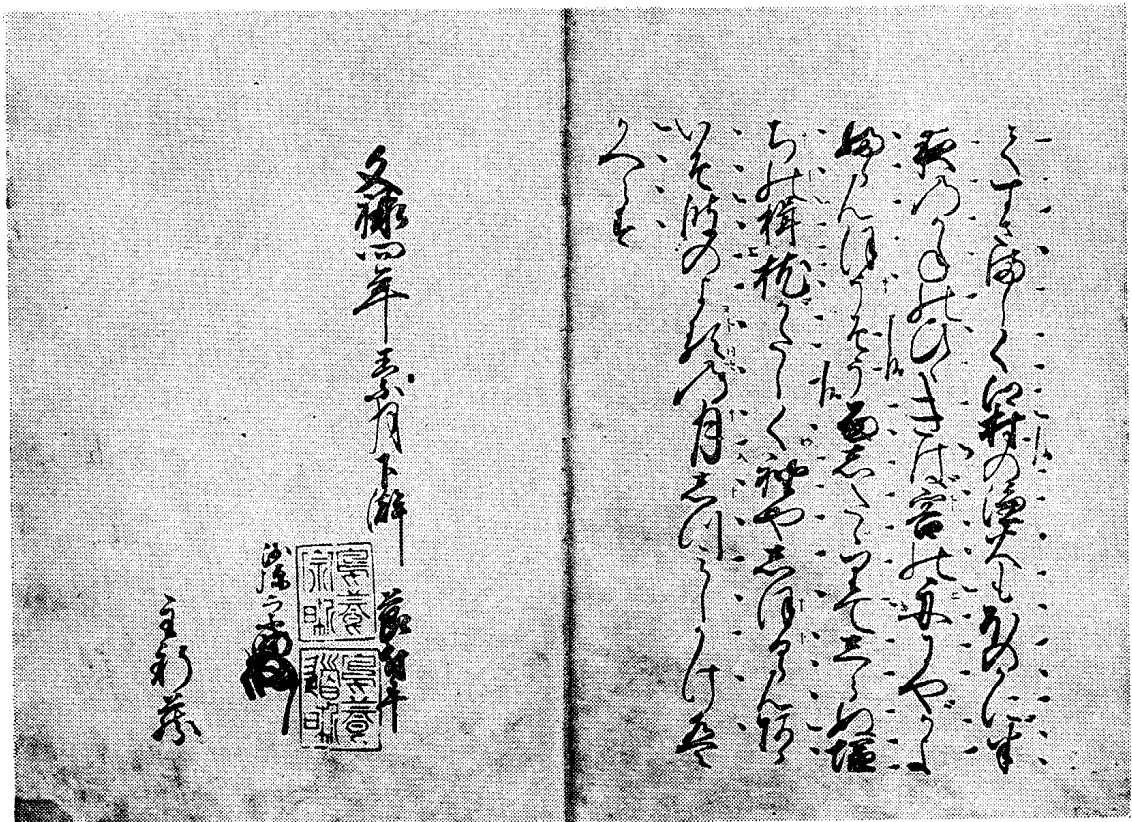
本書の末丁表には、別掲のごとき奥書がある（写真35参照）。「素月」は陰暦八月の異称である。

この奥書は宗晰の花押までが本体で、それは宗晰筆に相違ないが、末の「主新蔵」は、書体も墨色もいささか異なり、本書を所持した鳥養新蔵（宗晰の長男）の加筆と認められる。江島本にも『鴻山文庫本の研究』にも、父が子のた



(34) 宗晰筆「曲舞」(〈松浦物狂〉の首部)

(35) 宗晰筆「曲舞」(奥書部分)



文禄四年素月下澣 節付畢

(墨印「鳥養／宗晰」「鳥養／道晰」)

沙弥宗晰(花押)

主新蔵

が、年記・識語と署名との間の空白を利用して、後に宗晰自身か新蔵かが押捺したもののようである。両印を一緒に押捺した例は資料ハ《吉川小本》にも見られるが、本書のように窮屈な形に捺した例はない。奥書の右にも左にも二つ並べて押捺するだけの余白がなかったため、年記と署名の間の空白を利用したのであろう。当初から二つの押印を予定した奥書ならば、もっと右に寄せて書いたはずである。その見地からは、「主新蔵」の加筆よりも両印の押捺が後ということになる。

天正年間の文書では「宗晰」と署名していた鳥養宗晰は、文禄二年六月にはすでに「道晰」と改めていた。資料ヒ《毛利本》の奥書からそのことが知られる。全百番二十冊中の十八冊に年記のある同本は、年記は文禄二年水無月から文禄三・四年を経て慶長二年八月にわたっているが、署名はすべて「道晰」であり、改名後の彼は一貫して道晰と署名したかのように同本奥書からは受け取れる。文禄五年奥書の資料フ《吉川大本》の署名もやはり「道晰」である。だが、資料ヘ《高安本》は文禄四年初めの三冊の署名が「宗晰」であり、本書もまたそうであるから、道晰と名を改めた後にも彼は時に「宗晰」と旧名で署名していたことになる。この点について江島氏は、「永く入木道の名家として宗晰といふ名が広く知られてゐたことを慮つての故ではあるまいか」(江島本五二頁)と推測しておられたが、その可能性が強かろう。ただし、これまでに知られている道晰と改名後の「宗晰」署名が文禄四年に集中し、かつ彼自身が手元に所持した本に限られているらしいことから、時期や場合が限定された併用であったように思われる。文禄三年以

めに書き添えたとも解し得る由を述べているが、類似する「主鳥養新蔵」の署名のある資料ソ《聞書》(第一章三4)が出現した以上、新蔵自身の加筆と見るのが自然であろう。また二個の墨印は、他の宗晰(道晰)関係の文書に見られるものと同一である

降に常に「道晰」の名で彼に言及していた『言経卿記』が、文禄五(慶長元)年正月二日・十八日・廿日の記事に限って「宗晰」と記している(廿五日は「道晰」に戻る)のを参照すると、同年初頭頃まで旧名を併用していたらしい。だが、現存する文禄五年以後の彼の署名はすべて「道晰」であり、文禄四年八月の本書の署名が「宗晰」の最も後年のものである。この年記が実際に本書の本文を執筆したり節付を施したりした年月であるか否かについて問題があることは、(四)の項に言及するであろう。

〔三〕節付をめぐって

右の奥書の識語に「節付畢」とあり、本書の節付が宗晰の手に成ることは、他の車屋謡本節付との比較からも疑問の余地はない。多くはないが「くる」の記号も使用している。当初からの節付の他に、後に書き入れたに相違ない直し——二1で「車屋本系直し」と呼んだ補助記号——が全曲にわたって見られ、しかもそれは数次にわたるらしくて墨色や書体が一様でない。かなり後代の用語と思われる直しもあって本書が長く謡のテキストとして使用されたことが推測される反面、他の車屋謡本と共通で宗晰の謡教授の痕跡と解されるものもあって、これらの直しの性質はかなり複雑である。およそ種別に集めて示せば次のごとくで、資料チ《東国下》や資料ナ《下間本》に見られる宮・商・角・徴・羽の類は含まれていない。

上・中・下・中ニ下・ハル・中ハル・入・不入(音階の類)

うハ声・上声・下声・横(声の関係) 同吟・吟弱(吟の関係) スム・中濁(清濁。中濁は半濁音のこと)

当・入・引・不引・拾・ヒロフ・持・不持・持越・切・切心・ヨスル・ヲクル・越・不越・捨・捨ヤウニ・トル・ツムル・打切・一拍・一拍子・一ヨリ一ハヤク・カケテ・ソノマ、・ソノマ、引ツケテ・乗・不乗(間拍子関係)

ソト・ソ・カロク・少カロク・シツメテ・スク・ヨク廻・かゝる〔拍合の指示とは別〕・かゝりて・カケテ・ツムル・切・ユルリ・ハヤク・少ヲクレテユル／＼ト（謡い方関係）

後の加筆と見られる直しには、元来の節付の補足、歌い方をより詳細に指示したものなどが多いが、他本と校合した結果も含まれるらしい。〈松浦物狂〉の曲名下に墨筆小字で「フクライ」と注記があるのは、節付の直しの一部と同筆であるが、それは同曲の作曲者が「福来」であることを注したものに相違なく、世阿弥の『五音（上）』に「松浦 福来曲」とあるのに淵源しよう。『五音』の〈松浦〉の冒頭部が「生国は筑紫肥前（この一句のみ伝存）」なのに、本書の〈松浦物狂〉は「生国は筑紫豊前（この一句のみ伝存）」と国名が違っており、直接『五音』を底本として本文が書かれたとは考えられないが、どこかの段階で『五音』の影響を受けていることは確かであろう。〈西国下〉冒頭のサシの節付が「さしこゑ（寿永二年…）・下（ふし拌み…）・さしこゑ（人皇始り…）・下（みもすそ川…）」の形で、「さしこゑ」の指定が二つ連続しているのも、本書ではここだけながら『五音』時代には常の形であり、加筆された中間の「さしこゑ」と「下」は『五音』に基づくようである。道晰自身の節付加筆もかなり含まれるらしいことや、『五音』が観世大夫家周辺以外には影響を及ぼしていないらしくて後人が同書を参照したケースが想定しにくいこと、道晰の蒐集熱が交友関係を通して観世大夫家にまで及んだ可能性も考えられることなどは、『五音』の影響を受けての加筆は道晰自身の手かと推測される。ともあれ、本書の節付や直しの性質の複雑さを象徴しているのが「フクライ」の注記と言えよう。

主として前半の曲には朱筆の直しも施されているが、それは「上・中・下・持・入・廻・ソト・下声・スム」と濁点が多い。また首部の六曲は本文の文字の上に朱筆で丸印を添えた所があるが、それは「かう（高祖）皇帝」「かう（項羽）」など、長音Oが開音であることを示したものである。開音と合音の歌い分けに注意が払われていたことを示す意味で興味深いが、開合の混乱は江戸初期以後のはずで、これは道晰自身のものとは考えがたい。同種の朱点が

資料ヒ《毛利本》の二十七曲や資料ハ《吉川小本》の《満仲》にも施されているが、他の車屋謡本には見られない。これらの本が吉川家・毛利家の所蔵に帰した後に、所有者周辺で謡の稽古に際して加筆された朱点と見なすべきであろう。

〔四〕本文筆者をめぐって

本書の本文は、欄外や行間への後人加筆部分を除く全体が一筆で、鳥養流の達筆で書かれており、個々の字体も他の鳥養道晰(宗晰)の筆跡と酷似している。従って、江島氏も道晰の自筆と認定しておられた(江島本にその由の明言はないが、「道晰から書き与へられて新蔵が所持」とある)し、旧重要美術品であった本書が昭和三十五年に重要文化財に指定された(田山方南氏などが鴻山文庫に調査に来られた)のも、道晰自筆説を容認してのことと思われる。表も『鴻山文庫本の研究』で、若干の疑義を提起しつつも結果的には江島説に同調している。今も結論は同じであるが、実は本稿執筆の直前まで道晰筆と認定すべきか否かに迷っていた。同じ疑いを抱く人が今後にも現れることが予想されるので、迷った理由と、やはり道晰筆と認めるべきであるとの結論に達した理由とを、くどくなるが詳述しておきたい。

天正年間の鳥養宗晰(道晰)自筆の謡本は、奥書に「書之」と明記されている。資料ツ《天正小謡》・資料テ《湯屋》・資料ト《弓八幡》がそうである。文禄以後の車屋謡本にはその例がなく、奥書には「節付畢」とのみ書くことがほぼ恒例化している。この点について江島本(五五頁)には、書家として著名だった道晰に謡本を所望した人は当然本文を揮毫してもらうことを目的としたらうとの見地から、「節付畢」は「(本文はもとより)節付までして」の意に解すべきであらうとの見解が示されているが、おびただしい量の車屋謡本が出現して道晰が謡本節付の専門家として活動したことがほぼ確実視されるようになってからは、江島氏もその説を撤回しておられた。むしろ、謡本において本文よりも節付が重視されていた(本節(三)参照)ことと、道晰が謡本節付の活動を本格化していたことを反映した現象と解すべ

きであろう。そして、「節付畢」とのみある本には、道晰自筆に相違ない曲と明確に他筆の曲とが混在していることが多いのであるから、「書之」と奥書にないからといって本文が自筆でないとは言えないのと同時に、「節付畢」の奥書の本文を安易に道晰筆と認定もできないのである。従って、本書のごとき「節付畢」の奥書の本の本文筆者が道晰か否かの認定には、慎重な検討を要することとなる。

本書の本文は確かに鳥養流の達筆であり、個々の字の書体は道晰自筆の文字と酷似してもいる。ことに、次に考察する資料ノ《曲舞卷子本》所収の同じ曲と比較すれば、同文だけに、誰の目にも同筆としか思えないであろう文字が続出するのである。それにもかかわらず表が道晰自筆説に疑念を抱いたのは、天正後半から慶長初年にかけての確実な道晰筆謄本に比較すると、文字の肥瘦の差が少なくて硬い感じで、全体的に柔媚円熟の感に欠けていることが主因であった。他本にはあまり見かけない現今と同じ字体の「ね」を少なからず含む（他本は母字の「祢」に近い字体がほとんどである）ことから、平仮名の用字法を調査してみたところ（以下には、本書の初・中・後から選んだ五曲分の仮名文字一七四六字の統計を、〔甲〕仮名が一七一七字の資料テ《湯屋》、〔乙〕一六八五字の資料ナ《下間本》の〈忠度〉と対比して例示する）

アの文字の「あ」「阿」の比率が10:8（甲は32:9、乙は18:6）で、「阿」の使用度が比較的高い。

スの文字の「す」「春」「須」の比率が3:20:3（甲は10:8:7、乙は13:9:2）で、「す」の使用度が低く、「春」の使用度が高い。

タの文字の「た」「多」「堂」の比率が1:38:16（甲は1:40:7、乙は1:50:4）で、「堂」の使用度が比較的高い。

トの文字の「と」「登」の比率が49:25（甲は72:8、乙は79:8）で、「登」の使用度が比較的高い。

ハの文字の「は」「者」「ハ」の比率が42:14:22（甲は25:14:37、乙は14:26:25）で、「は」の使用度が高い。

ルの文字の「る」「類」の比率が27:23(甲は41:2、乙は30:15)で、「類」の使用度が比較的高い。

など、文禄四年前後の道晰筆の他文書とかなり相違していたことが、第二の疑点であった。さらに、奥書に書き添えられている「主新蔵」の三字が、江島氏が「筆蹟は父に酷似してゐて、彼が日夕父に親炙して同じ鳥養流の筆札に達したのであることを充分推察し得る」と言い(江島本四四頁)、さらには「之は父が子の為に書添へたと解してもよい」(同四七頁)と述べているほど道晰の筆跡——本書の筆跡——に近い事実から、息子の新蔵が筆者かも知れないと考えたことが、第三の理由である。車屋謡本にしばしば混じている道晰筆ならざる類似した書風の本文筆者の一人として、父道晰の謡本蒐集や車屋謡本刊行に協力していたことが明確で、父に就いて鳥養流の書を学んだ可能性も高い新蔵をかねて想定していたことが、その背景でもあった。

しかしながら、まず筆者が新蔵ではないかとの疑問は、明確な新蔵の筆跡が本書の「主新蔵」と《聞書》の「主鳥養新蔵」の八字以外に知られていないのであるから、すこぶる弱い懸念と言わざるを得ない。現に、本稿執筆に際して精査したところ、本書本文に現れる三例の「新」字(墨染桜)の「花の新に」、《隠岐院》の「新島守」、《先帝》の「新中納言」は、三字同書体で「新蔵」のそれとは違っている。その点だけを取り上げれば、むしろ新蔵筆の可能性は少ないことになる。そうした観点から、第三の疑いは捨てて然るべきであろう。

平仮名用字法の点は、それが安定している世阿弥などとは違って、決定的な障害とは言えない。表はかつて、「宝山寺本『風姿花伝』『至花道』」の筆者は竹雲軒にて、竹雲軒は鳥養宗晰か」と題する論考(『能楽研究』第七号(昭和57年3月))において、道晰の平仮名用字法の特徴を調査・報告したことがあるが、それはかなり不安定で、時期により、書写態度によって変動の幅が大きい。例えばハの字における「は」の使用数なども、初期に少なく、中期に激増したが、晩年にまた減少しているのであって、前掲の本書の用字法の特徴も、文禄四年前後の道晰の文書との比較では大

きな差に見えるものの、他の時期の分をも視野に入れば道晰の用法の範囲内と言えないこともないのである。他の道晰筆跡に稀とした「ね」の字も、資料ス《兼載独吟》などには見られ、右肩を鋭角的に曲げて真つすぐ下に引く特色ある筆法が共通しているし、ノの文字に「能」「乃」「の」を多用し、稀に「農」を使用するが、「乃」「農」は助辞に限られ、「ノタマハク」「タノム」とかの語頭や語中のノには「能」か「の」しか使わないという道晰の筆跡に顕著な現象（それが道晰独特の用字法なのか否かは未調査）は、本書にも共通している。そうした一致点をも参照すれば、第二の疑点もまた、さほど強調できないことになる。

書風全体から受ける印象が柔媚円熟さに欠けるとの指摘は、同じことを資料ナ《下間本》の道晰筆ではないと認定した分についても述べた。それは、鳥養流をも含む尊円流系統の書風に類型性が強く、同系統の書家の文字が酷似している容易に個性を指摘できない中で、天正十六年の年記と「書之」の奥書がある資料テを初めとする天正後半以後の確実な宗晰（道晰）の筆跡が、肥瘦の差が大きくて丸みを帯びた柔らかな書風を最大の特徴としてしていると認められ、他筆とはその差異が最も目に立つからである。ともに柔媚さに欠けるとはいつても、《下間本》の過半を占めるやや硬い感じの筆跡と本書とは、個々の文字の書風が異なり、平仮名の用法にも大差があつて（「は」が稀で、ニに「丹」を多用する点など）、両者は明らかに別筆である（『鴻山文庫本の研究』が「《下間本》の書風に最も近い」としているのは、《下間本》に混じている道晰筆の分と比較したため）。むしろ注意されるのは、天正三年以前の書写に相違ない資料タ《曄道本》の本文がやはり柔媚さに欠けている事実である。曄道本と本書の本文とを比較すると、個々の文字の書風が酷似するのみならず、全体の印象もかなりに近い。ただし、本書の方が天正十六年以後の道晰の筆跡に通じる柔らかみを持つ感じを、《曄道本》と対比した場合には強く受ける。《曄道本》と天正十六年以後の道晰筆跡との中間に位置するのが本書本文の感じなのである。従って、《曄道本》を宗晰（道晰）自筆と認める以上は、本書をも道晰筆と認定するのが自然のは

ずである。精査を繰返すにつれて個々の文字の書風の酷似例が続々と目に入ってもきた。六に考察する資料ハ《吉川小本》から知られる書写態度の相違に基づく道晰の書風の幅の広さを参照しても、自己の手控え本として書いたことの確実視される本書と、他人に贈るために執筆した天正後半の諸本(資料ツ・テ・ト)などでは、全体の印象が若干は異なることも当然視していいことであろう。とすれば、第一の疑点も解消することになる。

そうは思いながらも、本書を道晰筆とすることになお釈然としない感じが残ったのは、道晰筆跡に顕著な柔媚さが欠如していることを、《曄道本》の場合は十年以上もの年代の隔たりが生んだ書風の変化——後になって道晰の書風に柔媚さが増した——として説明できるものの、文禄四年の年記を持つ本書の場合はそうは言えないためである。前後ともに道晰は柔媚円熟した書風の筆跡をのみ残しているのであるから。その点をあれこれ詮索しているうちに思い至ったのが、本書の奥書の「文禄四年素月」の年記は節付を終えた年月であり得ても(それすらも疑わしい)、本文を書写した年月であるとは必ずしも言えないのではないか——本文はかなり早い時期に書かれていたのではないか——との推測である。もしそうなら、書風が資料ツ・テ・トなどほど柔らかくないことも説明可能となるし、《曄道本》と全体の印象が近いことも納得できることになる。右の推測は、珍曲をも含む三十曲もの謡物を一度に書写することは、内容の別本を転写したのでない限りあり得ないことではないかとの疑問から発し、後述するごとく上掛り系統の曲をも含む内容から、まとまった別本を転写したとは考えにくいことや、道晰自身が加筆しているらしい節付が文禄四年以前なのか以後なのかの詮索を通して、漸次深まってきたが、やがてその推測が当たっていることを思わせる傍証的な現象も見出だし得た。それは、天正九年の資料チ《東国下》と本書の同曲との関係である。

両書の関係については、本章二(資料チ《東国下》の考察)において「文字づかいに共通点があり、なんらかの影響関係があるらしい」と述べているが、それは不徹底な調査に基づく曖昧な表現であった。精査してみたところ、両書の

本文は一方が他方を写したとしか思えないほど密接な関係にあり、節付の直しにも共通点が多く、両者が転写関係にあることは確実と言える。例えば末尾部分の文字づかいは、本書の〈東国下〉では次の形である。

……れうは泉水のうき鳥の うは毛の霜をうちはらふ。右は蒼海遙にて 漁村の孤帆かすかなり。頓教智解の衆生の。火宅の門を出そめし。羊車鹿車大牛の 車かへしは是かとよ。上 伊豆の府にも着しかは。南無や三嶋の明神。本地大通智勝仏 過去ぢんでんのことくにて。黄泉中有の旅の空。ぢやうあんみやうのちまたまでも 我らを照し給へと。ふかくそ祈誓申ける 雪のふる枝の枯てたに 二度花や咲ぬらん

資料チ《東国下》もほとんどまったく同じ文字づかいで、末近くの傍線の三字が仮名になっているだけの相違である。「伊豆の国府」を「伊豆の府」と書く特異な共通点をも含むかかる極端な一致は、転写以外の関係では生じないことのはずである。文字づかいが一致するだけでなく、両者別筆であるにもかかわらず、書体の酷似する文字が随所に現れ、それは本書としては当然の道晰の書体であり、チの書風とは合わない字体なのである。例えば右の二行目の「鹿車」の「車」は、上下の同字との変化を意識してであろうが「計」の草体（「斗」と読める字）に近い字体で書かれているが、本書では縦の線が真ん中にある「斗」とは区別し得る書体で、他曲にも用例が見られる（〈隠岐院〉の「御同車」など）が、チでは「斗」としか読めない字になっている。ちょうど百例現れる「ノ」の仮名の93例までも「の」の字体を使用（別に「乃」が4例）しているチが、2例（他の1例は「農」）だけ接近した所に交える「能」も、本書がその字だったのを踏襲したための異体字採用であろう。その他、文字づかいの相違の実態（本書の「みつから（自ら）」をチが「水から」と誤るなど）から見ても、チが本書の〈東国下〉を転写したとしか考えられないのである。

つまり、天正九年（一五九二）の資料チ《東国下》が文禄四年（一五九五）奥書の本書の〈東国下〉を底本として書写されていると認められるわけで、それは本書の本文が天正九年以前にすでに書かれていたことを物語る（〈東国下〉の位置は本書末尾）。

子の天正九年の年記が百パーセント確実とは断言できない(二一参照)ので、若干の疑義は残ろうが、前述の推測は正鵠を射ていたと言えるであろう。同じ天正九年に鳥養宗断(道断)は金春喜勝から資料ア《喜勝目録》を相伝され、それには広義の曲舞謡が二十八曲含まれていた。三十曲を収める本書程度の曲舞本を道断が天正九年段階で手元に所持していた可能性もすこぶる高い。本書こそが天正九年以前からの道断手沢の曲舞本であったのであろう。

以上に述べたような考察を経て、表はようやく本書の本文道断自筆説に安心して同調できるようになった。天正十六年以後の道断筆跡との印象の違いにこだわったことが、当初は予期しなかった本文天正九年以前書写説の提示につながったわけである。

なお、本書奥書年記の文禄四年素月(八月)は、道断を『謡抄』編纂に重用した関白豊臣秀次が高野山で七月十五日に切腹させられた直後である。『謡抄』と道断の関係については後章にまとめて述べるが、秀次の死が道断にとって大きな衝撃であったことは確かであろう。そうした境遇の変化が道断に隠居的な気持を生ぜしめ、手沢本の曲舞集に奥書を添えて子の新蔵に譲ったことなども、想定できるのではなからうか。新蔵の経歴についても後章に譲るが、彼は謡に造詣が深かったし、当時すでに家督を継承してもおかしくない年輩に達してもいたのである。

〔五〕所収曲と本文をめぐって

第一紙の表裏の目録は、三段五行(上段・中段・下段の順)に次の三十曲の曲名を列記している。曲ごとの内題も、それを削ってサシを書き込んだ(由良物狂・嶋廻(12・15)と、へゆつりは(22)・へ舟立合(23)以外は、目録と同文字で書かれている。説明の便宜上、以下の所収曲一覧では、曲名上に曲順番号を添え、曲名下には、朱筆の書き入れと四周や行間の宛漢字の有無を注し、さらに、江戸初期以前の他の曲舞資料におけるその曲の有無を参考のために記した。

参照した他の曲舞資料の略号等は曲目一覧の後に記した。

17	上宮太子	朱	：	喜	両	和上下	光36	石	乱上	海	五音下
16	雪 翁	：	：	：	両	和上(四季)	光30 36	石(四季雪)	乱下	海	禅竹『五音三曲集』
15	嶋 廻	朱	漢字1例	喜	両	和上下	光30 36	石	乱上	海	安喜本
14	賀茂物狂	：	：	喜	両	：	光30 36	石	：	海	安喜本
13	高 野	朱	：	：	両	：	：	：	：	海	五音上
12	由良物狂	朱	漢字	喜	両	和上下	光30 36	石	乱下	海	五音下
11	松浦物狂	朱	漢字	喜	両	：	光30 36	石	乱上	海	五音上
10	丹後物狂	朱	漢字	喜	両	：	：	：	：	：	五音上
9	九 品	朱	漢字	：	：	：	：	：	：	海	
8	李夫人	朱	漢字	喜	両	：	光30 36(花篋)	：	：	海	五音下・喜勝本・安喜本
7	籠祇王	朱	漢字	：	両	：	：	：	：	海	安喜本
6	墨染桜	朱	漢字1例	：	両	：	：	：	：	海	
5	芳野琴	朱	漢字	喜	：	：	光30 36	石	乱下	海	五音上・喜勝本
4	鼓 瀧	朱	漢字	喜	両	和下	光36	石	：	海	
3	玉 取	朱	漢字	喜	両(二墳)	：	光30 36	石	乱上	海	
2	六 元	朱	漢字	喜	両	：	光36(実方)	石	乱下(実方)	海	
1	奈 須	朱	漢字	喜	：	：	：	石	：	海	

18	隱岐院	朱1例	:	喜	両	:	光30 36	石	乱上	海
19	弓箭立合	:	:	喜	:	:	:	:	:	:
20	木曾願書	:	:	:	:	:	:	石(木曾)	乱下	海
21	富士山	:	漢字1例	喜	両	:	:	:	:	海
22	弓弦葉	:	漢字2例	:	両	和上下	光36	石	:	海
23	船立合	:	:	:	:	:	:	石	:	:
24	香椎	:	漢字	喜	両	:	光30 36	石	乱上	海
25	当願暮当	朱1例	:	喜	:	和下	:	:	:	海
26	金塔	:	:	:	:	:	:	:	:	:
27	八景	:	:	喜	両	:	光36	:	:	海
28	先帝	:	:	:	両	:	光30 36	石	乱下	海
29	東国下	朱1例	漢字1例	喜	:	:	:	:	:	海
30	西国下	朱少々	漢字1例	喜	:	:	:	:	:	海

喜——《喜勝目録》(資料ア)所収の曲舞謡の曲目「第一章—1参照」

両——鴻山文庫蔵江戸初期筆下掛り曲舞集『両曲鈔』〔『鴻山文庫本の研究』二34参照〕

和——觀世宗家蔵觀世宗節筆曲舞集『大和音曲之抄』上下二冊〔『觀世宗家所蔵文書目録』四14参照〕

光——元和頃刊古活字本『光悦曲舞本』〔30が三十曲本、36が三十六曲本。『鴻山文庫本の研究』一〇一参照〕

石——正保頃石田少左衛門盛直刊觀世流『曲舞集・曲舞小諷揃』二冊〔『鴻山文庫本の研究』一〇一参照〕

乱——寛永三年二月刊観世流『乱曲揃』上下二冊『鴻山文庫本の研究』一〇二参照]

海——鴻山文庫蔵曲舞集『曲海』(資料口)「本節3、および『鴻山文庫本の研究』一37参照」

(以上の他に、世阿弥音曲伝書『五音』(上下二冊)、鴻山文庫蔵金春喜勝筆小謡卷子本〔喜勝本〕・般若窟文庫蔵金春安喜筆小謡曲舞本〔安喜本〕、および禅竹伝書所収の曲を、最後に記した)

右の曲目には、他本では異なる名で収められている曲も幾つかある。1〈奈須〉は文字が特異で〈那須(与市)〉が普通。2〈六元〉は完曲〈実方〉のクセに取り入れられてその名でも呼ばれ、リュウゲンと読むので「隆源」などの当て字で書かれた例もある。8〈李夫人〉は完曲〈花筐〉の曲舞に転用されているので完曲の名でも呼ばれる。13〈高野〉は『平家物語』の「高野卷」に基づく謡なので、〈高野卷〉と題した本もある。16〈雪翁〉は〈四季〉〈四季雪〉〈雪〉〈雪女〉など別称が多く、本書の曲名は老翁がシテの完曲の一部だったことを思わせるが、そのような曲が伝存せず、〈雪女〉には完曲が存在する。18〈隠岐院〉は完曲〈隠岐物狂〉の中でも歌われるのでそうも呼ばれ、20〈木曾願書〉は〈木曾〉とも呼ぶ。22〈弓弦葉〉は〈讓葉〉とも書かれるが、それらは完曲〈淡路〉の別名で、〈淡路〉が普通である。27〈八景〉は完曲〈近江八景〉の一部であるが、曲舞部分と区別して〈論議八景〉〈近江八景論議〉とも呼ばれる。

三十曲のうち、〈弓箭立合・船立合〉(19・23)は春日若宮祭の松の下立合に歌われる特殊な謡物、〈木曾願書〉(20)は同名(または〈木曾〉)完曲の一部たる謡物、〈高野〉(13)はサシ・下ゲ哥・上ゲ哥形式の独立の謡物、〈八景〉(27)は〈近江八景〉の中入前のロング謡であるが、他の二十五曲は曲舞謡である。謡物や立合謡やロング謡をも含めるのは曲舞本に多く見られることで、右に参照した他本の曲目からもそれは明瞭であろう。

曲舞謡の二十五曲には、当時すでに完曲の一節に取り込まれていた曲が多い(1・2・3・4・5・6・7・8・10・11・12・14・15・16〔雪女〕・17・18・21・22・24・25・28・29〔逢坂盲〕)が、世阿弥の『五音』によって曲舞謡として作られ

たことの知られるへ李夫人・由良物狂・上宮太子・東国下・西国下(8・12・17・29・30)を初め、へ六元・玉取・鼓滝・嶋廻・雪翁・隠岐院(2・3・4・15・16・18)など、本来は独立の謡物だったと推測される曲がかなり多く、曲舞謡としてしか伝存しないへ九品・金塔(9・26)をも加えれば過半に達する。他の十二曲は一応同名完曲の曲舞部分であるが(へ那須・吉野琴・富士山・弓弦葉・当願暮当(1・5・21・22・25)は本来独立の謡物だったかとの疑問も残る)、そのほとんどは当時演じられていなかったと認められる遠い曲である。謡物として作られた曲舞謡と、遠い曲の曲舞謡とを集めていると言えよう。それは本書のみならず、曲舞本全般に顕著な現象であり、世阿弥の『五音(下)』に見られる闌曲の傾向が、後代の曲舞本(乱曲集)に継承されたもののようである。

広義の曲舞はクリ・サシ・クセから成るのが基本形であるが、曲舞本ではサシから収めるのが江戸期の諸本の常である。それは室町期からの慣習らしく、本書の二十五曲も、サシ・クセのみが十三曲(3・6・8・10・11・14・17・18・21・24・25・26・30)で過半を占め、上ゲ哥・クセの形が一曲(28)、クセのみが八曲(2・4・5・9・12・15・16・22)で、クリ・サシ・クセの完形は三曲(1・7・28)だけである。クセだけのへ由良物狂とへ嶋廻には後人が曲名を削ってそこに小字でサシの文句を書き添えてあるが、それもサシから歌うことが恒例化したことの反映と解される。

所収三十曲中の二十曲は、鳥養宗晰が金春喜勝から相伝された謡の目録たる資料ア『喜勝目録』に含まれている。同目録に見える謡物では、曲舞謡のへ稲荷・初瀬六代・玉嶋・高野物狂・碁・室ずみ・小原御幸・光源氏(須磨源氏)の八曲と小謡のへ一休御作・五節供諷・四季祝言・明月諷を収めていないが、本書が喜勝から相伝した曲を基盤として編まれていることは確かであろう。比較・対照した曲舞本の中では、網羅主義で曲数の多い『曲海』を除けば『両曲鈔』との一致度が高いことも、ともに下掛りに伝来した曲舞謡を主体にしていることによると解される。その一方、『喜勝目録』に見えない曲に金春流とは縁がないはずのへ船立合(春日若宮祭に観世・宝生が立合で舞った曲)を含む点は、

道断が流儀を越えて広く曲舞謡を集めていたことを示しており、それは謡本において金春流所演曲を大きくはみだしているのと共通の現象である。また、所収曲のほとんどは比較した他の曲舞本のいずれかに含まれているが、〈九品〉(9)と〈金塔〉(26)とは珍曲に属する。高野山を浄土にたとえた内容の〈九品〉は、『曲海』が収めるものの、それは道断本を底本とした由が注記されている。本書以前の記録は皆無であり、後代の新作に相違ない番外曲〈九品〉(『未刊謡曲集』二十二所収)に少しく改変した形で取り入れられているのを除けば、江戸期刊行の曲舞集にもまったく見えず、江戸中期の書写で下掛りの珍しい謡物を集成している『上杉本乱曲集』(能楽研究所蔵)に〈金塔〉と並んで収められているのを除けば、後年の記録も稀な曲なのである。鞍馬寺の縁起謡と言える〈金塔〉は稀覯性がより強く、右に述べた『上杉本乱曲集』に入っているのと後代の名寄に稀に曲名が見える以外は、他に記録のない珍曲である。サシ・クセの文句だけからは「金塔」なる曲名は生れないはずなので、この曲舞謡を含む完曲があったかと思われるが、伝存してはいない(『未刊謡曲集』二十七所収の同名曲は、クセもない後代作の別曲)。道断が山科言経に新作小謡を所望した事実(前節3末尾参照)を考慮すれば、この二曲が道断周辺で成立した新作の曲舞謡であることも想像できるが、それにしては固有名詞に仮名文字が多すぎよう。いずれにせよ、かなりの珍曲なので、右の二曲の文句を掲出しておく。濁点・区切り印は原形に従ったが、濁点はすべて節付よりは後の加筆のようである。

九品

下九品はどこく 高野天王かぶうじ。日本の九品は 上三品と聞物を。爰そしやうほん 上生のうてなの 唱ふるこゑも高野山。又うへもなまみたふや南無阿弥陀仏。上四の季にもとりわきて。冬の空にも成ぬれば。山風さそへは散るはなの 雪おくのゐんハ 有難くそおほゆる。山陰の賀茂のかね。此身もふせうを。うちつれく生れそゆかん彼国の。はちすの御座ところ。我も仏のおまねして。蓮花谷にやすまん この蓮華谷にやすまん

金塔

さしこゑ 王城のうしとらにあたつて五色の雲あり。是をあやしめおはしまし。朝なくミ給へは。ずいうん光をはなつて洛陽にたつ。菩薩ふしきにおほしめし。輿馬にもめされず歩行のていにて。彼雲さして行給ふ。

下こうしやう彼山に 程なく至り給ひつゝ。しはし深山辺の 木のまもりくる月影に 庵を結びおはしまし。真言秘密のれゐの声 法華読誦隙もなく。じゆほうを尽して ぎやうこうをいたし給ひしに。去程に彼山に 年へてすめる鬼神あり。菩薩をおかミ申さんと 美女と現しつゝ 夜々にあじつに参れとも。ほさつはあけて見給はす。上 其時彼女。たけ十丈の鬼と成て。こうしやう菩薩を忽に 多じきにせんといかりけり。時に空より。正身の大悲多聞天 あしけなる馬にめされて。弓箭をもつてい給へハ。鬼神はさりて失にけり。其後毘沙門ハ 又天上し給へハ。其御跡に馬と鞍。のこるによりて彼山を。鞍馬と名付て れいげんの御寺成けり

各曲の本文は、変動の少ないのが曲舞謡や謡物の常なので他本と大差はないが、小異はかなりある。『五音(下)』に本文が記載されている数曲を比較したところでは、江戸期の諸本が『五音』と相違している所の過半は本書ですでに江戸期の形になっているが、『五音』の形を本書が継承している所も少なからずある。例えば「西国下」の前半末尾の文句は、江戸期の諸流では「世をうき波の寄る辺なき、身の行く末ぞ悲しき」なのに、本書は「世をうき波の夜の月、しづみし影はかへらず」で、『五音』と同じく、最末尾の「あらいそ波のよるの月、しづみしかげはかへらず」がほぼ同文の繰り返しになっている。〈李夫人〉のクセ冒頭が、諸流の〈花筐〉のクセ(李夫人の転用)の「御門深く嘆かせ給ひて」とは違って「みかど深く嘆きて」なのも、『五音』と同じ形である。後代に上掛りと下掛りで相違する所は下掛りの形がほとんど本書と一致するが、稀には上掛りと同じ所もある。下掛りが後に改変したことによるのであろう。前述した〈松浦物狂〉の「筑紫豊前の者」のように、本書が誤写らしい所も稀にはあるが、総じて、江戸期の諸本に

勝る良質の本文を伝えていると言える。

なお、本書には、過半の曲(後半に例外が増える)の本文の上部の空白(または左右。時には行間)に、仮名で書いた本文に対する当て漢字が加筆されている。かなり学識ある人による一種の解釈の作業であるが、本文とは別筆である。数次にわたるであろう節付の加筆のいずれかと同筆かも知れないが、明らかでない。

〔六〕総括的評価

奥書に「主新蔵」と加筆のある本書は、道晰の息子の鳥養新蔵が後に所持したことは確かであるが、新蔵のために揮毫したのではなく、道晰自身が自己のための本として書いて、天正九年以前から長く所持していた本——道晰手沢本——であつたろうと推測される。そのことはすでに述べたが、新蔵のために書いたと見られる車屋謡本が他に伝存しないこと、貴人などに依頼されての執筆にしてはさほど丁寧な書き方でないこと、道晰自身の書き入れと認められる節付の加筆がかなり見られること、本書と同じく「鳥養宗晰」「鳥養道晰」の印を押捺した資料ハ《吉川小本》が道晰手沢本であることなども、その傍証となろう。天正九年の資料チ《東国下》のみならず、次に考察する資料ノ《曲舞卷子本》も、同じ曲は本書を底本としていると認められ、道晰が手元の本書に基づいて多くの曲舞本を書写したらしいことが推測される。その資料ノに本書が収めない曲が含まれることや、後述する資料ロ『曲海』が本書にない曲を道晰本に基づいて書写または校合していることから、道晰の所持した曲舞本文は本書だけではなかったと考えられるが、それは伝存しておらず、車屋謡本曲舞の根本資料が本書であると言える。

ところで、本書は数十曲まとまった曲舞集としては最古の部類に属する。金春禅鳳が曲舞集を遺していたらしいことが『曲海』の注記から推測されるものの伝存せず、室町時代の曲舞集は一つも存在が知られていない。道晰の師匠

の金春喜勝が小謡と曲舞謡とを合写した卷子本が鴻山文庫に蔵されているが、曲舞は五曲(吉野琴・当願暮頭・住吉橋姫・放下僧・花篋)に過ぎず、曲舞集とは言えない。観世宗家蔵の天正初年頃観世宗節筆『大和音曲之抄』二冊が計十七曲(雪山)のみロング謡を収めているのが、管見では最も古い曲舞集である。それに次ぐのが本書で、下掛りの最古本であると同時に、曲数では『大和音曲之抄』を凌駕している。所収曲の大半は本書が最古の本文なのである。そうした古さと量の豊富さとが、本書の最大の価値であろう。節付や本文の具体的な特色についてはすでに言及したが、一時代前の室町期の曲舞謡の実態を推測せしめる資料としての価値も大きい。

本書は、資料ハ《吉川小本》・資料フ《吉川大本》と並んで、国の重要文化財に指定されている。数多い車屋謡本の中でこの三種だけが指定されたのは、この三点が旧重要美術品でかつ所在が明らかであったため早くに審査の対象に選ばれた結果のようであり、他の車屋謡本に比較してこの三種が特に資料的価値が高いと判断されたことではない。「書蹟の部」の文化財として指定されたのは鳥養道晰自筆との認定に基づくのであろうが、筆跡の流麗さにおいては本書を凌駕する車屋謡本が他に多い。本書の場合はむしろ、部分謡に関する貴重な資料ゆえに重要文化財に指定されたと受け取ればすんなりと納得できる。いずれにせよ、重要文化財としての価値は十分に備えた本であり、江島氏の愛蔵本でもあった。鴻山文庫が法政大学に寄贈されて、同本をじっくりと調査し得るようになったことが、かかる詳細な解題執筆を可能ならしめた背景である。今さらながら江島氏の遺徳が偲ばれ、本書に関する所説について氏の御意見をお聞きできないことが残念である。

2 道晰署名曲舞卷子本（資料ノ《曲舞卷子本》）

鴻山文庫所蔵本であるが、江島本に言及のない新資料。入庫の経緯を表は聞いていないが、昭和三十五年前後に本書を調査した記憶があり、それ以前に鴻山文庫に帰したのであらう。『鴻山文庫本の研究』二二に「道晰筆卷子本曲舞」と題して解題を添えてあり、以下はそれを改訂・増補したものである。

高さ188ミリの卷子本。縦229、横64、高さ56ミリの木箱に収め、蓋の表に五曲の曲名を墨書し、箱の前側面の貼紙に「曲舞／鳥飼道晰／自筆巻」とあるのは、ともに江島氏の筆である。かなり古い箱ではあるが、いささか大きく、入庫後に他の箱を転用したのかも知れない。箱の蓋裏に、表に「鳥飼道晰 鳥廻／北に向へは（角印）」、裏に「元文／丁巳／壬霜 朱印（神田道伴）」とある古筆家神田道伴の極め札が貼付されており、元文二年（1797）閏十一月のもの。

暗緑色地に黄色の模様を織り出した布表紙があり、見返しは少々金を刷いた白い紙。題簽はなかったが、後に江島氏が「五 くせまひ」と書いた紙を題簽として貼り付けてある。紫色の紐はさほど古い物ではない。紙は厚葉斐紙のごとく見えるが、薄い斐紙に同質紙で全面裏打した改装本で、原料紙には裂け目が残っている。横約52～57センチの料紙を十枚つなぎ、首尾の礼紙や表紙を合わせた全長は約六メートルである。

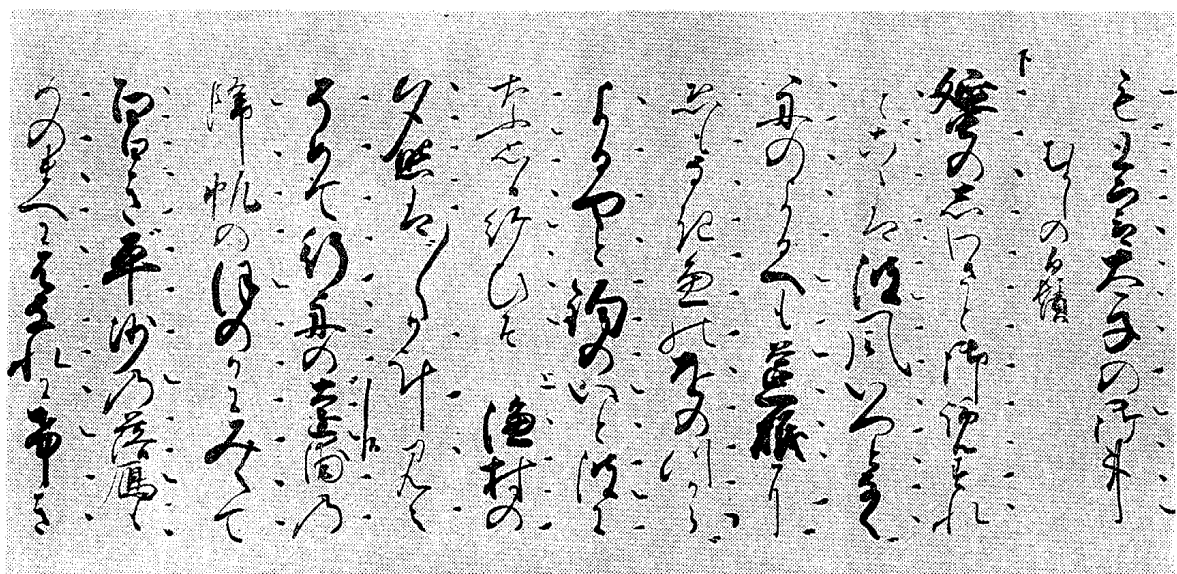
内容は曲舞集で、へ嶋廻・かんせうしやう（菅丞相）・玉とり・上宮太子・むかしの白鬚（八景）の五曲を書き連ねている。各曲とも冒頭に右記の内題があるが、それは一行分空けておいた所に後に書き入れたもののようで、同筆ながら文字が本文より格段と小さい。本文は鳥養流の達筆で、一行九～十二字程度に大きな字体でゆったりと書かれており、一見して鳥養道晰筆と知れる肥瘦の差の大きい書風である。末尾にかなりの空白を置いて「道晰（花押）」と署名

があり、疑問の余地のない道晰の筆跡である。彼の筆跡の代表に挙げてもいいほどの麗筆ではなからうか。節付は比較的簡単で、「上・下・さしこゑ」の指定と句切り印・へ印を除く節付記号としては「しほる」があるだけで、ゴマ点以外の補助記号はなく、「くる」も一つも使っていない。

収載五曲の内、〈菅丞相〉以外の四曲は資料ネ《曲舞本》と重なり合う。その両者を比較してみると、〈玉取〉のサシを本書が省略してクセから書き始めているのと、〈八景〉首部の上ゲ哥の冒頭「漁村の夕照は」を本書が「く」で反復しているのと、本書の一・二の誤写以外は、本文はすべて一致する。やや特異な草体の漢字が共通する点や、〈八景〉で「釣りの営み」を「釣のいと波」と書いている類の誤字の共有などからも、両者が転写関係にあることは確実であり、〈玉取〉のサシの省略などから、本巻がネを底本として本文を書写したものと考えられる。総じて本巻はネより仮名を多用しているが、誤読される恐れのあるネの漢字を仮名にしたと思われる所が多く、またネと同じ所の助辞の仮名は字体を変えていることが多い。ともにネに基づいての意識的な改変の観が強いし、書風の差もネの先行を物語っている。

本巻の書写年代は、鳥養道晰が「宗晰」から「道晰」に名を改めた文禄初年以後であることが署名から知られるものの、より狭く限定する手掛りがない。しかし、現存する車屋謡本の卷子本が本書を除けば天正年間の物ばかりで、文禄以後には道晰の謡本書写が冊子本に限られていることから、慶長以後まで下ることはなさそうに思われる。書風が天正十六年の資料テ《湯屋》にかなり近いことも、文禄初年の筆であることを思わせる。署名が「道晰(花押)」の形で他本のように謙称の一種たる「沙弥」号を添えていないのは異例に属し、本巻が誰にも相伝しないままに終わったことを推測せしめる。本文末尾と署名の間の空白が大きいことや、節付が簡略なもの、そのためではなからうか。その観点からは、「道晰」の署名が本文書写よりも後年であることも考えられるようである。

本巻の内容で注目されるのは、五曲目に「むかしの白鬚」と題していることである。資料ネ《曲舞本》では同じ曲を〈八景〉と題し、他の曲舞本もそれか〈近江八景〉が普通で、完曲〈近江八景〉の中入前の下ゲ哥・上ゲ哥・ロングの部分なので〈近江八景論議〉とか〈論議八景〉とも呼ばれる。同曲の曲舞謡と区別するためである。完曲は白髭明神がシテなので「白髭」と異称される可能性は確かにあるが、別曲〈白髭〉が著名曲のためか、実際に〈近江八景〉を「白髭」と呼んだ記録は他にない。『五音』所収の観阿弥作の〈白髭曲舞〉は完曲〈白髭〉の曲舞部分と同文であり、観阿弥作の曲舞謡に前後を添えて金春禅竹が完曲〈白髭〉を作ったと伝えられている(『能本作者注文』が、禅竹以前から〈近江八景〉が存在していて「白髭」と呼ばれた形跡もない。従って、本書の「むかしの白鬚」の題記が何によったのか不審なのであるが、結論のみを言えば誤解に基づくものと考えられる。このロング謡は、末尾の「老の身をいさしらひげと御覧するか、神ぞかしといひすてゝ、宮路のかたに歩みゆく」の文言などから、白髭明神関係の完曲の一部であることは容易に知られる。完曲〈近江八景〉の存在を知らぬ人が読んだ場合、別曲〈白髭〉の古い形かと推測することは十分あり得よう。このロング謡が別曲〈白髭〉の一部だったり、〈近江八景〉の一部の形で観阿弥作の〈白髭曲舞〉が歌われた形跡も可能性もまったくないし、そうした事態



(36) 道晰署名曲舞卷子本(〈むかしの白鬚〉)

を推定すべき手掛りも右の題記以外にはない。総計二三五番に及ぶ車屋謡本の完曲に〈近江八景〉は含まれていないから、道晰は同曲の完形を知らなかったと見られる。後に加筆した曲名でもあり、誤りと断じていいであろう。道晰に同曲の別演出の異文を「昔の○○」と呼ぶ傾向があること(後章で言及するはず)も参照される。『鴻山文庫本の研究』が「もし本書の題目が事実を伝えているものならば、現行の白髭は新作ということになり、観阿弥作詞作曲の白髭の曲舞などとも関連して、一つの問題を提供するものではあろう」と述べているのは、仮定の形ながら、問題の題名を過大評価していることになろう。

なお、資料ネ《曲舞本》が問題の曲を〈八景〉と題している事実と〈むかしの白髭〉との前後関係について、ネの文禄四年の年記を本文執筆の時と見る立場から、本巻が先行し、後に正しい曲名を知ってネでは〈八景〉に改めたと解することとできそうに見えるが、資料ア《喜勝目録》にすでに〈八景〉が含まれているから、そうではない。〈八景〉の名で喜勝から相伝し、ネにもその名で記載したのを、道晰時代になって「〈八景〉は〈白髭〉の古い形か」と推測し、本巻にそう題したものと考えなければならぬのである。本巻の本文も実際には早い時期に書かれたもので、後年に署名を加えたと推測することも可能であることは前述したが、その場合とても、ネの本文よりは後と解するべきであろう。前項に述べたネの天正九年以前書写説はさておき、書風の差が歴然としているのであるから。

3 浅井家旧蔵曲舞集『曲海』（資料口《曲海》）

車屋謡本そのものではないが、鳥養道晰と密接な関連を持ち、江島伊兵衛氏の車屋本研究を大きく前進させる契機ともなった曲舞集が鴻山文庫に蔵されている。関西の観世流の名家であった浅井織之丞家（初め大阪、後に京都）伝来の『曲海』がそれで、他の多数の浅井家旧蔵の能楽資料と共に戦前にすでに鴻山文庫に帰っていた。同書については、江島本一五頁に言及があり、表も『鴻山文庫本の研究』「一 上掛り写本」の項で、**37** 浅井家旧蔵本「曲海」一冊」と題して解説を加えているが、江戸初期以前の曲舞謡のほぼ全貌を把握するに足りる好資料でもあるので、曲舞謡資料としての特色と鳥養道晰との関係を重視しつつ、ここでより詳細に紹介しておくことにしたい。

〔一〕書誌等の大概

『曲海』は綴帖装の升型本（縦・横180ミリ）で、七帖を綴じ合わせた分厚な本（厚さ約20ミリ）。濃紺表紙の左上に「曲海」と題した白題簽（縦52、横25ミリ）がある。見返しは本文料紙と同質の斐紙。綴糸は濃い紺色。厚紙に模様入り鶯色の絹を貼った帙に入れ、黒漆塗り被せ蓋（「三」字を菱形で囲んだ金色の紋あり）付きの箱に収めてあるが、帙の題簽や箱の側面の貼紙の題記は江島氏の手であり、入庫後、しかもこの本の価値を認識した際（終戦前）に帙を作り、昭和三十年前後に他の箱を転用してそれに収めたもののようである。

料紙はほとんどが中葉の斐紙であるが、一部に厚葉の斐楮交漉紙を混じる。全二〇七丁。第一丁と末の四丁は遊紙。第五〜七丁も白紙のまま。第二・三・四丁が目録で、七行三段（縦に続き、長い曲名の所だけ二段）に計一二四曲の曲名を

列記するが、末の五曲分は明らかに別筆(木曾願書本文と同筆)で、後人加筆に相違ない。本文は片面七行、漢字まじり片仮名書(木曾願書のみ例外)で、楷書風に丁寧に書かれている。ただし、「隙」の旁を楷書の「草」と書き、「后」を「各」に近く書く類の、翻印に困惑する正確ならざる異体字がかなり混じり、後半は丁寧さが減じる。後人加筆たる末の二曲(木曾願書・一休)以外は一筆と認められる。同曲の別掲分を一々数えれば計一二七曲の謡物(二曲のみ完曲)を収め、各曲は一行の内題を置くだけで連続して書写しているが、末尾の(隠岐物狂・東国下・西国下・哥占)の四曲は改丁したり内題前に空白を置いたり、文字も以前の分より大きく、書式が若干異なる。目録にも別筆で書き添えられているこの四曲は、同筆ではあるが、それ以前の分とは時を隔てて書かれたらしい。

目録の曲名にも内題にも、朱筆で曲順を肩書しているが、同曲の別部分を続けて別に記載した場合の内題「同」には番号を添えず、目録ではもともと「同」を記載していない。かつ目録分・内題分ともに「七十三」が重複し、末の(木曾願書)の番号は「百廿三」である(最終の(一休)には番号肩書なし)。

節付は大半が上掛りであるが、約二十曲ほど本来の節付が下掛りの曲も混じる。ただ、小段表記などが上掛りの形にアレンジされていることが多く、「しほる」の節のない部分は上掛り節付と誤認しやすい。また朱筆・墨筆(稀には紫筆)で節付(時には文句)の校合を書き込んである曲が多く、ほぼ半数の曲の内題の下(稀には曲末)には底本や校合本に関する識語が注記されており、それが数行に及ぶ曲もある。この注記は本書の性質を物語る重要な資料なので、後掲の曲目一覧の中に全文を載せておく。実際には校合が施されているのに注記のない曲も少なくない。節付校合の後にも長期にわたって謡のテキストとして使用されたり、後代の加筆が各種見られ、「一拍子」「和」など間拍子・吟に関する術語、欄外注記の形の「今春方此曲ヨリランキヨクニナル」(由良物狂)クセ冒頭の上欄、「コンカウ方此上ケハヨリキンツヨクウタフ」(同曲)などの長文、仮名の解釈に属する振り漢字(稀には長い出典引用)等がそれである。ただ

し、多数現れる節の直しの「当・持・入」や間拍子の「ヲク」は本来の節付で、曲によってその精粗の差が大きい。

奥書がなく、明確な書写年時は不明であるが、江戸初期以前の書写であることは確実と思われる。注記の文言が筆者自身のものならば、慶長・元和の頃の書写ということになる——後に引く江島本の慶長九年前後説はその立場——

が、年時を異にするであろう数種の校合に関する識語が一度に書かれていること、識語に誤写らしき点がある(例えば「蛙」の「観太郎」は「観太節」の誤りに相違あるまい)ことから、一部の曲の識語が原本の分の転載であったり、本書が同内容の他書の転写である疑いも否定できない。元和八年前後に隠居した観世左近大夫暮閑が隠居号の「黒雪」の名で見える(103へ上宮太子)ことから、少なくともその校合は寛永以後であるし、節付の実態からも、書写が元和まで遡ると考えるのは無理であろう。一方、上掛り節付の廻し節がまだ「へ」の字に近いのは、それが鉤型の黒雪風節付の一般化より先行することを思わせ、総じて寛永をさほど下らぬ頃の写本と考えるべきものようである。

本書の帙の裏には、金粉を散らした白紙を貼り、江島氏が本書についての考証を書き入れておられる。江島本の簡潔に過ぎる記述を補い、かつ本書への江島氏の評価が知られるので、その全文を掲出して置く。

本書ハ浅井家伝書ノ一ニシテ実鑑抄ト共ニ同家伝承ノ蔵書目録ニソノ名ヲ掲ゲアリ 抑々浅井ノ祖ハモト藤堂高
 庠ノ小姓喜之助ニシテ 細川幽斎ニモ師ノ礼ヲトリ 又金春大夫ノ門ニ入り 演能ノ事蹟ハ慶長頃ノ古書タル駿
 府記、実鑑抄、童子艸、下間少進能留帳等ノ諸書中ニ見ユ ソノ後浅井織之丞ハ 延享宝暦ノ頃ニ観世流ニアリ
 テ重キヲナシ 住ハ文化ノ頃マデ大阪ニアリタリ 幕末京都ニ移リ 明治ノ京観世ニアリテハ片山ト共ニ芸蹟著
 シ 而シテ明治卅八九年ノ頃ニ断絶セルモ 昭和ニ至リテ予ガ蔵架ニ入リタル同家ノ伝書ハ比較的ヨク保存セラ
 レアリタリ

此書ハ恐ラク前記浅井喜之介ガ慶長頃ニ所持セルモノト推セラレ 曲海ト称スルモ必ズシモクセニ限ラズ 種々

謡曲ノ要所ヲ摘録シ 観世、金春ニ互リ 当時ノ名流ノ節付ヲ蒐輯セルコト 天文元年没ノ金春禪鳳ヨリ 寛永三年没ノ黒雪観世暮閑ニ及ベリ 故ニ 謡曲本文研究ノ上ニ田中允氏等ニヨリテ(表云。三字衍か)新資料ヲ提供セルコト一再ナラズ 殊ニ蔵者ニトリテ意義深キハ 拙著「車屋本之研究」ニ記セル如ク 本書ガ車屋、鳥飼両名ガ同一人タルコトヲ発見セル最初ノ資料トナリ 従来野上豊一郎博士等ガ不詳ヲ嘆カレタル事蹟ヲ一挙ニ開明スル契機トナレルコトナリ

本書引用ノ人名ノ主ナルモノ左ノ如シ

金春禪鳳、観世宗節、全弥次郎長俊、全小次郎元頼、大蔵道知、全道以、古津宗印、大和宗恕、梅若九郎右衛門玄祥

印記等を参照すれば、昭和三十年代になってからの考証のようである。文中に「曲海ト称スルモ必ズシモクセニ限ラズ」とあることにも示されているように、江島氏は本書の題簽を「くせのうみ」と読んでおられた。音読するよりも内容が具体的に把握できる呼称なので、それに従いたい。浅井喜之助旧蔵説の当否については後に言及する。

〔二〕 曲目と内容

まず、所収の曲目と、いかなる曲のどの部分であるかと、底本・校合本に関する注記等を、一覧表の形で掲出しておく。曲順番号(肩書番号とは別)、曲名(内題に従い、目録分は文字等が異なる場合のみ〔内〕に記す)、読み方、収載部分の性質や小段名および特記事項、首尾の文句(クセに先行するクリやサシは首句のみの掲出を原則とし、本体部分は首尾を掲出する)、内題下等の注記(☆印の後に記した。／は改行を示し、★は注記なしを意味する)、および下掛り節付の曲の指摘などの補記(括弧内)の順である。

『曲海』所収曲一覧

- 1 乗頼 のりより。完曲〈範頼〉のクセ。「其上乗頼…スクナル道ヲマホラン」。★(朱筆少々)
- 2 死骸送 かたみおくり。完曲〈経盛〉(別名〈形見送〉)のクセ。「其時熊谷思フヤウ…弓矢ノ道ソアハレナル」。★(朱筆少々)
- 3 実検真盛 じっけんさねもり。同名完曲のクセ。「ムサンヤナ実盛カ…其出立トヲホエタリ」。★
- 4 高野敦盛 こうやあつもり。同名完曲のクセ。「其時思フヤウ…手ニカ、ラントス、ミケリ」。★
- 5 馬援 はえん。完曲〈巴園〉のクセ。「爰ハ、エンノ橋ノ…詠メニアカヌ心カナ」。★
- 6 逢火 のろし。クセ。完曲の一部らしいが同名完曲は伝存しない。「忍レト恋シキ時ハ足引ノ…思ヒノ煙ヲハ晴シテタハセ給ヘヤ」。★(朱筆少々)
- 7 逍遥院殿作曲舞(逍遥院御作) しょうよういんごさく。クセ。独立の謡物。逍遥院は三条西実隆。「アタシ世ノナラヒナレハヨアヤニクニ…契リソメケルソクヤシキ」。☆節観弥次郎(原曲の作曲者か)。(朱筆少々)。
- 8 三蔵 さんそう? クセ。独立の謡物。「三蔵」は「山莊」などの当て字か。完曲〈三蔵〉(別名〈大般若〉)とは無関係で、三蔵法師とも無縁の文句。「モタイノホトリノ竹葉ハ…ワレラカ身コソヤスケレ」。★
- 9 近任 ちかとう。完曲〈親任〉(別名〈大聖寺〉)のクセ。「クンルイノ中ニ分テ…泪ノ雨ソ隙ナキ」。★(朱筆少々)
- 10 空蟬 うつせみ。同名完曲のクセ。「其夜ヤウカリケン…イニシヘヲトハセ給ヘヤ」。☆山科弥右衛門以本写之。
- 11 高安 たかやす。同名完曲のクセ。「凡カ、ル身ニ…ヨシナヤ思ヒワスレン」。☆山科弥右衛門節。
- 12 更科 さらしな。同名完曲(別名〈更科物狂〉)のクセ(後の分)。本来は独立の謡物か。「悲カナヤアコウハ…シラテヤ人ノ迷フラン」。★(朱筆少々)

13 小尉 こじょう。ただしこの曲名は誤り。完曲〈小尉〉とは無縁で、完曲〈宇治橋姫〉(別名〈橋姫〉)のクセ。「然ハ

詠歌ニモ：宇治ノ橋姫ソカナシキ」。★

14 ケウボウ女 きょうぼうじょ? 伝存しない完曲のクセ。「忝モ釈尊ハ：立居隙ナキ思ヒ哉」。★

15 丁法師 よろぼし。完曲〈弱法師〉のクセ。「金堂ノ御本尊ハ：海モ皆成仏ノ灵地ナリ」。★(朱筆少々)

16 貴布祢 きぶね。同名完曲(別名〈貴船・和泉式部〉)のクセ。「サレトモ時ウツリ：思フモヨシナカリケリ」。★(朱筆

少々)

17 禿空也 かむろこうや。完曲〈禿高野〉(別名〈荊萱〉)のサシ・クセ。本来は独立の謡物か。「花ハチリテ根ニアレト

：、サレハカタシケナキ我ラカ本師釈尊ハ：有ヲアルトナ思ヒソ」。★(朱筆少々)

18 虎送 とらおくり。同名完曲のクセ(前の分)。本来は別曲の曲舞か。「西施心ナラス：オトロカヌコソオロカナ

レ」。★

19 同 〈ナシ〉 完曲〈虎送〉のクセ(後の分)。「此ユウセイノ心モシ：隔テナクイサヤアソハン」。★(朱筆少々)

20 錠潜 いかりかずき。完曲〈錠潜〉のクセ。「二位殿ハ聞メシ：語ルニツケテヨシソナキ」。★

21 信夫 しのだ。同名完曲(別名〈現在信夫〉)のクセ。「ナラハヌワサヲスカノネノ：覚エスヲツル涙カナ」。☆若州

鶴田以本写之／○朱山科弥右衛門以節付之。

22 菅丞相 かんしょうじょう。同名完曲のクセ。「今日ト過明日共シラヌ：罪コソカナシカリケレ」。☆若州鶴田以

本写之／朱山科弥右衛門以本写／○左ノ節又別也。

23 畫馬 えま。完曲〈絵馬〉のクセ。「僧正遍昭ハ：夜半ニマキレテ失ニケリ」。★(朱筆校合)

24 安達静 あだちしずか。同名完曲のクセ。「痛ハシヤ義経ハ：トマリケルコソ無念ナレ」。★(朱筆校合)

25 蛙

かわず。同名完曲のサシ・クセ。「昔老岐ナニカシト申シ雲ノ上人…、其尻キヌ／＼ノ…蛙コソタメシナリケレ」。☆朱観太節ノ写也。

26 飛鳥川

あすかがわ。同名完曲のクセ。「ミタヤモリ今日ハ…イサ／＼サナヘトラフヨ」。★(朱筆校合)

27 初瀬六代

はせろくだい。同名の長大な独立の謡物のクセ。「初瀬ノ鐘ノ声…ホサヌヤ心ナルラン」。★(朱筆校合多し)

28 鼓瀧

つづみのたき。同名完曲のサシ・クセ。「抑春ノ夜ノ一時…、花前ニ酒ヲ汲テ…イカテカ此山ニ一夜アカサン」。★(朱筆少々)

29 綾鼓

あやのつづみ。同名完曲のサシ・クセ。「後ノ世ノチカクナルヲハヲトロカテ…、然ニ世ノ中ハ…何トテ音ハ出ヌソ」。☆観世ノ以節脇ニ付ル者也。(基本の節付も上掛り)

30 末松山

すえのまつやま。同名完曲のサシ・クセ。「実ヤ思ヒニハ死ナレサリケルウキ身哉…、伝ヘ聞神ノ世ノ…荒ウラメシノ浦波」。☆朱山弥右写也。

31 人丸

ひとまる。伝存しない完曲のサシ・クセ。同名別曲には見えない。「夫人間ニヲイテヲヤ…、叡慮ニカナヒ敷嶋ノ…イサ諸共ニヒレフサン」。☆朱了三節／＼(朱筆)左ノ別。

32 湿衣

ぬれぎぬ。同名完曲のサシ・クセ。「昔筑前ノ守ナリケル人ノ息女ノ有ケルカ…、則盗人ノ事ナレハ…クルシミノ海ハイツマテナルラン」。☆観太以節脇ニ付ル者也／＼○朱山科弥右衛門以本付ル○(朱筆)又左ノイ本。

33 二人祇王

ふたりぎおう。同名完曲のクセ(冒頭にサシ「一去不来の…」を後人が加筆)。「世ノ中ノ夢ウツ…ハツカシキ余リナリケリ」。☆(朱筆)朱右ノ朱左又中三色トモニ替ル。

34 金山寺 きんざんじ。完曲(徑山寺)の上ゲ哥・クセ。「涙ヲナカスコ、ロサシ…、然ニ僧門ト申ハ…如来地トハ申スナレ」。☆観太左近以節写。

35 古今序 こきんじょ。独立の謡物。サシ・クセ。「僧正遍昭ハ歌ノサマハ得タレ共…、文屋ノ康秀ハ…其サマシラヌナルヘシ」。★

36 松浦梅 まつらのうめ。同名完曲のサシ・クセ。「拾ヤ一ノ品く…、生者必滅ノ世ノ習…行衛モシラス成ニケリく」。☆山科弥右衛門以本写也。

37 高野卷 こうやのまき。独立の謡物(別名(高野))。サシ・下ゲ哥・上ゲ哥。「聞シニコヘテタツトク有難カリケル霊地哉…、春秋ヲ…、真言秘密ノ窓…ケニ閑ナル霊地哉」。☆山科弥右衛門本写／○朱了。

38 教訓 きょうくん。同名完曲(別名(内府・小松教訓))のサシ・クセ。「サレハエイセンノ水ニテ耳ヲ洗ヒ…、サレハニヤ拾善…心ナラスモトマリケリ」。☆山科弥右衛門以本写也。

39 龍 りゅう。同名完曲(別名(褒姒))のクセ。「スエノ露…人ヤ聞覧ハツカシヤ」。★

40 六浦 むつら。同名完曲のサシ・クセ。「先青陽ノ春ノ初…、月日ヘテ…仏果ヲ得シメタマヘヤ」。☆山科弥右衛門以本写也。

41 望月 もちづき。同名完曲のサシ・クセ。「爰ニカワツノ三郎カ子ニ…、有時オト、イハ…敵ヲ討セテタヒ玉ヘ」。☆山科弥右衛門以本写也。

42 鸚鵡小町 おうむこまち。同名完曲のサシ・クセ。「ナカンツク鸚鵡返シト云事…、ケニヤ哥ノサマ…小町ソアハレナリケレ」。☆山科弥右衛門以本写也。

43 雷電 らいでん。同名完曲のサシ・クセ。「秋ニヲクル、老葉ハ…、イトケナカリシ其カミハ…イカテカ忘申

へキ」。☆車屋道晰以本写也。(節付下掛り)

44 籠祇王 ろうぎおう。同名完曲のクリ・サシ・クセ。「実ヤ終ニ行…、電光朝露ノ影ノ内外ニ…、実ヤ世ノ中ニ

…又サメくト泣居タリ」。☆車ヤ道晰以節写也／○右ノ朱禪鳳写也。(節付下掛り)

45 碁〔圍碁〕 ご。完曲〔碁〕(別名〔碁空蟬〕)のクリ・サシ・クセ・ロンギ。「夫碁ハ定恵ノ二字ヲ見セ…、石ノ白黒ハ

夜昼ノ色…、碁ハ敵手ニ逢テ…心シテイサヤウタフヨ、源氏ノ巻ヤ絵合ノ…ヲスコソウラミナリケレ
く」。☆車ヤ道晰以節写也／○左了／○朱○観世方ノ節写。(基本の節付下掛り)

46 實方 さねかた。同名完曲のクリ・サシ・クセ。本来は独立の曲舞謡〔六元(りゅうげん)〕。「其外ノ人々ハ…、

サレハ心ヲ種トシテ…、在原ノ業平ハ…去年ノ枝折ソシルヘナル」。☆車ヤ道晰以節写也／朱了。(節付
下掛り)

47 蘇武 そぶ。同名完曲(別名〔卒都婆流〕)のサシ・クセ。本来は独立の曲舞謡。「然ニ胡国ノ軍破レ…、甲斐々敷

モ田ノ面ノ雁…猶モホサレヌ袂カナ」。★(朱筆校合多し)

48 楯尾 たてお。同名完曲(文字種々。別名〔菊池〕)の上ゲ哥・クセ。「イトケナケレト千若ハ…、母ハ其時…ナク

ヨリ外ノ事ソナキく」。★

49 水無月祓〔水無月〕 みなづきばらえ。同名完曲の段謡。「水無月ノく…此賀茂ノ神ニマイラン」。★(朱筆校合)

50 近江八景論儀 おうみはつけいろんぎ。完曲〔近江八景〕(別名〔八景〕)の下ゲ哥・上ゲ哥・ロンギ。「海士ノシハサ
ト御覧スレト…、漁村ノ夕照ハ…、其洞庭ノ秋モ此…宮路ノ方ニ帰リケリ」。○中ノ朱車ヤ道晰写／○
左ノ了三写。

51 近江節 おうみぶし。ロンギ・段謡。散佚した完曲の一部らしく、〔汐汲の能〕や〔柴船の能〕との関連を思わせる

文言。「マツ塩ノサス時ハ…、ツレナク命ナカラヘテ…、舟ノ内カサカシタクハ…、沖ナルカモメ磯千鳥…、風ニツレタル早舟ノ…御舟ニメサレヲハシマセ」。★(朱筆少々)

52 侍従〔侍従重衡論儀〕 じじゅう(しげひら)。同名完曲(別名〔侍従重衡〕)のロング。「実ヤ日比ハ憂旅ノ…御ナクサミヲ申サン」。★

53 教経〔乗経〕 のりつね。同名完曲(別名〔先帝〕)の後場後半の全文。55参照。「是ハ阿波ノ民部ガハカリコトユヘ…音ニテ夢ヤサメヌラン」。☆○上ハヨリ後ノ朱車ヤ節写也。

54 麦春ノ小哥〔麦春〕 むぎつきのこうた。近江猿楽の散佚曲の一部らしい小歌〔閑吟集〕58「近」と肩書」の大半とほぼ同文)。「麦ツク里ノ名ニハ…更行月ニウソフク」。☆(本文末尾)幽斎公観小次ニ御相伝ノヲ又得御意書付置也(この識語は次の〔先帝〕の内題下右に位置し、所属が紛らわしい)。

55 先帝 せんてい。同名完曲(別名〔教経〕)の後場後半の全文。53と同じ部分でほぼ同文ゆえ、同じ曲を別名で重出させた形。「是ハ阿波ノ民部ガ心易リナレハ…音ニテ夢ヤサメヌラン」。☆新中納言ノ上ヨリ後左ノ左禅鳳節写。(前曲末尾の識語と見た「幽斎公…」が右下に位置するが、それは前曲分であろう)

56 恋松原 こいのまつばら。同名完曲のサシ・クセ。「我カクトシラハ恨ノアラヌ世ヲ…、ケニヤ夢ノ世ニ…タメシナキ名ニヤノコルラン」。★

57 治親 はるちか。同名完曲(別名〔磯屋・箆破〕)のサシ・クセ。「ケニヤアイミテモ…、アハレ父母カ…箆ノウチニテナキ居タリ」。★

58 三笑 さんしょう。同名完曲の上ゲ哥・クセ。「三国無双ノコノ滝ヲ…、抑コノ淵明ト申ハ…ヲトラヌヒカリナリケリ」。★

59 佐保川 さおがわ。同名完曲のサシ・クセ。「ムサンヤナ此程ハ…、余リ思ヒノカナシサニ…ヤルセナキ今ノ心

哉」。★

60 横山 よこやま。同名完曲のサシ・クセ。「其比イマタアラタカノ…、又我朝ノ其昔…酒ノウテアソハン」。★

(朱筆少々)

61 俊寛 しゅんかん。同名完曲のクドキ・クセ。「此程ハ三人一所ニアリツルタニ…、時ヲカンシテハ…見ルコ

ソアハレ成ケレ」。☆古津宗印以節写也。

62 雲雀山 ひばりやま。同名完曲のサシ・クセ。「款冬アヤマツテ暮春ノ風ニホコロヒ…、思ヘ桜色ニ…御身ノ果

ソイタハシキ」。★

63 放下僧 ほうかぞう。同名完曲のサシ・クセ。「サレハ大小ノコンキヲキラハス…、青楊ノ春ノ朝ニハ…心ヲサ

トリ給ヘヤ」。☆妙佐本ニテ写。

64 身賣 みうり。同名完曲の掛合(末尾)・クセ。「何ニタトヘン朝ホラケ…、実ヤ何事モ…思ヒヤルコソ悲シケ

レ」。★

65 羊 ひつじ。同名完曲の掛合(末尾)・下ゲ哥・クセ。「夫程ニ社ナカラメ父母ヲ…、子ニタニモステラル、…、

凡父母ノ恩得ヲシル事…別レソ悲シカリケル」。★

66 脉論 みやくろん。サシ・クセ。独立の使用謡(完曲(仲遠)にも転用)。「夫人間形精ヲ観スルニ…、微ハ是虚肺

沈ナルハ…是医ノ道ノ初学也」。★

67 初雪 はつゆき。同名完曲のクドキグリクセ。「コハイカニサシモ手馴シ初雪ノ…、ムサンヤナ此鳥ノ…台

ノ縁トナラサラン」。★(節付下掛り)

68 范蠡 はんれい。同名完曲(別名「吾子胥」)のサシ・クセ。「サレハ五戒ノソノウチニモ…、浅カラヌ泪ノ河ノ…

ハテシナキ袖ノ泪哉」。★(節付下掛り)

69 サ衣 さごろも。完曲「狭衣」のサシ・クセ。「昔狭衣ノ君又中将ト聞エシ時…、様々ノミコトノリ…イヒ捨テ

ミエス成ニケリ」。★

70 鞠 まり。同名完曲のサシ・クセ。「女ハ思ヒノヤル方ナク…、扱モ我妻ノ…アソヒ様サマノ其中ニ」。★

71 雲淋院〔雲林院〕 うんりんいん。完曲「雲林院」のサシ・クセ。「先ハ弘徽殿ノホソ殿ニ…、二月ヤマタヨヒナレ

ハ…タトリノモ迷ヒ行」。

72 高野参詣 こうやさんけい。同名完曲(文禄三年大村由己新作)のサシ・クセ。「シヤウメツメツヒノ月ヲサエ…、

サンコハ落テ此ミネノ…シンイヲスマスレイチカナ」。☆春藤六右衛門本写也。(節付下掛り)

73 轉多物狂^{マタ} はかたものぐるい。完曲「博多物狂」のクセ。本来は独立の謡物か。「ツラノ浮世ノ有様ハ…ネカイ

ヲカナヘタマヘヤ」。☆朱山科弥次。

74 松浦物狂 まつらものぐるい。サシ・クセ。散佚した完曲の一部か。同名完曲(数種あり)は前後を添えた後代の

作。「生国ハ筑紫肥前ノモノ…、余リ別レノ悲シサニ…此浦ニ舟ヲサシト、ム」。☆観世左近節ノ写ノ左

ノ朱車ヤ節也。

75 敷地物狂 しきじものぐるい。同名完曲のサシ・クセ。「実ヤ驚ノ深山モ在世説法ノ砌ニコソ…、コサンノ松ノ

間ニハ…身ノ果如何ニ成ヌラン」。★(朱筆校合多し)

76 高野物狂 こうやものぐるい。同名完曲のサシ・クセ。本来は独立の謡物か。「然ハ末世ノ隠所トシテ…、サレ

ハニヤ真如平等ノ…静成霊地成ケリ」。☆左ノ朱車ヤ道断節也。

77 由良物狂 ゆらものぐるい。サシ・クセ。独立の謡物。同名完曲は前後を添えた後代の作。「イニシへ人ニアイ

ナレテ…、由良ノ湊ノ泊リ船…中ノニ残ル身ソツラキ」。☆○朱猶、車ヤ節付也右ノ○同若州蘆田節写也右ノ○同禅鳳ノ節付也左ノ右ノ同山科弥右衛門節也左ノ(内題右)墨ニ同ハ略之也。

78 賀茂物狂 かものぐるい。同名完曲のサシ・クセ。「実ヤソノカミニ祈リシ事ハ忘レジヲ…、我モ其シテニ泪

ソカ、リニキ…飄ス袂成覧」。☆○左ノ朱山科弥右衛門節。(右の朱は車屋道晰本に基づく校合らしい)

79 占壁〔ウラカヘ〕 うらかべ。同名完曲(別名〔浦上〕)のシテの出のサシ。「如何ニアレ成道行人…泪ニムスル計也」。
☆○山科弥右衛門節ヲ写也。

80 花筐〔花形見〕 はながたみ。同名完曲のサシ・クセ。本来は独立の曲舞謡〔李夫人〕。「カタシケナキ御タトヘナ
レトモイカナレハ漢王ハ…、御門フカクナケカセ給ヒツ…独袂ヲカタシク」。☆右古津宗印引合青表
紙被置／以本令写者也 又ワキニ付タル節／宗節フシ也。

81 班女 はんじょ。同名完曲のサシ・クセ。「タノ嵐朝ノ雲…、スイチャウコウケイニ…班女カ閨ソサヒシキ」。★

82 稻荷 いなり。同名完曲(別名〔和泉式部〕)のクセ。「車ヲナラヘコシヲツ、ケ…二葉ノ紅葉ヨモツキシ」。☆○左
ノ朱山科弥右衛門本ヲ写也(左の朱の節は下掛りと認められる)。

83 育王山 いおうさん。クセ。平重盛関係の散佚曲の一部らしく、現存する同名完曲には見えない。「君ハ舟臣ハ
水…神モ仏モ守ラント誓ヒ新タ也」。★

84 星 ほし。クセ。数種の同名完曲に見えず、散佚曲の一部らしい。「此四方ノ草ノ中ニワキテ…万歳ノタメ
シ成ヘシ」。★(朱筆少々)

85 経書堂 きょうかくどう。同名完曲のクセ。「満々トシテ喜悦ノ水ノスミヤカニ…若キニ帰ル事ナシ」。★

86 児童 じどう。完曲〈菊水慈童〉のクセ。「其後児童ハ…天下ヲ治メ給ヘヤ」★

87 枕児童 まくらじどう。完曲〈枕土童〉(版本四百番本所収)のサシ・クセ。「ソレ本願シヨシヤウノ春ノ花ハ…、然ニホクワウハ…ノフルヤ千年ナルラン」★(節付下掛り)

88 玉取 たまとり。同名完曲のサシ・クセ。ただし本来は独立の曲舞謡らしい。「邪見偷盜ハ貧根ノ因縁…、世ニ四恩アリ…唯孝行ノ心ソモトイナリケル」☆車ヤ道晰以本写者也／○右ノ朱了三節付／朱觀世左近節／左ノ朱山科弥右衛門節。(基本の節付下掛り)

89 笠取 かさとり。独立の謡物。サシ・クセ。「則一花ヒラケヌレハ…、御詠ニ青柳ヲ…弘ハスト袖ヤホサマシ」。
☆山科弥右衛門節。

90 龍虎 りょうこ。節付一切なし。同名完曲のサシ・クセ。「然ハ金龍雲ヲ穿テ…、扱又虎ハカリソメニ…家路サシテ下リケリ」★

91 近江八景 おうみはっけい。同名完曲のサシ・クセ。「アレニ見エタル比良ノ山…、片田ノ浦ノ釣舟ノ…ツリタル、モノトハ思フヘキ」☆山科弥右衛門以本写之。

92 富士山〔不盡山〕 ふじさん。同名完曲のサシ・クセ。「頂上ハハヨウニシテ…、凡富士ノ根ハ…誠ニ上ナカリケリ」☆車屋道晰以節写之也。(基本の節付下掛り)

93 譲葉 ゆずりは。完曲〈淡路〉(別名〈譲葉〉)のクセ。「サレハニヤ二柱ノ御神ノ…唯今ノ国土ナルヘシ」☆車ヤ道晰節写之者也／○中ノ朱山科弥右衛門以本付者也／○左ハ了三。(基本の節付下掛り。内題下に「淡路トモ云」と付記。貼紙で後人がサシを追加)

94 九品 くほん。クセ。独立の謡物。「九品ハドコ…此蓮華谷ニヤスマン」☆車ヤ道晰以本写之也。(節付

下掛り

95 須磨源氏 すまげんじ。同名完曲のサシ・段謡(「上ゲ哥クセ」などとも呼ばれる特異な小段)。「イトゞ敷虫ノ音茂キ

浅茅生ノ…、イトモカシコキ勅ニヨリ…光君トハ申也」。☆(内題下)山科弥右衛門以本写者也(以下はサシの末の改行部の余白)左ノ朱イロくアリ此曲墨ノ節観左近ノ朱ノハ山科弥右衛門又君本。(異?)

96 四季之曲舞(四季) しきのくせまい。クセ。独立の謡物(別名(四季雪・雪翁・雪女))。「抑天ノウルホヒニ…山路ノウサヤ忘ルラン」。☆観世左近以節写也。

97 當願暮頭 とうがんぼとう。同名完曲のサシ・クセ。「然ハ妙ナル法ノ教…誰カシルセウトウバウ…唯此経ソタツトキ」。☆観世左近以節写○山科弥右衛門○金春方車屋節左ニ付。

98 橋姫 はしひめ。完曲(住吉橋姫)のクリ・サシ・クセ。「夫和歌トイツハ…人ノ世ニ有シワサナキニアラス…吾本覚ノ都ヲ出…カゲハツカシキ姿カナ」。☆了三。(基本の節付下掛り。朱で上掛りの節校合あり)

99 芳野琴 よしのこと。完曲(吉野琴)のクセ。「清見原ノ天皇ト聞エサセ給ヒシハ…五節ノ舞姫ノカナテハ今ニ絶セス」。☆観太左近節○朱山科弥右衛門。

100 兵雙(兵揃) つわものぞろえ。完曲(悪源太)の上ゲ哥・クセ。「サンヌル保元ニく…平家ノ大将重盛カ手勢…渥源太ガ十七騎是ナリ」。★(朱筆少々)

101 定家一字題 ていかいちじだい。独立の謡物。クセ。「抑定家ノ一字ノ題ニ…鷹フスマ椎ト書レタリ」。★

102 座敷飾 ざしきかざり。独立の謡物。サシ・クセ。節付ほとんどなく、首尾の一部のみ。「見渡ハ柳桜ヲコキマセシ…物見ノ車ニサソハレテ指入門ノ殿作り…ヲノツカラ誰ニ固辞セン」。★

103 上宮太子 じょうぐうたいし。独立の謡物(同名完曲にも転用)。サシ・クセ。「我朝ニ其威光ヲ広メ…上宮太子ニテ

オハシマス」を觀世方のサシとして冒頭に記す(彼欽明天皇三拾二、后答テノタマハク…上宮太子ノ御事」。
 ☆○朱山科弥右衛門以節付ル 朱ニテ書入タル／フシハ宗節右ノコトク申タルトテ觀世太／黒雪詠候由
 梅若九郎右衛門申也。

104 舞車

まいぐるま。同名完曲の後の曲舞(サシ・クセ)で通称(妻戸)。111参照。本来は独立の謡物。「比叡山エン
 リヤクシノ座主…、妻戸ヲホト／＼トタ、ク声スナリ…今モアルトキク物ヲ」。☆觀弥次本ヲ以写。

105 乙平

おとひら。同名完曲の上ゲ哥と語り。「月ノ程コソ黒染ノ／＼…一夜ヲアカシ給ヘヤ。凡舞ノ初ニ左右
 ノ手ヲ合スル事…ナンホウヲモテツヨキ申事ニテ候」。☆小謡曲舞物語キリ／○朱ノハ了三。(次曲分
 も及ぶ注記)(節付下掛り)

106 同曲舞(ナシ)

おとひら。同名完曲の哥?・クセ・ノリ地。「実モウレシヤ／＼ト…颯々ト申也。抑当寺ハ…七
 徳ノ舞ソ勝レタル。抑菩薩ノ中ニ／＼…音楽絶ヌ謂ナリ／＼」。★(前曲注記参照)(基本の節付は下掛り。
 朱の校合は上掛り)

107 盛長

もりなが。散佚した完曲(義経主従関係)の下ゲ哥と上ゲ哥(連続か否か不明確)。「ヨシヤ是トテモ…浮身ノ
 果ゾカナシキ。何事モムクキアル世ノナラキソト／＼…命ハ儀ニヨツテ輕シトキクゾ誠ナル」。★

108 墨染櫻

すみぞめぐら。同名完曲のサシ・クセ。「夫桜ハ諸木ニスクレテ水ヲ生スル徳アリ…、中ニモ此桜ハ
 …、仏ノ御弟子ト成ソウレシカリケル」。☆左ノ墨ノフシ禅鳳写也／○朱今古本ヲ以テ付也了。(基本の
 節付は下掛り。朱の校合も同じらしく、識語二行目の「今」は「金春」の意であろう)

109 母衣

ほろ。同名完曲(別名(那須))のサシ・クセ。「其後項羽高祖ノ戦ヒ…、アル時張良母ニ向ヒテ申様…忠切
 第一ノツハモノトイサヤイハレン」。★

110 室住

むろずみ。同名完曲のサシ・クセ。「夫人間ニ生ヲ請ル事…、シカリトハイヘトモ…成仏得脱ノ心ヲナトカエサラン」。☆了。(節付下掛り)

111 美人揃

びじんぞろえ。完曲(舞車)の後の曲舞(サシ・クセ)。104参照。本来は独立の謡物。「凡伊勢物語ニ見エタルハ…、第五ニハ永良ノ卿ノ御ムスメ…美人ノ中ニトリテハイツレカオトリマサラン」。☆山科弥右衛門本写也/○脇ニ付タル朱弥次郎節。

112 太刀堀

たちぼり。同名完曲(別名(太刀堀葵・俱利伽羅落)のクセ・中ノリ地?。「去程ニ味方ニハ…皆礼拝ヲ参ラスル是ヲヨキ首途ニテ頓テ合戦ヲハシム。去程ニ夜ニ入ハ…谷ノ深キヲモ浅ク成程ウメタリケリ」。☆山科弥右衛門本ヲ写也。

113 唐皇代記

もろこしこうだいぎ。独立の謡物(別名(唐王代記)。サシ・クセ。「夫伏羲神農黃帝…、秦ハ只二世ナレハ…明朝ニ至ルマテ万々歳ソ目出度」。★

114 香椎

かしい。同名完曲のサシ・クセ。「皇后ノ宣旨ノ趣…、干珠ト云ハ白キ玉…香椎ノ浦風ノ治ル御代トナストカヤ」。☆右ノスミ節山科弥 言葉ノチカイ書入ル也/○サシハ山科弥右○朱モ同○左ノ左今方禪鳳フテ也/曲ハ観小次伝トテ幽斎御伝ノ節也/○左ノ朱車ヤ道断節付ル也。

115 王代記

おうだいぎ。独立の謡物。クリ・サシ・クセ。「夫仁王ノ御初ハ…、安康雄略清寧賢宗仁賢武烈継体…、朱雀村上…王親町百七代今生皇帝ノ御代社目出度カリケル」。☆了。(節付下掛り)

116 皇代記

こうだいぎ。独立の謡物。クリ・サシ・クセ。前曲とほぼ同内容で若干簡略。下掛り・上掛りの同曲を列挙した形。「夫人皇ノ御始者…、安康雄略清寧賢宗…、孝徳天皇…正親町百七代今上皇帝ノ御代コソ久シカリケレ」。★

117 年代記 ねんだいき。独立の謡物。クセ。「元弘三年建武暦応共四年…享祿四年天文年ノ御代コソメテタカリケ

レ」。☆車ヤ道晰以本写之也。(節付下掛り)

118 嶋廻 しまめぐり。独立の謡物(同名完曲にも転用)。サシ・クセ。「此嶋ノ四方ヲハルカニ見渡ハ…、北ニ向ヘ

ハカリカネノ…誓願ニモル、事ヤアル」。☆観世左近節也／○左ノ朱車ヤ道晰節也。

119 貞任 さだとう。同名完曲のサシ・クセ。「東夷西戎南蕃北狄マテモ…、去程ニ軍ノヲノ子トモ…衣ノ城ハス

テニクツレヤフレヌ」。★

120 知章〔千種〕 ともあきら。同名完曲のサシ・クセ。目録の曲名不審。「其中ニ親ニテ候新中納言…、知盛其時ニ

…ナリ行果ソカナシキ」。★

121 大蛇 おろち。同名完曲のサシ・クセ。ただし節付なし。「然ニ此乙女ハワカ子ナリ…、其時ソサノヲ…エヒ

カノハシメ成ヘシ」。★

122 隠岐物狂 おきものぐるい。独立の曲舞謡を転用した同名完曲(別名〔隠岐院〕)の全文。☆(本文末尾)観世宗節秘本

ニ則主節ヲ付タル以本大和宗恕ノ被写之 其宗恕ノ以本又写者也 可為証本也／(朱筆)以朱付タルフシ

ハ宗節ニ稽古ノ時宗恕私ノ覚ニ相違ノ所ニ被付ト云々／(紫筆)紫ノ節ハ宗恕ニ稽古仕時相違ノ所ニ私

ニ付ル也／些不可他見也／(墨筆)又墨ニテ少ツ、付タルハ当観太伝也／(墨筆)左ニ付墨節ハ越前本ニテ

付ル也。

123 東金〔東国下〕 とうごくくだり。内題の文字不審。クリ・サシ・二段グセ・サシ・四段グセと続く長大な曲舞謡。

独立の謡物で完曲〔逢坂盲〕(別名〔逢坂物狂〕)にも転用。「抑此盛久ト申ハ…二度花ヤサキヌラン」。☆鳥飼

道晰以節写之也／(朱筆)左ノ朱ノ節大蔵道以本写也。(節付下掛り)

124 西金〔西国下〕 さいこくくだり。内題の文字不審。サシ・三段グセ・サシ・二段グセと続く長大な曲舞謡。独立

の謡物。「寿永二年ノ秋ノ比…沈ミシ影ハカヘラス」。☆鳥飼道晰以節写之者也／（朱筆）朱ノ節ハ大蔵道知以本写也。（節付下掛り）

125 哥占 うたうら。同名完曲（後半に〔地獄の曲舞〕を転用）の全文。☆観世小次郎以節写者也／（朱筆）朱ノ節ハ宗節

写也／（墨筆）墨ニテ左ニ付ル節ハ山科弥右衛門以節付也／（墨筆）秀次ノ御時ノ謡ノ以鈔文字ヲ書入者也。（末尾に朱筆で脇と仕手の装束付を記し、「右観世小次伝也」と付記）

126 木曾願書 きそがんしょ。同名完曲の読ミ物の部分。平仮名書の別筆で後人の追加らしい。「今井樋口を始として…皆礼拝をまいらする」。★

127 一休〔ナシ〕 いっきゅう。一休禪師作と伝えるサシ・上ゲ哥の小謡。別名へささら・割竹。後人の加筆で目録にも記載されていない。「夢カヨフ…、実世中ハワリ竹ノく…夢サヘ見果サリケリ」。★

若干補足すれば、三種の本を参照したように識語にある曲は事実三種の校合があり、「以レ朱」云々の識語には朱筆の校合が対応している。しかし朱の校合や書き込みがあるのに別に識語のない曲もあり（★印の下に「朱筆少々」「朱筆校合」「朱筆校合多し」の三段階に分けて注した）、底本・校合本のすべてが識語に明示されているわけではない。過半の曲が無識語なのもそれを語っている。識語には「以レ節写」と「以レ本写」の形が混在し、中間的な「以レ本付」の形もあってその差が曖昧であるが、「以レ本写」はやはり詞章の底本としての使用、「以レ節写」は節だけの底本または節の校合本としての使用が主体と認められる。節に関する識語の多さが示すように校合は節主体で、文句の校合は少ない。本全体が節付本位と言ってよく、それは室町後期以後の謡本の書写にも共通する現象である。90〔龍虎〕と121〔大蛇〕には節付が皆無、102〔座敷飾〕も節付がほとんど無いのは、権威ある節付を求めて未完に終わったのであろう。

『曲海』

(37) 〈玉取〉首部

ミクミサレモノフエヤ千年ナラシ
 玉取 中より分ちて
 外見儉嗚貧根ノ目録悲慟イハ
 富貴家元ノモトイトラヤ 世田屋
 リ天地恩回王ノ生所スモ母ノ
 中ミ重ハ是父母ノ下カヤ堂花夢
 クナル父ミソハ其故ノ虞録ノ者トシ

カニ親母ヲナシ考行ノ意ヲカ
 中故金金ヲナシタメシ高夢スツ
 中子天雷ツイニ身ヲサキ破碎ノ母シモ
 中ソレイヤ命ヲウハリ 無世尊
 中モノ有アミタイシハシ思願解
 中トキタイイハハハハハハハハハ
 中フ法ヲ大給モ脚母ニヤフ人ノイナ

(38) 〈隠岐物狂〉末尾

シサウハ 被ヲ解袖 けノナシ
 雲ヲ廻スガノラネ 被ヲソテモ
 イツシモミタエノミラナサシ
 ソラノネズミヌエラハノミコソ
 カニコクノミタエノミラナサシ
 ノカニテ年ヲフルサトナシ
 中ノ悪ツカテエテス中ララシ

中是ミタエノ親トコノ年ナシ
 中玉ノシハミタエノミラナサシ
 中又廻リアツ小車ノ年ナシ
 中ツ波打ツテ帰ルミタエノミラナサシ

中各所年ナシミタエノミラナサシ
 中各所年ナシミタエノミラナサシ
 中各所年ナシミタエノミラナサシ
 中各所年ナシミタエノミラナサシ

(39) 〈西国下〉(西金)首部

カニ親母ヲナシ考行ノ意ヲカ
 中子天雷ツイニ身ヲサキ破碎ノ母シモ
 中ソレイヤ命ヲウハリ 無世尊
 中モノ有アミタイシハシ思願解
 中トキタイイハハハハハハハハハ
 中フ法ヲ大給モ脚母ニヤフ人ノイナ

西金 此の西金
 中各所年ナシミタエノミラナサシ
 中各所年ナシミタエノミラナサシ
 中各所年ナシミタエノミラナサシ
 中各所年ナシミタエノミラナサシ

〔三〕所収の曲目をめぐって

本書が収める一二七曲は、122〈隠岐物狂〉と125〈歌占〉が全文を記載する例外を除き、すべて部分謡で、かつ大半は曲舞謡である。曲舞謡を中心に謡物の集成を意図して本書が編まれていることが明白であろう。上掛り・下掛りにわたって広く資料を探索していることが識語からも知られるが、編纂はかなり長年月にわたるらしく、27〈初瀬六代〉まではほくセだけを収録している（例外は17〈禿空也〉と25〈蛙〉のみ）のに、28〈鼓滝〉以後はサシ（またはくセに先行する別の小段）から収めるようになり（サシを欠く曲以外の例外は33〈二人祇王〉や39〈龍〉など僅少）、37〈高野巻〉を初め曲舞謡以外の特殊な謡物が漸次増加し、末近くには使用謡（年代記など）の類が集められ、末尾には全文を収めた曲までであるという、編集方針の顕著な揺れがそれを示している。校合に関する注記が後半の曲ほど多いのも、同じ観点で理解できよう。

多年にわたったであろう広範な資料蒐集は、比類のない謡物集成の形に結実した。曲舞謡やそれに準ずるまとまった謡物を本書ほど多数集めた本は以前にも以後にもない。能楽研究所蔵の『上杉本乱曲集』全三冊が本書の収めない遠い謡物を多数収録する点で比肩し得ようが、比較的近い曲舞謡の類が意外に少なく、本書所収曲で同書が収めるのは三十六曲に過ぎない。蒐集の基準が各書異なるものの、本節1で資料ネ《曲舞本》と対比した諸資料が、ネは三十曲、『両曲鈔』は五十三曲、光悦曲舞本は兩種で三十九曲、石田本『曲舞集』『曲舞小謡揃』は五十曲、寛永三年刊の『乱曲揃』が三十八曲の曲舞を収めるだけなのと比較しても、本書の曲数の多さが理解できるであろう。

単に曲数が多いだけではなく、すこぶる珍しい曲を多数含んでいることが、本書の特色の一つである。文句から推して完曲の一部に相違ないと思われるのに該当する完曲が伝存していない6〈逢火〉・14〈ケウホウ女〉・31〈人丸〉・83〈育玉山〉・84〈星〉・107〈盛長〉や、散佚した近江猿楽所演曲の名残と推定される51〈近江節〉・54〈麦春〉や、識者が曲舞謡の新作に関与したことを示す7〈逍遥院御作〉などが、その好例であろう。この内の〈ケウホウ女〉と〈盛長〉は『能本

作者注文』が観世小次郎(信光)作とし、〈育王山〉は『自家伝抄作者付』が金春禅鳳作と伝えている曲なのである。部分的にもせよ、それら散佚曲の内容を伝えていることの価値はすこぶる大きい。完曲が伝存している曲や他の資料にも含まれている謡物の場合にも、本書所収本文が最古のものであることが多く、謡曲や謡物の詞章研究に本書が甚大な寄与をしていることは、江島氏の指摘の通りである。

一部には小謡(37・54・107・127)、シテの出のサシ(79)、語り(105)、読み物(126)なども混じるが、大半が曲舞謡またはそれに準ずる謡物——段謡(49・95)やロング謡(50・51・52)——であるのは、資料ネ《曲舞本》とも共通し、室町期以来の曲舞集の伝統を継承したものである。独立の謡物、完曲の一部に転用されてはいるが本来は独立の謡物だった曲舞謡、および遠い曲——ほとんど演じられない曲——の曲舞ばかりを収める点も、伝統に沿っている。15〈丁法師〉・61〈俊寛〉・81〈班女〉など、現今の能では近い曲もあるが、それらはいずれも当時としては遠い曲だった。本書が収めていることを遠い曲だったことの傍証にし得るほどに初期の曲舞集の特色を保持し、室町期の謡物の実態の推測に有効なことも、本書の価値の一面なのである。

〔四〕底本・校合本等に関する識語をめぐって

本書の特色の一つは、約半数の曲の内題下などに底本や校合本についての識語が注記されていることである。それによって権威ある本に基づくことが判明して信頼度が高まっているのみならず、本書の素性を推測する手掛りもそれなので、注記に現れる人名(または固有名詞)について概観しておこう。現れる形が様ざまなのを、その名がどの曲に出るかに単純化し(曲は曲順番号で示す)、後の説明の便宜上ほぼ系統別に掲出すると、次のごとくである。(誤写らしい文字は推測した本来の形に従い、「観方」「観世の節」など人物を特定できない分は除き、「妙佐本」などは妙佐に還元し、略記された

分は完全な形と一括した)

- | | |
|------------------------------|--|
| ㊦観〔世〕弥次郎（観弥次・弥次郎） | 7・104・111（計三曲） |
| ①観世小次郎（観小次） | 55・114・125（計三曲） |
| ㊧古津宗印 | 61・80（計二曲） |
| ㊨観世宗節（宗節） | 80・103・122・125（計四曲） |
| ㊩観世左近（観左近・観太左近・観太・観世太黒雪・当観太） | 25・32・34・74・88・95・96・97・99・103・118・122（計十二曲） |
| ㊪幽斎 | 55・114（計二曲） |
| ㊫妙佐 | 63 |
| ㊬大和宗恕 | 122 |
| ㊭山科弥右衛門（山科弥右・山弥右） | 89・91・93・95・97・99・103・111・112・114・125（計二十八曲） |
| ㊮山〔科〕弥次 | 73 |
| ㊯梅若九郎右衛門 | 103 |
| ㊰若州蘆田 | 21・22・77（計三曲） |
| ㊱越前本 | 122 |
| ㊲禅鳳 | 44・55・77・108・114（計五曲） |
| ㊳大蔵道知 | 123・124（計二曲） |

㊦ 春藤六右衛門

72

㊦ 車屋道晰(車ヤ・鳥飼道晰) 43・44・45・46・50・53・74・76・77・88・92・93・94・97・114・117・118・123・124

(計十九曲)

㊧ 了三(了)

31・37・45・46・50・88・93・98・105・108・110・115(計十二曲)

節付の主流をなす観世流の關係者で最も古いのが㊦の観世弥次郎長俊(天文十年〔二五二〕没)で、永正前後に活動した観世座の脇之為手である。7は三条西実隆作詞の曲舞謡の作曲者が弥次郎である由の注記と解されるが、104・125はともに〔舞車〕の曲舞であり、本書の原編者は弥次郎節付謡本〔舞車〕を参照したかのようである。その弥次郎の子でやはり脇之為手として天文前後に活動し、観世流謡の中心だったのが㊩の観世小次郎元頼(天正二年〔二五四〕没)である。55・114は細川幽斎を経由しての参照であるが、全文記載の125〔歌占〕は直接元頼本に依拠しているように読める。元頼の弟が㊪の古津宗印で、丹後細川家の能大夫だった。80の注記の「青表紙」とは、彼の祖父観世小次郎信光や父弥次郎長俊の節付本と伝えられる、権威ある観世流謡本である。㊫の観世宗節(天正十一年没)は七世の観世大夫元忠で、㊩の元頼の教導を受けた。出家して宗節と称したのは永禄八年(二五五)頃である。80と125が節付の校合、103・122は間接的な参照である。㊬の観世左近(身愛・暮閑・黒雪斎。寛永三年〔二二六〕没)は宗節の孫にあたる九世観世大夫である。前後四代の大夫が観世左近なので、種々の形に略記されているのがすべて同一人か否かが問題であるが、122の「当観太」(当時の観世大夫の意)を含めて、すべて九世と考えてよいようである。103に見える「黒雪」が元和八年(一六二二)以後に使用した法名で、同曲の校合がそれ以後と考えられることは前述した。その観世左近や㊪の古津宗印を後援したのが㊭の細川幽斎(慶長十五年〔一六〇〕没)である。55・114ともに観世小次郎の伝を原編者に伝えた由を注しており、それを信ずれば原編者は幽斎と親密な間柄で、慶長十五年以前に両曲の校合を済ませていたことになる。63に「妙佐本」の形で一度だ

け名に見える⑤妙佐は、室町幕府の旧臣で細川幽斎の側近に侍した長岡妙佐に相違ない。彼が多くの謡本を所持していたことは八代松井家蔵の妙庵手沢謡本(観世流三百番本)の識語(国文学研究資料館『調査研究報告』第三号(昭和57年3月)、伊藤正義氏「松井家蔵妙庵手沢謡本識語控」参照)からも明瞭である。その妙佐が師事した人物の一人が⑦の大和宮内大輔入道宗恕で、彼も室町幕府の遺臣である。観世宗節などに習った謡の数寄者で弘治二年(二五六)にすでに三百番の謡本を所持し、慶長九年に百六歳で没するまで『言経卿記』にもしばしば名が見える。122の紫筆分の識語を信ずれば原編者は(隠岐物狂)を宗恕に習ったことになる。10から125まで偏りなく二十八曲もに名が見える⑦の山科弥右衛門は、観世宗節の「一の弟子」と呼ばれた謡の達者で、黒雪時代に観世座のワキやツレを勤めた。初名が弥次で、『丹後細川能番組』の慶長二年正月の番組では初名で記録され、翌三年六月の謡本(兼平)(観世宗家蔵)では「山階弥右衛門尉忠行」と署名している。底本としての使用と解される「以本写」の形の識語が十四例もあり、原編者にとって山科弥右衛門本が最も身近な本だったらしい。73のみの②「山科弥次」は、山科弥右衛門の初名とも解されるが、養嗣子らしい「山科弥次」であろう。彼は元和前後に観世座のワキやツレとして活動している。103のみの④梅若九郎右衛門は、黒雪の謡い方を原編者に伝えており、元和初年に引退した梅若九郎右衛門玄詳であろう。

⑤の「若州鶴田」は経歴不明の人である。人物を特定できない⑤の越前本と共に、原編者の探索が大和四座以外にまで及んでいたことを示すかのように見えるが、そうではあるまい。室町末期には若狭や越前は四座の勢力範囲であり、観世流が優勢だった。「若州鶴田本」を底本とする21・22ともに上掛り節付であり、校異に用いた77や、122の校異の「越前本」もそうである。前記の妙庵手沢謡本がしばしば「若州山本中務」の本を底本に採用している事実などを参照すれば、若狭や越前の人の所持した観世流謡本が丹後を領した細川氏を通して中央の一部の範囲に転写されていたことが十分考えられる。そうした本に基づいたのであろう。

㊦の禅鳳は金春大夫元安(天文三年〔一五五〕没)の法名で、四曲の節校合に名が見えるから、彼の書いた曲舞謡の類が伝存していたらしい。㊧の大蔵道知(慶長六年没)は金春座の大鼓役者だった。その弟が小鼓役者の大蔵道意なので、123の識語「大蔵道以本写」を江島氏は大蔵道意の本を校合に用いたように解しておられるが、続く124の「大蔵道知以本写」と同じ識語の「知」を誤脱した形と見たい。他の識語を参照しても「以」は「以て」のはずであるし、〈東国下〉〈西国下〉の両曲の校合資料は同一人の本の可能性が高いと思われるからである。㊨の春藤六右衛門は金春座の脇方である。72〈高野参詣〉の「春藤六右衛門本写也」の一例だけであるが、同曲が文禄三年三月五日に高野山で金春大夫安照によって初演された際のワキ(Ⅱ地頭)が多分六右衛門であつたろう。本書の〈高野参詣〉は最善の人物の本を底本または校合本(上掛りの節付に下掛り節付を校合しており、後者らしい)としているかのである。㊩の車屋道断すなわち鳥養道断と本書との関係は、㊦に別にまとめて考察する。㊪の了三は素性不明の人物ながら、「了三」「了」の識語に対応する節付が下掛りであり、金春系の人らしい。山科弥右衛門・車屋道断に次いで彼の本が多く参照されており、姓を記さない略記の形の識語ばかりの点からも、原編者とかなり近い関係にあった玄人のように思われる。

〔五〕原編者の素性について

右のように多数の人物——ほとんどは一流の謡い手——の本を参照しており、間接的な影響関係を除いても、本書の原編者は能界に知り合いの多い人であつたらしい。上掛り・下掛り両系を参照するのみならず、最初の節付も校合の節も、下掛りの本を使用した場合には下掛りの節付にしていることが大きな特色で、これは観世なり金春なりの玄人には考えられない現象であろう。資料ネ《曲舞本》に明瞭な上掛りの謡を収録している鳥養道断も、節付は下掛りに統一していた。原編者は素人なのではあるまいか。識語の文言を信ずれば、原編者は細川幽斎が観世小次郎から相伝

した謡い方を幽斎の御意を得て(許可を得て)書き付け置いたり、大和宗恕に謡を「稽古」したりしたことになるが、これまた玄人にはあり得ないことである。幽斎や宗恕の指導を仰ぐこと自体が、かなりの地位の人でなければ不可能であり、かつ年代は遅くとも慶長前半以前でなければならない。一体、原編者はいかなる人物なのであろうか。

前掲の江島氏考証は、所蔵した浅井家の芸祖とされる浅井喜之助を原編者に想定している。江島本では、一六頁にこの曲海といふ本の成立年代を考へるに、この本の所持者が大和宗恕に稽古した旨を書入れてある箇所が見えるから宗恕が没した慶長九年(大日本史料による)前後のものと考えて宜しからう。

とあるだけで、浅井織之丞への言及はないから、戦後になっての御意見のようである。表も『鴻山文庫本の研究』で江島説に従った。藤堂家の侍ながら同家能大夫として慶長十七年から活動している彼ならば、金春流ではあったが純粹の玄人とは違うので、節付が上掛り・下掛り混在の曲舞集を編むこともあり得たろうとの見地や、鳥養道断と縁のあった可能性も考えられることなどからの推測で、格別の根拠があるわけではない。だが、初出記録が慶長十七年には前述の「遅くとも慶長前半以前」の推定とは年代的に無理があるし、主君たる藤堂高虎の金春(下間少進を含む)鼯鼠や喜之助自身の金春との縁の深さ(金春大夫安照の(二人静)のツレを演じ、下間少進との共演が多い)を考慮すると、金春大夫安照や下間少進の本をなんら参照していないことが不審である。上掛り節付主体の曲舞集を編むこと自体もあり得ないように思われる。幽斎や宗恕に教えを乞うほどの境遇にあったことも考え難い。浅井喜之助説は撤回するのが無難であろう。実は浅井喜之介が観世流浅井家の先祖であるとの江島説も根拠が不明確なのである。

とは言え、特定の人物に擬する別案があるわけではない。むしろ、先に想定したような、幽斎や大和宗恕に習ったとかの識語が校合に用いた本の識語の転載であるケースや、本書の全体が原本の忠実な転写であるケースが、より可能性が強いのではないか、との考えを近年は強めている。同一人の識語としては年代的にかなり無理があるし、寛永

を遡る古写本とは節付の面からも考え難いからである。そうであっても、素人の数寄者で上掛り・下掛り双方の本を参照し得る立場にいた人であろうこと以上に原編者の姿を浮き上がらせることはできないが、編者・筆者をめぐる一つの仮説として提示しておく。編者・筆者が不明であっても、本書の資料的価値にはなんら影響がないはずである。

〔六〕車屋謡本と『曲海』との関係をめぐって

山科弥右衛門本に次いで本書が多くの曲で参照にしているのが、車屋道晰本であった。識語に「車屋」または「道晰」の名が見える十九曲のうち、「車屋道晰以本(または「以節」写也)」などの識語があり、本来の節付も下掛りで、確かに道晰本を底本に詞章が書写されていると認められるのが、

雷電(43)・箆祇王(44)・碁(45)・実方(46)・玉取(88)・富士山(92)・譲葉(93)・九品(94)・年代記(117)・東国下(123)・西国下(124)

の十一曲であり、「中ノ朱車ヤ道晰写」などの識語があつて節付の校合に車屋本を参照しているのが、

近江八景論儀(50)・教経(53)・松浦物狂(74)・高野物狂(76)・由良物狂(77)・当願暮頭(97)・香椎(114)・嶋廻(118)の八曲で、各曲とも下掛り節付で朱筆校合が施されている。また、78(賀茂物狂)の識語は「左ノ朱山科弥右衛門節」だけで、左の朱は山科本にふさわしく上掛り節付であるが、右にも朱筆の校合があり、それは下掛り節付で、文句の校合が資料ネ《曲舞本》の同曲と一致している。実際には車屋本を参照して校合したのに注記を脱したのであろう。それを加えた二十曲を車屋本関係の曲と見て置く。物狂能(当願暮頭・嶋廻)の曲舞が六曲とも節の校合なのは、編者がそれに興味を抱いて早くに別本で節付を済ませてあつたためであらうか。

二十曲の内、(雷電・碁・高野物狂・年代記)を除く十六曲は資料ネ《曲舞本》所収曲である。識語に車屋の名のない

分や無識語分を加えた全体に、ネの三十曲の二十六曲までが含まれている(例外は〈丹後物狂・弓矢立合・船立合・金塔〉)事実をも勘案すると、本書編者が資料ネを直接参照したことも想定できよう。そうした観点から、底本として車屋本を使用している曲の詞章をネと比較してみたところ、〈東国下〉に三度現れる「国府」を、最初の「見付の国府」だけ仮名書(「こう」と「コウ」)にし、「駿河の国府」「伊豆の国府」は「府」とのみ書く特異な文字づかい(14頁参照)の一致を初め、総じて楷書風の本書の書体の中では異風の字体の漢字がネと酷似している場合があるなど、それらしい点が確かに存在している。だが、「国府」の文字づかいが資料ノとも共通することが示すように、ネとは別種の鳥養道晰筆の曲舞本を参照した場合にも同じ現象が生じ得る。前記の二十曲にネには無い四曲が含まれている事実や、重なり合う十六曲でも、ネの〈六元・八景・東国下・西国下〉が本書では〈実方・近江八景論儀・東金・西金〉になっている曲名の違いや、ネの〈六元〉はクセだけなのに同曲たる本書の〈実方〉はクリ・サシ・クセから成るなどの大きな相違があることをより重く見て、資料ネ《曲舞本》とは別種の道晰曲舞本を参照したと見なすべきであろう。道晰本を底本とした本書の本文の方が漢字を多用しており、一部は本書筆者の知識に基づくにしても、大半は原本の文字づかいの踏襲であろうから、文禄四年奥書ながら実際には天正九年以前に書写されているらしいネよりも、後年に道晰が書写した本を参照したようである。「宗晰」ではなく「道晰」の名が用いられていることもそれを思わせる。

車屋道晰本を、43と46と四曲連続して底本に使用し、しばらく間を置いて92と94と三曲連続の底本採用があり、末近くの123・124でまた二曲が続く形から、何回かにわたってまとめて道晰本を参照したことが想像され、それは本書の原編者が鳥養道晰と近い関係にあったことを想像せしめる。編者を想定する際に考慮すべき条件の一つであろう。

資料ネ《曲舞本》にはないのに本書が道晰本を参照している四曲の内の117(年代記)は、元弘以後の年号と年数を羅列した一種の使用謠で、本書の形が最古のものらしいが、それが「天文年ノ御代コソメタカリケレ」の文句で終わっ

ていることが注目される。かかる使用謡には、『上杉本乱曲集』の同種の曲（日本皇年代記）が「延宝の御代こそ……」で結んでいる例のように、年号が改まるにつれて増補される傾向がある。従って、道晰本の（年代記）が天文で終わっている事実から、道晰が同曲を書写した時期が天文をさほど隔たっていないことが推測されるのである。実際の書写は天文以後のはずなのに弘治・永禄・元亀・天正などの年号を増補していないから、原本を忠実に写しただけとも言えるが、それでもやはり、道晰が蒐集した資料の成立時期を限定できる点が意義深い。資料『暁道本』の年記「天正三年」以前の道晰（鳥養宗晰）の謡歴を探る一つの手掛りではあろう。

さて、本書の道晰関係の識語で注目されるのは、「車屋道晰」の形（43・92など）と、「鳥飼道晰」の形（123・124）とが共存していることである。江島本一五〇一六頁に言及があるように、これは鳥飼（鳥養）道晰が「車屋」とも称したことを物語っているよう。「道晰」の名がかなり特異なのに加えて、同一書物の中の同性質の識語として「車屋道晰」と「鳥飼道晰」が共存し、しかも車屋道晰の本も鳥飼道晰の本も下掛り節付なのであるから、車屋道晰と鳥飼道晰とが同一人であることに疑問の余地はあるまい。鳥養道晰が「車屋」と称したことは、後になって松山坦齋の『花押譜』などからも知られたが、江島伊兵衛氏が「車屋」が鳥養道晰の異称であることを確信されたのは本書の識語によってであった。その発見が江島氏の車屋謡本研究を大きく前進させたことは、「序説（一）車屋本研究史」の「5 江島氏の『車屋本之研究』」の項にすでに述べたごとくである。そのように車屋謡本研究史に特筆するに値する寄与をしたことを、本書『曲海』の価値の一つに加えておきたい。

なお、鳥養道晰の別称「車屋」は、恐らくは彼の屋号的なものであったろうが、道晰の経歴について考察する別章に詳述するつもりなので、ここでは省略することにする。

六 吉川家旧蔵鳥養道晰手沢本（資料ハ《吉川小本》）

吉川家（旧岩国藩主）旧蔵本。同じく吉川家旧蔵本だった資料ネ《曲舞本》と共に、昭和二十四年四月に鴻山文庫蔵となった。江島本の「八、鈔写車屋本」の節の「五吉川本」の項に、「（丙）小形謡本」と題して、「（甲）曲舞」「（乙）大形謡本」と一緒の形で紹介されており、表も、『鴻山文庫本の研究』の「二下掛り写本」の項で「18 吉川家旧蔵車屋本 二十一冊」と題してかなり詳細に考察している。鳥養道晰の手沢本だったことが確実で、鈔写車屋謡本の中でも最も重要な位置を占め、かつ問題も多い本なので、鴻山文庫が法政大学に寄贈された後の精査の結果や新しい知見をも加えて、旧説を補訂しつつ、より精密に紹介・考察しておきたい。各冊の番号など、『鴻山文庫本の研究』とは変更している点がありあることをお断りしておく。

〔一〕所収曲目〕

資料ハ《吉川小本》は、現在は二十一冊・一一二番（二番が重複し、曲数は二一〇）の形である。内容説明の便宜のため、まずその所収曲を掲出しておく。各冊に番号を添え、曲名の文字は内題・扉題・外題（後にそのすべてを掲出する）を参照して選び、仮名には漢字を当てた。冊の順序を定めた基準や曲名下の注記については後に言及する。また、数冊の末尾に小謡や語りが付載されているが、⑬の分（愛寿2・殺生石・碁3）以外は道晰自身による加筆である。それらの小謡については本章三「車屋謡本小謡の性質」の条に言及したので、そこをも参看いただきたい。

- | | | | |
|-----------------------------|------------|------|------------|
| ① 三井寺・松虫・玉葛・錦木・葵上 | 宗晰署名 | 主与十郎 | 角印二個 |
| ② 千寿・吉野静・烏頭・小督・蟻通 | 宗晰署名 | 主与十郎 | 角印二個 |
| ③ 小塩・誓願寺・西行桜・羽衣・山姥 | 宗晰署名 | 主与十郎 | 角印二個 |
| ④ 恒正・野守・大社・阿古木・養老 | 宗晰署名 | 主与十郎 | 角印二個 |
| ⑤ 三山・苧萱・野干・白鬚・頼政 | 宗晰署名 | 主与十郎 | 角印二個 |
| ⑥ 目闇景清・花形見・橋姫・七夕・黒塚 | 宗晰署名(主与十郎) | 角印二個 | 付小謡1曲 |
| ⑦ 佐保山・屋嶋・昭君・箆太鼓・花月 | 宗晰署名 | 主与十郎 | 角印二個 |
| ⑧ 満仲・放家僧・吉野・雨月・国栖 | | 角印二個 | |
| ⑨ 融・春永・芳野・鉢木・初雪 | 宗晰署名 | 角印二個 | |
| ⑩ 雪・求塚・柏崎・通小町・橋弁慶 | 宗晰署名 | 角印二個 | |
| ⑪ 仏原・谷行・檀風・弓八幡・張良 | 宗晰署名 | 角印二個 | |
| ⑫ 鶏立田・輪蔵・立田・朝顔・俊寛・巖狸々 | 宗晰署名 | 角印二個 | 付小謡1曲 |
| ⑬ 右近・夜討曾我・禅師曾我・土車・大会 | 宗晰署名 | | |
| ⑭ 卒都婆小町・関寺小町・鵜飼・春日竜神・老松 | 宗晰署名 | 角印二個 | 付小謡5曲 |
| ⑮ 角田河・石橋・吉野詣・国栖・嵐山 | 宗晰署名・道晰署名 | 角印二個 | 付小謡1曲 |
| ⑯ 黒川・貴船・菅丞相・小林・恋松原・草紙洗 | 宗晰署名 | 角印二個 | |
| ⑰ 和布刈・胡蝶・藤永・粉川・雲雀山・絵馬・浜川・寢覚 | 道晰署名 | 角印二個 | |
| ⑱ 飛雲・木曾・箆祇王・碁・正尊・玉井 | 道晰署名 | 角印二個 | 付小謡2曲・語リ1曲 |

①9 韋駄天・内府・狭衣・松浦鏡・舞車

道晰署名

角印二個 付小謡6曲(後人加筆)

②0 枕土童・酒天童子・生贄・鶴若・岡崎・先帝

道晰署名

角印二個

②1 花箭倉・千引・愛宕空也・隠岐物狂・恋重荷

道晰署名

角印二個

〔二〕書誌等の大略

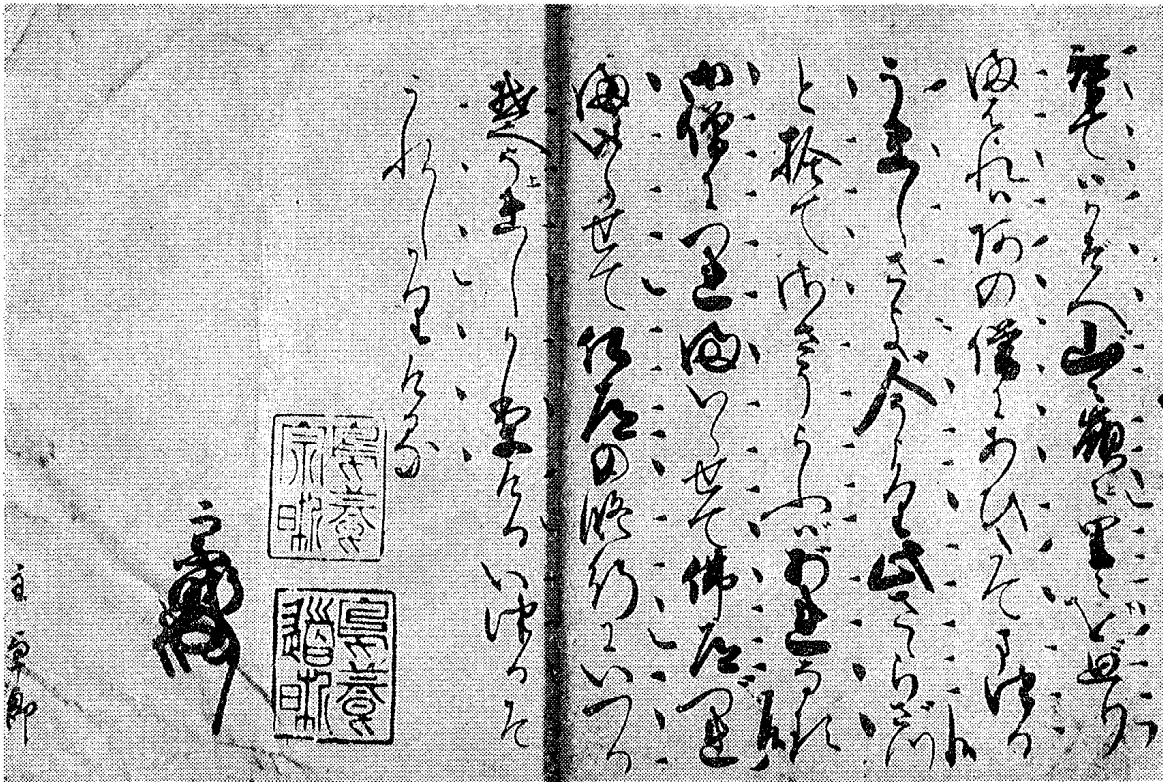
《吉川小本》二十一冊は、外面を漆(赤みを帯びた栗色)で塗った木箱に収められている。この箱は、縦255・横214・奥行170ミリ、材質は桐らしく、懸戸(縦250・横199)・金具(上部の把手や懸戸・引出しのつまみ)付の古い物で、江戸初期以前の製作と見られる。上部前側(懸戸の上溝の部分)のみ塗りのない白木で補修されている。内部は仕切り板で区切って四個の抽斗を収め、各抽斗(縦57・横197・奥行146)も漆塗り(外は栗色、内は黒)で、前面にはつまみの金具、底には指穴がある。懸戸の表側の右上に「第十七類／第三号／能楽書類」(傍点部は謄写版刷)とある吉川家時代の整理札が貼られ、別に「車屋謡本 廿一帖／鳥養道晰手控本／岩国吉川家伝来」などの江島氏筆の貼紙数種があり、古い貼紙を剥がした痕跡も残る。蓋の裏面(黒漆塗り)にはほぼ全面にわたる厚手の紙を貼り、二十一冊の所収曲の曲名を、各冊の第一曲のみ上に寄せて四段に列記してあるが、これは江戸初期頃の筆らしい。なお、江島本五〇頁には本書の本箱の蓋に「自筆自抄／車屋謡本／百廿冊」と墨書してあるように述べてあるが、それは同時に調査した資料フ《吉川大本》の分と混同したもので、江島本の「(丙)の小形本」の記事を「(乙)の大形本」と修正すべき所である。

綴帖装の小型本であることは全冊共通するが、装幀が一樣ではなく、前掲曲目一覧の番号を用いて記せば、横本が二冊(①⑦⑧)。縦128、横182ミリの混じり、十六冊は五番綴であるが、①⑦は八番綴、①②③④⑤⑥⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿の四冊は六番綴である。縦長の十九冊は、大差はないがまちまちの大きさで、縦157・横120ミリ(①⑤)から縦175・横128ミリ(②①)にわたる。三帖仕立が

大半ながら四帖の冊(⑩⑬)や五帖の冊(⑳)もあり、一帖の丁数にも幅がある。表紙は、⑧のみが行成表紙風の磨出し模様入り焦茶色表紙、⑬⑭⑮⑯の四冊は薄茶色(渋色)表紙であるが、他の十六冊は茶色無地の厚葉の斐紙に金界を施して般若心経を写した経文を裏返しにして用いたもので、川瀬一馬博士がこの経文を鎌倉期を下らぬ古写経ならんと鑑定された由が、江島氏手沢本四八頁に書き込まれている。題簽は⑧のみが鴻山文庫入庫後に江島氏が書いて貼ったもの、⑫が朱色、⑬⑭⑮が赤色、他の十六冊は唐紙風の白茶色(薄赤味を帯びたものが多い)で、大きさは縦105・横50ミリ前後(横本の二冊は⑬が96×58、⑭が95×46ミリ)。五番綴の場合は右上・左上・中・右下・左下の順に曲名を配置し、六番綴・八番綴は二段で上段・下段の順。その文字は確実な鳥養道晰の筆跡と認定され、装幀を整えた時点で大半は一括して執筆したもののようである。表紙の右上部に50×40ミリ程度の何かを剥離した跡が各冊にあるのは、吉川家時代の整理札の跡であろう。表紙見返しは本文料紙と同質の交漉紙(または斐紙)で、そこ(⑧⑬⑭)の三冊は第一紙が白紙で、その裏に所収曲を列記してあり、それを扉題と呼びたい。この扉題も道晰の筆に相違ないが、これまた装幀を整えた際の執筆であろう。料紙は厚手の斐楮交漉紙が主体であるが、中葉の斐紙もかなり混用し、どちらもそれぞれ厚さが一様でない。交漉紙だけの冊(⑩)や斐紙だけの冊(⑨)もあるものの、両者の混在する冊が多く、一帖に混在していることもある。綴糸は白または薄水色の絹糸が主体で、黄色や朱色の糸も稀に混じる。四本ほどを束ねて使用しているが、年月を経て脆弱化し、それが切れて一冊が前半と後半や数帖に分離している冊が過半に達する。

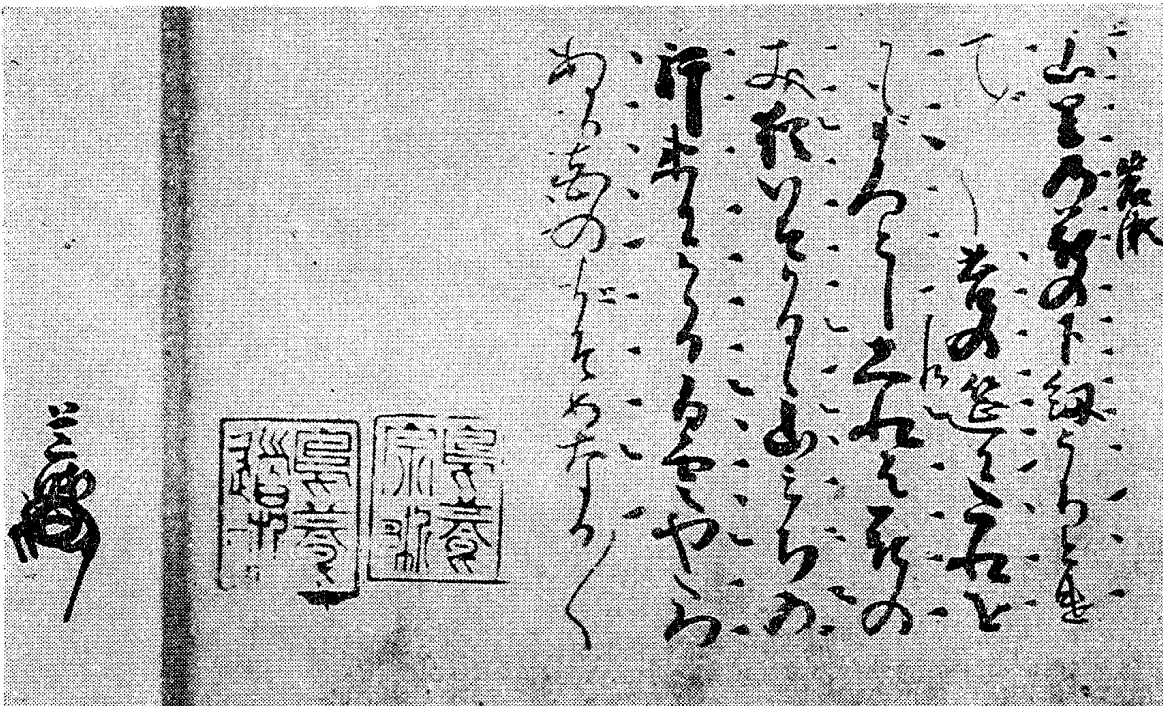
本文の書体は鳥養流で、ほぼ全体が鳥養道晰(宗晰)筆と認定されるが、瞥見しただけでは数筆が混じているとの印象を受けるほど書風に幅があり、書式も節付の体系も一様ではない。それらについては後に詳述する。

書写に関する奥書はどの冊にもないが、⑧を除く各冊の末尾に、①②⑬と⑭⑮には「宗晰(花押)」の署名、⑬⑭⑮には「道晰(花押)」の署名、⑮にはその両方の署名がある。また、末尾に余白のない⑬を除く二十冊の末(多くは署名



(40) 吉川小本 ⑦の冊末尾（宗断署名・与十郎署名の一例）

(41) 吉川小本 ⑬の冊末尾（道断署名の一例）



と同じ面)に、「鳥養／宗晰」(29×23)、「鳥養／道晰」(31×24)とある二個の角形墨印が押捺されており、その角印は資料ネなど他の車屋謡本に見られる物と同じ印である。かかる署名や印の存在からだけでも、本書を鳥養宗晰(道晰)の手沢本であったと認定してよいであろう。諸家からの依頼に基づく本——資料カ・キ・ク・ケ・コ・サ・シ・セ・テ・ヒ・フなど——の署名に必ず見られる「沙弥」の謙辞を伴っていない署名なのも自分の手元の本であったがゆえと解されるし、内容面にも道晰手沢本であったことを物語る多くの特色が存在している。それについては後述することとし、以下では宗晰(道晰)手沢本と認定した立場で説明してゆく。

二十一冊の中でただ一冊だけ宗晰(道晰)の署名のない⑧は、表紙も他と異なり、原題簽もなく、後述するごとく首部に宗晰筆か否かが疑われる異風の書体が混じ、二曲(吉野・国栖)が他の冊と重複するなど、他の二十冊とは異質な点が多い。本の大きさなどが類似し、角印もあるので、一群の本として伝来したことは間違いないが、息子の新蔵など他人に与えた本が道晰の手元に戻ったのに書き継いだといったような、特別の事情のある冊と推測される。

また、宗晰の署名のある冊のうち、①⑤と⑦の六冊は、署名の左右またはその前後の面に「主 与十郎」と記されている。⑥の冊にも同じ署名があったのを、抹消してその上に宗晰・道晰の角印を捺しているから、この与十郎は後年の「主」ではなく、角印押捺以前の所有者に違いない。⑥がこの署名(削除捺印)の後に小謡を付載し、その末に宗晰署名が位置することなどから判断すると、宗晰の署名よりも「主 与十郎」の署名が先に書かれていることが確実視される。「与十郎」とは鳥養宗晰の初名と推測されるが、それについては次項にまとめて考察する。なお、江島本には「主与十郎」の他に「馬菊」なる字が記してあるように解説してあるが、それは他本の注記を混同したものであるよう、本書に馬菊なる名はどこにも見えない。

〔三〕与十郎は宗晰の初名であろうこと

《吉川小本》の詞章の内容に立ち入るのに先立って、数冊に見える「主与十郎」なる識語の「与十郎」が鳥養宗晰の初名であろうことを推測しておきたい。長年月にわたって書写された本であることを確認した上でなくては、多様な書体の混在などの説明が困難と思われるからである。

鳥養道晰は天正三年の《曄道本》十六冊の表紙や本文末尾に「主宗晰」とか「持主そうせつ」とか署名しており、自己の所持する本に「主」とか「持主」を冠した署名を添える慣習を持っていたと認められる。息子の新蔵が資料ソ《聞書》や資料ネ《曲舞本》に「主鳥養新蔵」とか「主新蔵」と署名しているのも、父の慣習を継承したものに違いあるまい。後代の粗末な版本の謄本にも同じ形の所持者明記が幾つも見られ、道晰父子に特有のことでは勿論ないが、誰もがそうしたと言えるほど一般的な形でもない。むしろ文禄前後にはやや特徴的な署名と言って差支えあるまい。少なくとも当時の謄本ではそうである。「主与十郎」はそうした特徴的な所有者明記の形態が「主宗晰」と共通し、その点からだけでも、与十郎を宗晰の初名(または別名)と推測することが許されるであろう。

しかも重要なことは、「主与十郎」の署名のある①⑤および⑦の各冊では、その署名に続けて「宗晰(花押)」と署名していながら、それ以前に書かれていた「主与十郎」を宗晰が削除・塗抹・線引などで抹消せず、そのまま残している事実である。他人の署名ならば、持主が変わったからこそ宗晰が署名したのであるから、当然なんらかの形で「主与十郎」は消去されたはずである。自己の昔の署名であるからこそ、それを宗晰は昔のままに残したのである。この点から、与十郎は宗晰と同一人物であることを強く主張できるものと思う。

その観点からは、⑥の冊が「主与十郎」を削除してそこに「鳥養／宗晰」「鳥養／道晰」の二個の角印を押捺していることが問題となろう。だが、⑥の場合は、本文が末丁の大半を費やして終わり、末行に「主与十郎」の署名が書

かれていた。後表紙見返しがその直後に続いているが、そこに〈春日神子〉の小謡を書き、最終行に宗晰の署名があるため、二個の角印を捺す余白が全くなく、やむを得ず「主与十郎」を抹消してそこに押印したのである(写真50参照)。かつ、その押印は恐らく宗晰自身によることではあるまい。「鳥養宗晰」と「鳥養道晰」の二個の印を、余白のある所は横に、余白のない所は縦に、すべて並べているのであるから、印の押捺は宗晰が名を道晰と改めた後になってのことに相違ないが、「宗晰(花押)」や「道晰(花押)」の署名は角印の押捺を予定せずに書かれていることが位置関係から明瞭であり、道晰自身が印を押したと見なすべき理由は何も存在していない。^⑮に宗晰・道晰の両署名があることにも現れているように、両方の名を併用していた時期が道晰にはあった(五1(二)参照)が、印が押捺されたのは慶長元年以後のはずであり(慶長元年に書写された冊があることは後述する)、名が道晰に確定した後になって以前の印をも全冊に本人が押捺するのは不自然であろう。どちらの署名もない^⑮にまで二個の印があることを勘案しても、印の押捺は道晰以外の人の手による可能性が大きいと思われる。本人ならば、押印よりは署名を優先したはずであるから。そう考えられるので、⑥の冊の「主与十郎」の署名削除は、与十郎を道晰の初名と解することの障害とはならないはずである。なお、資料ネ《曲舞本》にも二つの角印が押捺されていた。それも後の押印であろうことはすでに述べたが、同書奥書に「主新蔵」の署名も併記されている事実を参照すると、父の没後に《吉川小本》を継承したであろう息子の新蔵が、ある段階(吉川家に譲る時?)に父の印を押捺したものかと推測される。

「与十郎」を道晰の初名と考えたい根拠の一つは、道晰の通称が「与左衛門」であり、「与」の一字が共通している事実である。天正九年の資料ア《喜勝目録》は「鳥養与左衛門入道」宛であった。その「鳥養与左衛門」を宗晰であろうとした『鴻山文庫本の研究』時代の私の推測は、後に出現した資料イ《与左書状》の署名「鳥与左入 宗晰」によって裏付けられ、宗晰(道晰)の通称が「与左衛門」であり、天正九年の段階で彼が出家入道していたことが明らかにな

った。そのことを紹介した本章一2に述べたように、当時の宗晰はほぼ五十歳ぐらいの年齢に達していたであろう。その「与左衛門」なる通称が若い時代からのものとは考え難く、若年には別の通称で呼ばれていたものと思われる。例えば観世座の小鼓の名人宮増弥左衛門親賢の若名が弥六であり、太鼓の名手観世(似我)与左衛門国広の若名が与五郎だったように、衛門とか兵衛とかの官名に類する通称はかなりの年齢に達してから称するのが当時の一般的慣習であったからである。鳥養与左衛門宗晰も別の若名を持っていたに違いあるまい。そして、若名の一字を後の通称に残すことも当時の常であったから、晩年までの手沢本に見える署名の「与十郎」を彼の若名と考えることはすこぶる自然な推測なのである。それに、前述の「主」の用法や、「主与十郎」の署名を抹消もせずに道晰が残して置いた事実を加え、「与十郎」が鳥養与左衛門入道宗晰の若名であったことは確実と言ってよいと信ずる。

ところで、宗晰が与十郎と称した時期は、天正三年の《曄道本》に「宗晰」の署名があり、それは雅号的性格を共有してはいたろうが法名風の名であることなどから、同年以前である蓋然性が強いと思われ、天文末年頃から永禄・元亀の頃であったろう。四十歳まで若名で通したとすると、假定生年(天文元年。本章二2末尾参照)に従えば元亀二年(二五)までである。「主与十郎」の署名のある冊はその頃以前に本文が書写されていたに違いあるまい。一方、《吉川小本》には、(八)に述べるように慶長元年(二五〇)の書写であることの知られる冊も含まれているから、少なくとも二十五年以上の長期間にわたって書写された本の集積が《吉川小本》であることになる。事実、それにふさわしい複雑な様相を《吉川小本》は備えているのである。

〔四〕鳥養宗晰の本姓は「成延」か—永禄三年本転写「鳥養宗慶所持書札法」(資料中《書札法》)について

「与十郎」の名について考察したついでに言及しておきたい関連資料がある。江島氏手沢本六八頁(一二書道鳥養流

の項)の江島氏の書き込みによって存在を知った宮内庁書陵部蔵の『鳥飼宗慶所持書札法』一冊(資料中《書札法》)がそれである。八寫正治氏の御好意で入手できた写真によれば、同書は袋綴の半紙本で、渋引き表紙左上の題簽に右のごとく題し、ラベルには「圖書寮／番號 515／冊數 1／函號 206 657」とある(江島氏は「函六一〇 号二〇」とする。旧番号であろう)。江戸後期の転写本で、「松岡文庫」の蔵印がある。内容は書状の宛書や側付けや署名の書き方についての故実を二十六ヶ条の箇条書にしたもので、例えば第五条に「一人と御中／賞翫の方へ如此候乍去披露書／よりは次也恐惶書たるへし」とあるのが平均的な長さで、一・二行の短文が多く、本文墨付五丁に過ぎない。第六条に「三管領御一族中之御儀如此候」の文言が見え、室町幕府時代の書札法と解される。後代の書風による転写本なので、鳥養宗慶の筆跡の資料として同書を調査された江島氏には格別に得る所がなかったらしいが、次のような奥書を転載しており、それがすこぶる興味深い。

右条々以證本成延与十郎方へ／注進之候努々不可有他見候也／為恐々々／

永禄三年六月日／

沙弥宗慶判

「沙弥宗慶」が鳥養流の祖とされる鳥養宗慶であることは、本文の内容からも断定していいであろう。右の識語中の「成延」について『鴻山文庫本の研究』が、「成延」の二字は誤写らしく、上文へ続くのか与十郎の姓か不明であるが「云々と述べているのは、「成延」なる姓を見聞いた覚えがなかったためであるが、どう読むべきかに迷うものの、それは確かに人の姓であった(後記参照)。そして、成延与十郎は、他見を許さぬ書道の故実を相伝されているのであるから、宗慶の高弟の一人のはずである。一方、鳥養宗晰(道晰)は宗慶の高弟であり、前項に考察したごとく若名が与十郎だったと信じられる。となると、右の奥書識語の「成延与十郎」と鳥養宗晰とが同一人物であり、宗晰の本姓が「成延」だったのではないかとの推測が、おのずと生れて来る。永禄三年(一五九〇)という年記も宗晰の与十郎時代と

合致している。これは極めて蓋然性の高い推測ではなからうか。宗晰が「鳥養」姓を称した記録の初出は天正九年の資料ア《喜勝目録》で、すでに与左衛門に改めた後である。もっと以前からではあったろうが、それは本姓ではなく、書の師匠たる鳥養宗慶の姓を襲ったものと解される。与十郎時代に別の姓であってもなんらおかしくはないのである。成延与十郎と署名した、宗晰の筆跡と同筆の文書が出現でもしない限りは確証を得られないことであろうが、有力な推測と自負しつつ、宗晰本姓成延説を提示しておく。

なお、鳥養宗慶の身边には、成延姓の別の人物もいた。第一章二3「書家としての宗晰」の条の末尾に言及した、鴻山文庫旧蔵の宗慶書状二通の内の一通が、「成延宗右衛門」宛であり、文面から同人と宗慶とはかなり親しい間柄だったと認められるのである。めったに聞かない姓であり、ともに鳥養宗慶と親しかったのであるから、書状の成延宗右衛門と《書札法》の成延与十郎とは近親の間柄だったに違いあるまい。書状の年代が不明確ながら、名から推して宗右衛門が年長と思われる。親子または兄弟であったろうか。宗慶書状に宗右衛門の子らしい「新介殿」の名が見えるが、宗晰の子に新蔵・忠介（『言経卿記』慶長六年八月六日等）がいた。「新介殿」と一字を同じくしているわけで、これまた宗晰（与十郎）と宗右衛門の關係の近さを思わせる。そう言えば宗右衛門と宗晰も「宗」字を共有しているが、宗晰のそれは師の宗慶の「宗」字を貰っての出家号（雅号）であろうから、あまり重視すべきではあるまい。与十郎↓宗右衛門↓与左衛門と宗晰が通称を変更したケースも、前後が「与」なのに中間だけ「宗」字を用いたことになるから、想定しなくていいであろう。

〔五〕本文書式・書風・節付をめぐって

鳥養宗晰（道晰）の手沢本だったに違いない《吉川小本》は、執筆が長年月——多分二十五年以上——にわたるのみな

らず、書写態度に幅があり、用筆もその時々で違っていたようで、本文の書風・書式(行数や文字面の高さなど)が冊や曲によって甚だしく異なり、節付の体系も一定していない。いささかわずらわしいが、その具体相を略述しておく。便宜上、「主与十郎」の署名のある(またはあった)①～⑦の七冊を「与十郎分」、道晰の署名だけのある⑩～⑫の五冊を「道晰分」、両者の中間の⑧～⑨の九冊を「宗晰分」と呼ぶことにする。

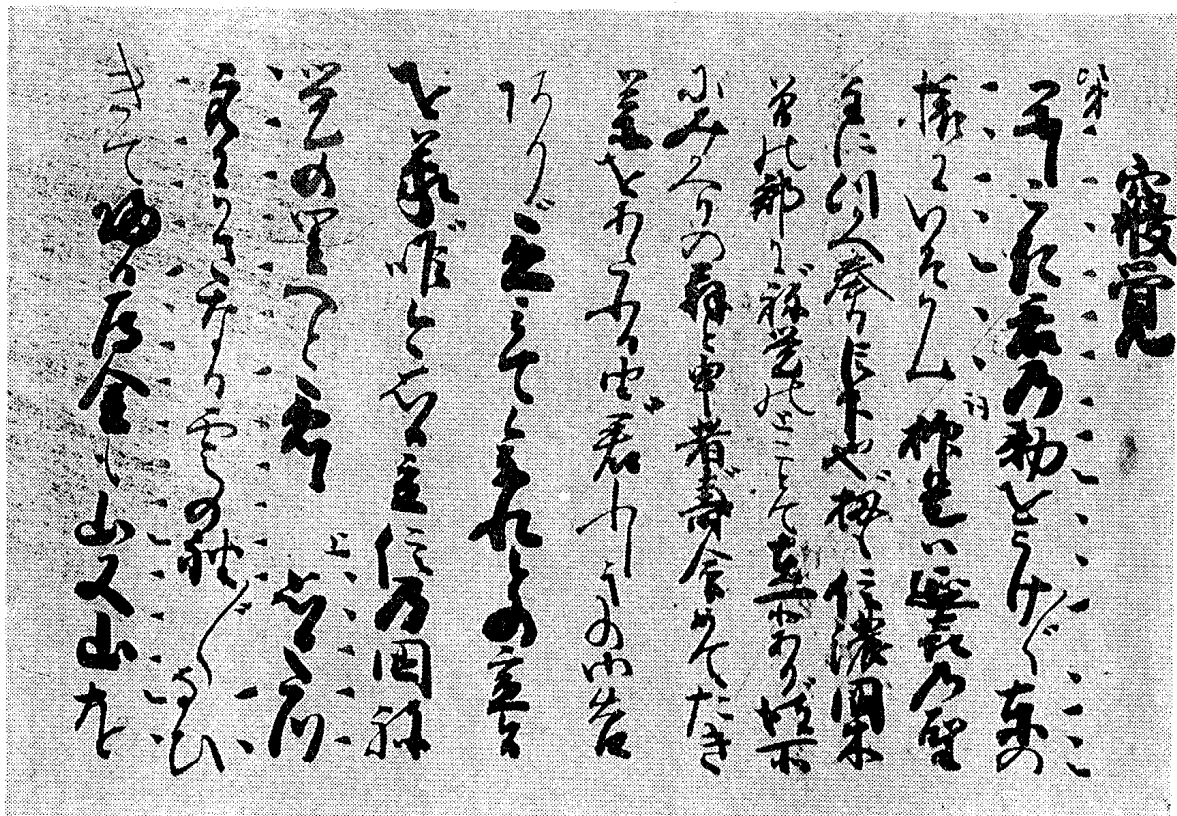
まず与十郎分の七冊は、片面六行に一定し、本文の文字面が縦130・横88ミリ程度で上下左右にかなりの余白を残した整った書式である(⑦の後半は書式がやや乱れる)が、本文の書風は、肉細で堅い感じのする①②③の三冊の分(写真④参照)と、若干の柔らかみ加わった⑤⑥⑦の三冊の分(写真47参照)とに二分され、④は両者混在の感じである。後者は資料タ《曄道本》の過半を占めていたらしい書風(既掲の写真21の《葛城》や23の《江口》の分)と同一と認められ、前者はそれよりも若書きの観がある。④の後半(《阿濃》の途中から)が曄道本の《芭蕉》(写真22参照)の書風に感じが近いのは、用筆を変更したための差と見られるが、曄道本に両様の書風が混在している事実を参照すると、宗晰の書風は、本書の①②③の形、④の後半や曄道本の一部の形、⑤⑥⑦や曄道本の大半の形と、漸次推移したもののである。

総じて本書の本文には、加筆・ミセケチ、線引の消去、抹消しての上書き、余白への異句書入れ、貼紙によるまとまった文句の追加などの形で本文訂正が多いが、与十郎分は他冊に比較してそれが著しく多い。そのほとんどは道晰自身による後年の修正と認められ、原形にはない着ゼリフの追加や地次第の詞章の追加など、車屋謡本の文句の整備の過程を示す好資料となっている——その観点からは、原文を文字通り削除したりその上に新しく書き加えたりして原形不明の所の多いことが惜しまれる——が、注意すべきことが二つある。一つは、元来の本文に明確に誤脱と認められる所がかなりあり、それを補っている修正が少なくない事実である。これは、後述する節付への配慮の不足と共に、与十郎分の筆者(≡若い頃の宗晰)が謡本の書写にまだ不慣れだったことを思わせる現象である。もう一つは、元



(42) 吉川小本〈玉かづら〉(本文加筆の一例)

(43) 吉川小本〈寝覚〉(本文削除修正の一例)



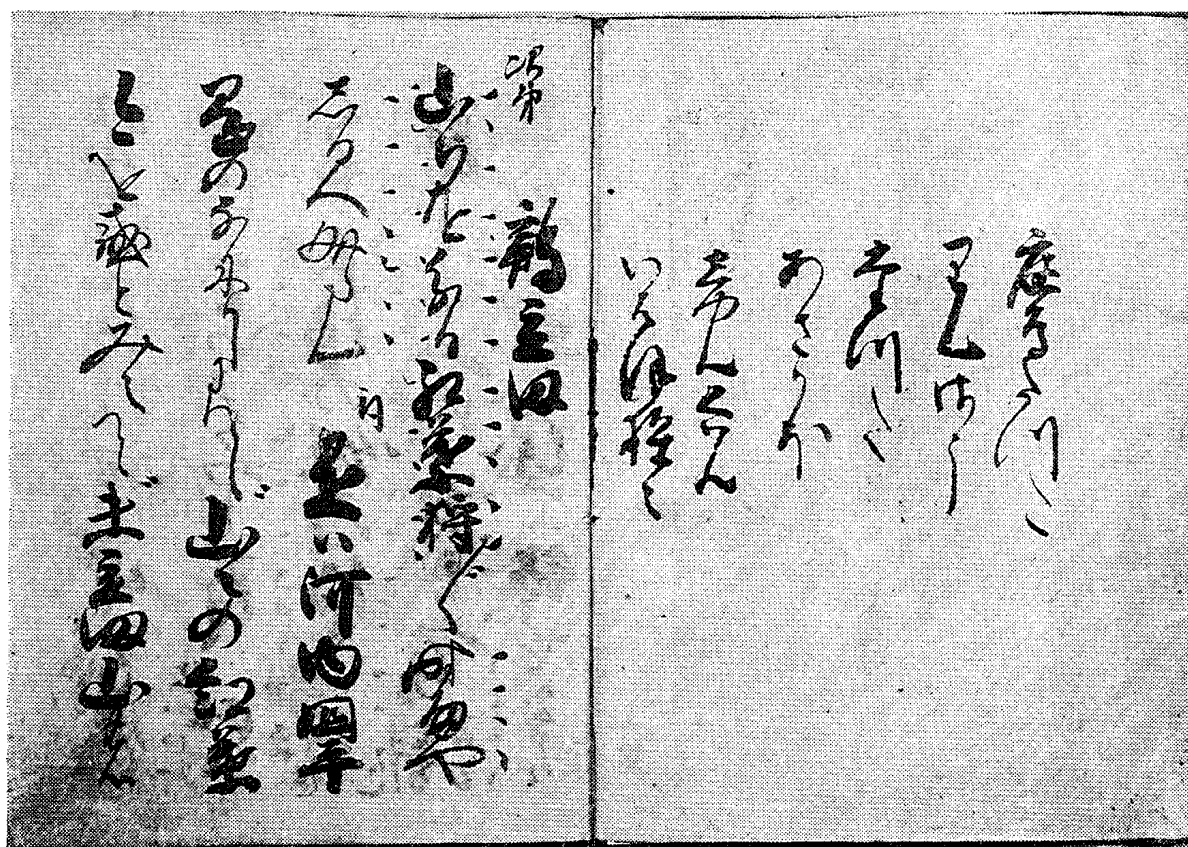
来の文句が上掛りと一致する形なのを下掛りの形に修正している所があることである。②の〈千寿〉のクセの一部や③の〈山姥〉のクセ前のサシの末句を線引で除き、④の〈阿濃〉でシテ出のサシに加筆があり、⑦の〈八島〉のワキ次第を線引で除いているなどがその例で、これらは与十郎分の一部は上掛りの本を底本にしているのではないかとの疑いを抱かせる。下掛りの先行本の形を精査した上でなくては判定できないが、一応言及しておく。

与十郎分のうち、④の〈大社〉は初同までしか節付がない。そこまでは定形通りなので他曲からの類推で節を加えたものの、以後は信頼できる本の入手を待って未完に終わったのであろうか。そうした不完全な節付が混じる上に、一応全体に節付のある他曲の場合も、役名や小段名は元来不完全だったらしく、それらには位置などから後に宗断が書き込んだように見える例が多い。本文訂正と役名記入とが同時に行われたと考えるべき位置の役名もある。しかもその役名表示の形が不統一で、「女」「僧」「尉」「山伏」などの人体名を最初の登場部分に用いるのを別にしても、主役を「して」とする曲と「大」(大夫の略記)とする曲が相半ばし――後者が①⑦の全曲と②の〈千寿・鳥頭・蟻通〉、③の〈西行桜・山姥〉、⑤の〈野干・頼政〉の十七曲――、脇役も「わき」が過半ながら「ワキ」(大と対の用例が多い)や「脇」を混用している。⑧以下の宗断分では「して・わき」系の指定が原則で「大」は用いていないから、「大・ワキ」系の節付が特殊なことになる。担当者の変更を示すへ印も有無両様で、かつ、掛合部分などでへ印や役名を書き込むために空白を設けるべき所にそれがなく、節付に際して窮屈な形でそれらを加えた例が目立つ。概して節付に顧慮せず本文を書写している観が濃く、本文書写後かなり年月を隔てて節付を加えたのではないかとの疑問を抱かせる曲が多いのが、与十郎分の節付の実態なのである。

一方、⑭⑮の道断分五冊は、横本の二冊は片面10～12行、縦長本の三冊は片面6～8行で書式が一定しないのみならず、紙面に余白も少なく、冊の後半では改頁もせずに次の曲を書き続け、全体を小さな文字で詰めに詰めて詞章

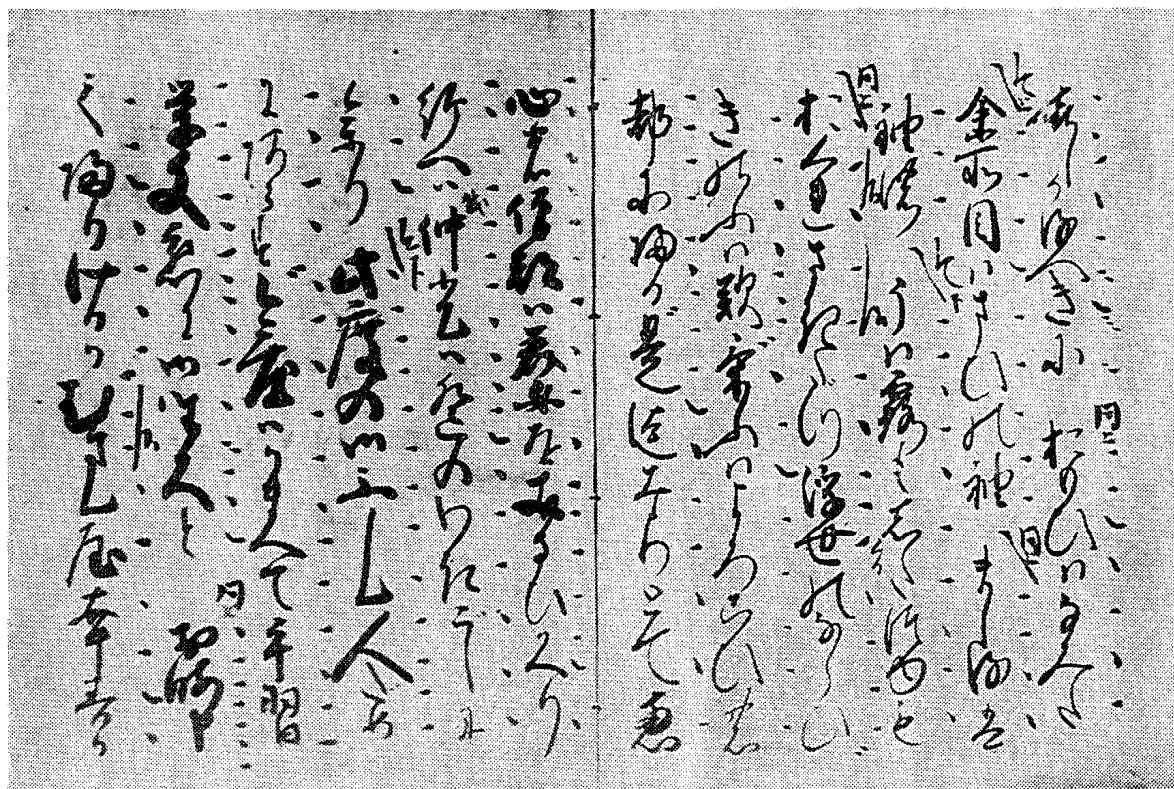
を書いているが、肥瘦の差の大きい鳥養道断の晩年の書風に一定し、役名も「して・わき」を基本とする形で一貫している。与十郎分とは全く違った書写態度なのである。短期間に集中して書かれたために、節付体系や書風がほぼ一様なのである。所収曲のほとんどが遠い曲のためか、本文訂正は書写しながらの脱字補足と見られる所が主体であるが、⑪の〈藤永〉には削除(空白にしたまま)による訂正が、〈粉川〉には線引による抹消が多く、⑫の〈正尊〉には貼紙によるまとまった追加があるなど、横本の二冊には別系統の本を参照したことに由来すると解される訂正の多い曲も混じる(写真43参照)。⑬の〈酒天童子〉だけは、無章句本を底本にしたらしく、へ印や役名は全体にあるのに、「一児二山王」の小謡の部分以外には節付がない。

書風・書式ともに与十郎分と道断分の中間的性質を持っているのが⑧⑨⑩の宗断分である。与十郎分と同じく片面6行が基本ながら、⑪の〈鶏竜田・輪蔵〉のような5行の曲(写真44参照)、⑫の後半三曲のような7行の曲もあり、⑬の〈張良〉の末二頁だけが片面8行になっているなど、同じ曲でも後半を詰めて書いている場合が多い。全体が余白を置いて整った書式になっている冊もある(⑭⑮⑯)が、その形で書き始めながら途中から詰めている冊や曲が多く、総じて書式が不安定である。書風も幅が大きく、⑭の初めの三曲〈卒都婆小町・関寺小町・鶺鴒〉が与十郎分の後半三冊や曄道本の過半の冊と類似した書風なのに、後半の二曲〈春日竜神・老松〉は道断分に近い肥瘦の差の大きい書風なのを初め、⑮は一・四曲目の〈角田河・国栖〉が⑭の前半と同じ書風、二・三・五曲目の〈石橋・吉野詣・嵐山〉は⑭の後半の書風に近いなど、冊の中での書風が大きく異なる例が多い。⑯の後半の〈通小町・橋弁慶〉も前半とはかなり感じが違う(写真48参照)。こうした書風の幅は、執筆時期の相違の反映の場合もあるが、同じ曲の首部と末部とでかなり印象の違う書体になっている例があることから、書写態度や用筆の違いから生じている場合が多いように思われる。もっとも、他の冊とは若干性質が異なると先に指摘した⑧の冒頭の〈満仲〉の場合は、細筆の、与十郎分よりも幼



(44) 吉川小本 ⑫の冊首部 (扉題の一例)

(45) 吉川小本 <満仲>末部 (左右別書体)



い感じの書体で大半の本文が書かれているのに、末の一丁（その片側は表紙見返しで、この一枚のみが異質紙）だけはガリと書体が変わり、続く四曲分と同筆で道晰分に近い書風である（写真45参照）。早くに書いた〈満仲〉一帖（共表紙の形だったろう）と後年に書いた〈石橋〉以下とを合冊する際に、表紙見返しに続くことになる〈満仲〉の最終丁を書き直したものと思われ、そうした見方をすれば、とても宗晰筆とは見えないと当初は感じた〈満仲〉も、宗晰の若年の筆跡として容認できるようである。他にも、以前に書いた本の余白に後年に追加して書いたりした冊があるのである。末尾に小謡や語りを付載した冊があるのも、余白を利用して後に書き添えたものがほとんどのようである。

以上に述べたように複雑な様相を呈しているので、宗晰分の九冊の書写年時の前後を書風に基づいて推測することは不可能に近い。⑪⑫など、肥瘦の差は大きいはまだ堅い感じの残る書風が、与十郎本の⑤⑥⑦に続く時期の分であろうか。ただし、宗晰分の最後に置いた⑬は、書風も書式も小さな文字で詰めて書いている点も道晰分と同一であり、宗晰の署名はあるものの、むしろ道晰分に一括して把握するのが妥当なようである。表紙が⑭⑮⑯と同一なのも道晰分と重なる時期の書写であることを思わせる。⑰に述べるように、道晰分より後年の書写と考えられる曲も含まれている。道晰と名を改めた後の「宗晰」署名の一例なのではあるまいか。

宗晰分では文句の修正が与十郎分に比し激減している。⑨の〈春永・鉢木〉、⑩の〈求塚・柏崎〉、⑪の〈谷行・檀風〉、⑬の〈石橋〉に目立つ程度で、他はあっても一・二ヶ所、過半は皆無である。道晰分と同様、遠い曲が多いのと、昔の本文を書写した曲が与十郎分のように多くはないためであろう。

これまで、《吉川小本》の書風や書式について与十郎分・宗晰分・道晰分に分けて説明してきたが、以下は全体にわたる節付の特色等である。

車屋謡本節付の特色たる「くる」は、全般にわたってほぼ半数の曲に見られる。1〜3例の曲が多いが、〈黒塚〉の

祈りの前後に7例も集中して現れる例外(写真47参照)もある。⑧と⑨に重複する(吉野)で別の所に1例ずつ見え、一方の「くる」が他方では「しほる」であることが示すように、両者の区別が明瞭でないが、一字だけのフシが「くる」で、数字にわたるフシが「しほる」である傾向が顕著である。その「しほる」は記号化したものがほとんどであるが、三文字の形を残した用例も稀にはある。当初の節付の一部に違いない「入」の記号もかなり多く見られる。

いわゆる車屋本系直しは本書の全般にわたって存在し、「越・捨・拾・持・乗・入・引・下声・上・中・下」などが見られる。その多くは道晰自身の手に成るものと認められるが、墨色や書体から見て後人の加筆に違いないものもあり、識別困難な例も少なくない。だが、⑧と⑩に重複して同人による転写関係(前後は認定困難)にある(国栖)に共通する直しなどは道晰の加筆に相違なく、車屋本系直しの性質を考察するにも、本書が基礎資料の位置を占めていると言えよう。⑪に付載されている後人加筆の小謡にも「上・中・下」の直しが施されており、その類は道晰の直しではないらしい。資料ナ《下間本》にあった「宮・商・角・徴・羽」の直しは全体に見えない。

⑧冒頭の(満仲)の首部三丁には、「申・候・生・向・幸・匠・経」などの文字の上に朱筆で丸印が付けられているが、これはその漢字音が開音であることを指示したもので、資料ネ《曲舞本》にもあった。⑧は前述のごとく異質の冊であるが、この朱丸印は道晰の手を離れた後の後人の加筆に違いあるまい。

本書のほぼ半数近くの曲には、上下左右の余白や行間などに、本文の仮名に対する当て漢字が書き入れられている。これまた車屋謡本の多くに見られることで、本書のそれは曲にもよるが資料ネほどに多くはない。『謡抄』所収曲の場合はその文字と一致する例もあるが、同書を直接参照したわけではなさそうである。遠い曲にも見られ、中には道晰筆跡と思われるものもある。ただし、大半は本書が道晰の手を離れて以後の後人の加筆であろう。

〔六〕各冊・各曲ごとの特色など

前項で本書の書風・書式・節付等の実態を概説したが、話が飛び飛びでまとまりが悪いので、そこに述べたことを冊や曲ごとに整理し、また前項に言及しなかったこと——主要な本文訂正や注記など——をも加えて、一覧の形で以下に掲出しておく。曲名は内題の分を最初に出し、括弧内に扉題（表紙見返しの列記）・外題（題簽の曲名）の順に記し、仮名には濁点を付けておく。なお、以下の冊順（ハ）の冊順と同じは、与十郎分を前に、道晰分を後に、宗晰分を中間に置き、一冊だけ署名のない⑧は、便宜上、宗晰分の前に位置せしめた。各グループ内での先後は装幀や書風・書式の別を参照して定めた。この冊順が必ずしも書写年時の順序通りでないことについては、（ハ）に言及するであろう。

①「宗晰」署名。「主与十郎」識語。全体が硬い書風。

三井でら〔ミゐでら・三井寺〕 靈夢の後「臈而下向申さはやと思ひ候」や「云々」を加筆。他にも小改訂少々。

松むし〔まつむし・まつむし〕 問答に誤脱あるのを加筆。

玉かづら〔たまかづら・玉かづら〕 二ノ句を加筆。

にしきど〔にしき木・錦木〕 語リ少々改訂。節付は役名追記と同時らしい。

葵上〔あふひのうへ・葵上〕 大臣名乗リ改訂。地取・中入後の問答を貼紙で追加。ミコと別にツレが出る形の節付。

②「宗晰」署名。「主与十郎」識語。全体が硬い書風。

千じゆ〔せんじゆ・千寿〕 ワキ名乗リ削除・線引で改訂。問答にも加筆所々。クセの上掛りと同文の句を線引。

吉野しづか〔よし野しづか・よしの静〕 前ナシの形。へ印ナシ。役名「して・忠信」のみ。

うとふ〔うとふ・烏頭〕 ワキとツレの問答を書入れや削除上書で小改訂。へ印ナシ。

こがう〔こがう・こがう〕 シテのセリフを書入れや削除上書で小改訂。ツレのセリフ一句加筆。ありどをし〔ありどをし・蟻通〕 セリフの誤脱修正のみ。へ印ナシ。

③「宗晰」署名。「主与十郎」識語。全体が硬い書風。

をしほ〔をしほ・をしほ〕 初同後の問答を加筆改訂。

誓ぐわんじ〔せいぐわむじ・誓願寺〕 ワキサシの誤脱を加筆修正。

西行ざくら〔さいぎやう桜・西行桜〕 文句改訂ナシ。へ印ナシ。

はごろも〔は衣・羽衣〕 文句改訂ナシ。へ印ナシ。

山うば〔山うば・山姥〕 着ゼリフ貼紙追加。シテ出前のワキセリフ加筆。クセ前のサシ末部線引。へ印ナシ。

④「宗晰」署名。「主与十郎」識語。書風は柔らかみの加わった宗晰初期風が過半。

恒正〔つねまさ・常正〕 小改訂所々。へ印は本文書写時とは別らしい。「して・脇」が後半で「大・わき」になる。

野守〔野もり・野もり〕 語リ前のセリフを線引改訂。他にも小改訂少々。へ印不完全。

大社〔大やしろ・大やしろ〕 後半節付ナシ(役名アリ)。後半の書風やや硬くなり、二頁分は片面7行。

阿古木〔あこぎ・阿濃〕 文句の改訂かなり多い。後半の書風、曄道本の一部の分に似る。

養老〔やうらう・養老〕 書風、曄道本の一部に似る。誤脱修正や小改訂所々。余白・行間の当て漢字が多い。

⑤「宗晰」署名。「主与十郎」識語。書風初期宗晰風。内題は後の書入れ(扉題と同時か)。

三山〔みつやま・三山〕 クリの末句から四句ほど誤脱し、貼紙で追加(本文と同時か)。

かるかや〔かるかや・かるかや〕 「して・子・同」の詞章のみで、亭主のセリフは記載ナシ。小修正若干。

やかん〔やかん・野干〕 クセの上ハ前後五句ほど誤脱し、貼紙で追加(節付と同時か)。へ印ナシ。

しらひげ〔しらひげ・白鬚〕 問答に小改訂少々。

よりまさ〔よりまさ・頼政〕 名乗りグリの部分削除修正。へ印ナシ。「大」が後場では多く「して」になる(追加か)。

⑥「宗晰」署名。「主与十郎」の識語を抹消(そこに二個の角印)。書風は初期宗晰風。

目闇景清〔めくらかげきよ・目闇景清〕 従者が「わき」で里人は「男」。地取の詞章を内題下に追記。道行の誤脱一句を上欄に追記。ワキの着ゼリフを余白に追記。後半にも小改訂や誤脱修正が多い。

花形見〔はながたみ・花がた見〕 前場の男も後場の官人も「わき」。男と前シテの問答末尾を削除加筆で改訂(シテの「さては我が君…見参らせ候はん」が原文にないのを補う)。官人の次第後に「かたじけなくも…けいてい天王と申也」を貼紙追加。クルイ前・クルイ後・曲舞後のワキとの問答を削除上書の形で改訂。その他の改訂も多い。末尾に「又きり」と注して安閑止(女御止)の詞章を追記。

橋姫〔はしひめ・はし姫〕 内容はへ住吉橋姫。ワキ名乗りなどに線引・加筆の改訂所々。

七夕〔たなばた・七夕〕 上欄加筆・線引消去・削除上書などによる改訂が多い。

黒塚〔くろづか・黒塚〕 ワキ着ゼリフを下欄に追記。その後の問答にも改訂が多い。中入前の問答を貼紙で一頁分追加。祈りの前後に「くる」が七例集中。「しほる」の書体は異体が大半。

末尾に小謡一曲(春日御子)(曲名不記)。盛すぎたる八重桜…うきことしげくなくもがな()を道晰の筆跡で付載。

⑦「宗晰」署名。「主与十郎」識語。書風は宗晰初期風ながら、後半は肥瘦の差が大きくなる。五曲とも「大・ワキ」系節付で、本文の書き様と釣り合う。「大・ワキ」は本冊執筆当時の節付か。

さほ山〔さほ山・佐保山〕 道行後のワキとワキツレ問答に加筆あり。シテとの問答も改訂少々。

屋嶋〔やしま・やしま〕 ワキ次第線引、名乗り後半の削除上書、宿乞いや物語り所望の問答の改変など、改訂が多い。

昭君〔せうくん・昭君〕へ印ナシ。小改訂所々。

籠太鼓〔ろう太こ・籠太鼓〕へ印ナシ。文句改訂ナシ。

花月〔くはげつ・花月〕へ印ナシ。ワキ名乗りに加筆と線引。クセ後の問答を削除増補。「とられてゆきし…悲しけれ」の詞章を上欄に加筆。

⑧ 署名ナシ。焦茶色表紙。原題簽ナシ。書風混在。末尾に余白はあるが署名ナシ。

まむぢう〔まんぢう…〕末の一丁以外は細く堅い書風。末丁は宗晰中期風。シテ名乗りと続く問答に加筆改訂。節付に後人の直し多く、「吟ツヨク」「中濁」「同吟」など。

放家僧〔はうか僧…〕文句小改訂所々。肥瘦の差のある宗晰中期風ながら堅い感じも残る書風。

吉野〔よし野…〕シテ登場のサシの後は短い上ゲ哥を書き、「此謡かへてもうたふ」と注し、貼紙で下ゲ哥・上ゲ哥の形を追記。他に小改訂若干。途中から上下の余白が多くなる。

雨月〔雨月…〕前曲後半と同書式で、宗晰中期風の書風。文句改訂少々。車屋本系直しが多い。

国栖〔くず…〕宗晰中期風の書風。文句改訂ほとんどナシ。末の一頁のみ文字が小さい。

⑨ 「宗晰」署名。全体が太筆による肥瘦の差の大きい書風(宗晰中期風)。料紙全部斐紙。〔初雪〕以外は書式が整い、車屋本系直しが比較的多い。

とをる〔融・融〕文句改訂ナシ。

春永〔春永・春栄〕シテ名乗り(元弘の合戦と言う)に一句加筆。「ともに袂をぬらしける」の後のワキセリフの冒頭を改訂。

芳野〔よし野・よし野〕⑧の同曲と転写関係。シテ登場のサシの後、下ゲ哥・上ゲ哥の形を先に書き、「又此謡も

かへてうたふ」と注して「春の山辺に……」の上ゲ哥を続けて書く。本冊分が⑧に基づくらしい。

鉢木〔鉢木・鉢木〕 シテ登場直前にワキとツレの問答、「粟の飯」の所にシテとツレの問答を上欄に追記。

初雪〔初雪・はつ雪〕 余白少なく、紙面一杯に書写。内題下に「狂言の女青柳しかく」と注記。文句改訂ナシ。

⑩「宗晰」署名。書風は宗晰中期風で、総じて文字が小さい。

露〔つゆ・露〕 文句改訂ナシ。

若菜〔もとめづか・求塚〕 ワキ名乗りの「当番の僧を友なひ」を線引。前半のワキとシテの問答に削除上書・加筆など数ヶ所。後半文字を詰める。「五体はおき火の黒煙と成たりける」を上欄に加筆。

柏崎〔かしはざき・かしは崎〕 道行や問答に小改訂少々。

四位少将〔かよひ小町・通小町〕 筆代りのためか書体がやや草書風で、前三曲とは感じが変わる。木の実づくしの直前の文句小改訂のみ。

橋弁慶〔はしべんけい・橋弁慶〕 前曲と同書体。文句改訂は末部の一ヶ所のみ。

⑪「宗晰」署名。書風は宗晰中期風。書式が総体に不安定。

佛原〔ほとけの原・佛の原〕 舞後の「法の庭人」三度反復を削除して二度に修正。

谷行〔谷かう・谷行〕 谷行執行の上ゲ哥の後に、二枚の貼紙で先達とツレ山伏の問答・掛合を追加。別に小改訂少々。役名は「山〔伏〕〔先達〕・子・母・つれ山〔伏〕・ゑん〔の行者〕」の形。

檀風〔だんふう・壇風〕 梅若を都に送り届ける由の本間のセリフ追記以外は小改訂少々のみ。客僧と船頭の問答途中から字高低くなる。「はや太鼓／風鬼出る／うちとむる」と注記。

弓八幡〔ゆみや八幡・弓八幡〕 文句改訂僅少。文字小さく、四頁目から片面7行に詰める。「クリ」の指定あり。

張良〔ちやうりやう・張良〕 小改訂のみ。末二頁を片面7行にしてやっと納める。行間の当て漢字が多い。

⑫「宗晰」署名。六番綴。朱色題簽。書風は宗晰中期風。文字比較的大きく、詰めていない書式。

鶏立田〔庭鳥たつた・鶏龍田〕 片面5行。初同の誤脱一句を上欄に加筆。後人の直しに「京ノして」などあり。

りんざう〔りんざう・輪蔵〕 片面5行。文句改訂ほとんどナシ。

立田〔たつた・たつた〕 文句の小改訂少々。以下四曲は片面6行。

朝顔〔あさがほ・あさがほ〕 改訂は文字の変更のみ。当て漢字やや多い。

俊寛〔しゆんくはん・俊寛〕 改訂は重複書写句の線引のみ。当て漢字やや多い。

巖猩々〔いはほ猩々・巖猩々〕 文句改訂ナシ。

末尾に小謡一曲〔仮称〔夏庭〕。春秋の眺も夏の庭の面：御代をあらはすけしきかなく〕を道晰の筆跡で付載。後表紙見返し〔宗晰署名の直後〕に後人が「朱槿移栽釈梵中／老僧是不愛花紅／朝開暮落渾閑事／只要人知色是空」の漢詩を墨書。

⑬「宗晰」署名。宗晰中期の書風ながら、柔らかみなく、首尾で印象や書式がかなり違う。二個の角印ナシ。

右近〔うこん・右近〕 文句改訂ナシ。余白を置いた書式。

夜うち曾我〔夜うちそが・夜討曾我〕 文句小改訂少々。

禅師曾我〔ぜんじそが・禅師曾我〕 文句改訂ほとんどナシ。

土車〔つち車・土車〕 文句改訂ほとんどナシ。上部の余白減少。

大會〔大会・大會〕「脇」を使用。ワキが所望を語る前後の問答かなり改訂。当て漢字が多い。前曲に続けて書き、

末頁は7行の小字でギリギリに本文を終え、宗晰署名も小字。墨印押捺の余白ナシ。

⑭「宗晰」署名。前半三曲の書風は宗晰初期風に近い。後半二曲は道晰風。

卒都婆小町〔そとバ小町・卒都婆小町〕 文句改訂ほとんどナシ。

関寺小町〔せき寺小町・関寺小町〕 文句改訂ほとんどナシ。「くり」の指定あり。

鶺鴒〔うかひ・うかひ〕 文句改訂少々。

春日龍神〔かすが龍神・春日龍神〕 太筆を用いた太字の多い道晰風の書風。文句改訂ほとんどナシ。

老蚕〔おいまつ・おい松〕 文句改訂ナシ。

末尾に小謡五曲を道晰の筆跡で付載（宗晰の署名を削除して書き、小謡の末に署名し直す）。仮称〈春の夕〉（ひなななれどかくばかり…催す春の夕かな）、〈恋の松原〉（はるぐとみかたの海のみえわたり…眺をなにゝたとへまし）、仮称〈こほろぎ〉（露ふかき草にはすまでこほろぎの…恋にはねられざるものを）、〈八幡弓〉（君は舟臣は水…東南西北のてきを安くたいらぐる）、仮称〈櫻の花〉（もゝしきのとのゑのあふち花さきて…光涼しき玉のはし）の五曲で、仮称の三

曲は曲名ナシ。最後の曲は文禄五年五月十四日の山科言経の新作小謡。

⑮「宗晰」「道晰」署名。書風は曲ごとかなり違う。総じて余白を十分採った書式。

角田河〔すみだ川・すみだ川〕 比較的細筆の宗晰初期風で書き出し、後半はやや草書風。文句改訂僅少。

石橋〔石橋・石橋〕 太筆の道晰風の書体。ワキ名乗り、シテ登場後の問答・掛合に改訂（節付と同時らしい）が多い。

芳野まふで〔吉野詣・よし野詣〕 前曲と同書体。ワキ・シテの問答の誤脱一句の加筆のみ。「くり」と指定。

国栖〔くず・国栖〕 この一曲のみ丁寧な書風。文句改訂ナシ。⑧の分と転写関係で、書風からは⑧が後の感じが強

いが、節付からはこちらが後らしい。

嵐山〔あらし山・あらし山〕 太筆の道晰風書体。冒頭のワキ名乗りのみ改訂がある。

末尾に小謡一曲(仮称「若竹」)。君が為千尋ある陰の年ぐに…みゆるばかりのみぎりかなを道晰の筆跡で付載。この小謡は文禄五年六月十三日の山科言経の新作小謡。

①⑥「宗晰」署名。六番綴。薄茶色表紙。書風・書式とも道晰分に近い。前半三曲は片面6行。後半三曲は片面7行。いずれも小字。〈黒川〉以外は車屋本系直しが多い。

黒川〔くろ川・黒川〕「夢想之能五番之内」と内題下に注記。役名「よせて」のみ。へ印はある。文句改訂ナシ。貴布祢〔き舟・貴船〕別名〔和泉式部〕。文句改訂ナシ。

菅丞相〔かんせうじやう・菅丞相〕後シテの役名「ライ神・ヲニ・天神」の三様。文句改訂ナシ。

小林〔こばやし・小林〕前曲に続けて書き、片面7行。文句改訂少々。狂言のセリフも記載。

恋松原〔こいのまつばら・恋松原〕「道見本写之」と末尾に小字で注記。片面7行。文句改訂ナシ。

草舂洗〔さうしあらひ・双紙洗〕片面7行(冒頭のみ6行)。「をかし」のセリフ記載。文句改訂はヲカシの歌のみ。

①⑦「道晰」署名。横本。八番綴。全体が道晰風書体の小字。片面の行数不定ながら、11行が基本。

和布莉〔めかり・和布莉〕冒頭のみ片面10行。文句改訂ナシ。

こてう〔こてう・胡蝶〕一部片面10行。「くり」の指定あり。文句改訂ナシ。

藤永〔藤永・藤永〕一部片面10行。文句かなりに変更。「ヲカシ」のセリフも記載。

粉川〔粉川・粉川〕一部片面10・12行。文の部分など、線引等による文句改訂がかなりある。狂言に「ノウ(能力)」

「おかし」の両方の役名を使用。

雲雀山〔ひばり山・雲雀山〕一部片面12行。曲舞の脱文を上欄に加筆。「さし・曲」の指定あり。

繪馬〔繪馬・繪馬〕四頁分は片面12行。ノリ地の脱文を上欄に加筆。「二ノ句」の指定あり。

濱川〔濱川・濱川〕 四頁分は片面10行。シテ登場後のワキのセリフを加筆(別人筆?)。末近くの脱文を貼紙で追記。
寢覚〔ねざめ・祢覚〕 二頁分は片面12行。ワキ名乗り削除上書で改訂。「くり」の指定あり。

⑬「道晰」署名。横本。六番綴。全体が道晰風書体の小字。片面の行数不定。

飛雲〔ひうん・飛雲〕 片面10行。節付ナシ。へ印や役名は記し、小段名も一部は書く。

木曾〔きそ・木曾〕 前曲に続けて書く。片面10行(末二頁のみ11行)。役名不完全。「ヲカシ」のセリフも記載。覚明を「おかし」と誤る。文句改訂ナシ。

籠祇王〔ろう祇王・籠祇王〕 片面10行と11行と半々。文句改訂少々。

碁〔碁・碁〕 片面10行が11行より少し多い。誤脱修正や文句改訂少々。

正尊〔正尊・正尊〕 前曲に続けて書く。片面11行(一部10・12行)。正尊を連れて来ての弁慶と判官の問答貼紙追記。
中入後に弁慶・判官の問答と上ゲ哥を貼紙追記。別に小改訂少々。

玉井〔玉井・玉井〕 前曲に続けて書く。片面前半11行、後半10行。文句改訂ナシ。「二句」の指定あり。

末尾に小謡〔四季謡〕(春の朝の山風は…袂や雪をはらふらん)、〔浜ならし〕の語り(さらばかたりてきかせ申さう…急し
ほくめとこそ)、小謡〔岩瀬〕(山里の花の下紐うちとけて…たづぬる花のよそめなるく)を道晰筆跡で付載。

⑭「道晰」署名。薄茶色表紙。赤色題簽。全体が道晰風書体の小字。

韋駄天〔いだてん・韋駄天〕 文字の改変のみ。

内府〔内府・内府〕 片面7行(二頁のみ6行)。文句改訂ナシ。

狭衣〔さ衣・狭衣〕 「道遙院殿御作」と内題下に注記。片面7行。文句改訂ナシ。

松浦鏡〔まつら鏡・まつら鏡〕 片面7行。文句改訂ナシ。

舞車〔まひ車・まひ車〕 片面7行。文句改訂ナシ。

末尾の余白に後人が別筆で小謡六曲を加筆。〈愛寿〉2、〈せつ生石〉1、〈碁〉3曲。

②①「道晰」署名。六番綴。薄茶色表紙。赤色題簽。扉題仮名書。全体が道晰風書体の小字。片面7行。

枕土童〔てつけんざん・枕土童〕 下掛りの〈枕慈童〉と同曲。文句改訂ナシ。

酒轉童子〔しゆてんどうじ・酒天童子〕 〈大江山〉の別名。「一児二三王…」の小謡以外は節付ナシ。へ印や役名はある。

いけにへ〔いけにえ・生贄〕 文句改訂ナシ。「しかく トモクシ共□取テ神主ニヤル」などの演出注記若干。

鶴若〔つるわか・鶴若〕 前曲に続けて書く。文句改訂ナシ。

岡崎〔おかざき・岡崎〕 「次郎権守作也」と末尾に注記。前曲に続けて書く。文句改訂ナシ。

先帝〔せんてい・先帝〕 前曲に続けて書く。文句改訂ナシ。

②②「道晰」署名。薄茶色表紙。赤色題簽。全体が道晰風書体の小字。〈恋重荷〉以外は片面六行で丁寧な書風。

花箭倉〔はなやぐら・花箭倉〕 文句改訂ナシ。ただし誤写もそのまま。

千引〔ちびき・千引〕 文句の改訂少々。

あたごこうや〔あたご空也・愛宕空也〕 前曲に続けて書く。文句改訂ほとんどナシ。

隠岐物狂〔おき物ぐるひ・隠岐物狂〕 僧と「をかし」の問答を欄外に加筆。曲舞後半の冒頭の別文(くり)を欄外に

別記。

恋重荷〔恋のをもに・恋重荷〕 九頁分は片面8行に詰めて書き、末四頁は7行で文字も大きくなる。文句改訂ナシ。

〔七〕所収曲をめぐって

《吉川小本》が収める一一〇曲（一二番）には、他の車屋謡本の揃本には含まれていない稀曲・珍曲がすこぶる多い。これまでに調査した範囲内では、左の四十四曲は他の車屋謡本に含まれず、かつ先行する禅鳳や金春喜勝らの謡本も伝存せず、《浜川》のみに天文十一年奥書の本が伝存する（観世宗家蔵）のを除けば、下掛りの謡本としては本書が最古の地位を占めている曲なのである。

愛宕空也・生贄・韋駄天・巖狸々・大社・岡崎・隠岐物狂・菅丞相・木曾・貴布祢（和泉式部）・黒川・碁・恋松
 原・粉河〔寺〕・胡蝶・小林・狭衣・酒天童子（大江山）・正尊・禅師曾我・先帝・草紙洗・内府・七夕・玉井・千
 引・鶴若・藤永・寢覚・橋姫・花箭倉・浜川・飛雲・雲雀山・舞車・枕土童・松浦鏡・満仲・三山・和布刈・求
 塚・吉野詣・輪蔵・篋祇王

右の外、車屋謡本では他の一本だけにしか含まれていない《嵐山・絵馬・刈萱・恋重荷・石橋・谷行・檀風・鶏竜田・初雪》や、他二本が収める《露・野干》もかなりの稀曲と言えるから、稀曲・珍曲が半数を占めていることになる。その半面、百番前後の揃いの謡本には入っているのが普通の多くの曲が欠けており、他の車屋謡本揃本がみな収める《相生・采女・江口・女郎花・兼平・源氏供養・定家・朝長・芭蕉・松風・三輪・湯屋》などの謡の人氣曲が本書には見えない。すこぶる特異な曲目構成と言わざるを得まい。

その特異な曲目を既述の諸資料と比較すると、資料ア《喜勝目録》の番謡の六十三曲——鳥養与左衛門入道（宗晰）が金春大夫喜勝から天正九年段階で相伝された曲——とでは、46%にあたる二十九曲が重複し、さすがにまだ喜勝の影響下にあることを思わせるが、本書での二十九曲は26%に過ぎない。むしろ喜勝から遠ざかっていたことを示す数値と受け取るのが正しかろう。資料ナ《下間本》の百番との重複曲が三十七曲に過ぎないことは、本書に通常の曲がいか

に少ないかを物語っている。最も注目されるのは同じく鳥養宗晰の手沢本であった資料タ《嘩道本》との関係であるが、同書の四十七曲中の十七曲が本書と重複し、その重複の様相に特筆すべき点は見出だせない。《嘩道本》は特別に大形の本、《吉川小本》は特別に小形の本で、対照的な装幀の二種の本を手元に所持していた宗晰は、収載曲の面では二種の本に使い分けをしていなかったらしく、一方の所収曲を他方には加えないといった配慮をした形跡はない。写真によって《嘩道本》の詞章の一部が把握できる《恒正》を比較したところでは、冒頭のワキ名乗りにそれぞれ別系統の本文を伝えており、一方が他方を転写しているわけではない。だが、それは《恒正》だけのことも知れず、手沢本両種の全体的な関係は、《嘩道本》の実態がほとんど不明でもあり、しばらくは明言できない。

それはともあれ、特異な曲目構成で他の車屋謡本には見えない稀曲を多数含んでいるという特色は、そのまま本書の価値につながる。稀曲・珍曲が多く、下掛り謡本としては最古の詞章が本書である曲が五十曲にも及ぶことこそが、本書の最大の価値であろう。そうした稀曲の類は、④の《大社》、⑤の《三山・刈萱・野干》、⑥の《橋姫・七夕》など、与十郎分にもすでに含まれていて、宗晰の稀曲蒐集熱が早い段階からだったことが知られるものの、⑬⑭の六冊に特に集中しており、その六冊分は全曲が稀曲である。この六冊は、横本が二冊、経文表紙にあらざるものが四冊で、他の冊とは装幀を異にし、他冊の装幀を整えた後に遅れて書写されたものと思われる。⑬のみはまだ宗晰の署名であるが、他の五冊の署名が道晰になっていることも、その推測を裏書している。つまり⑬⑭の六冊は、《吉川小本》の中でも最も後年の本であり、全曲が稀曲である点から、稀曲を集めることを目的に書写されているものと考えられるのである。稀曲蒐集を目的に編む謡本の場合、上掛り・下掛りの別は編者の問うところではないのが常である。資料口《曲海》が好例であろう。元禄十一年田方屋伊右衛門刊行の「四百番之外之百番」謡本(五百番本)が下掛り節付の曲を三分の一は混じている例もある。そうした観点から、『鴻山文庫本の研究』では、

従つて、この六冊に集中している番外曲は、道晰が、金春流以外の別系統の本に基づいて書写している恐れがあり（一部の曲を調査したところではすこぶるその可能性が強い）、一般の車屋本所収曲とは性質を異にしているものと理解すべきであろう。（同書88頁）

と述べている。右の推測を裏づけるのみならず、《吉川小本》の一部の冊の書写年時を限定することにもなる資料の存在に後に気付いたので、それを報告しておく。

鳥養道晰と山科言経との間に謡本の貸し借りが行われていたことについては江島本五八頁にも言及があるが、その実態が我われにも明らかになったのは、昭和三十四年から始まった『言経卿記』の刊行が文禄年間の分にまで進んだ四十年代になってからのことである。同書によれば、文禄三年二月二十一日の道晰に関する最初の記事が〈碇潜〉を借りたことであるのを初め、当初は言経が道晰から謡本を借りて写すことが多く、言経から借りたのは道晰より息子の新蔵が早い（文禄四年八月二日が最初）が、文禄五（慶長元）年六月二日に道晰は言経所持の「謡之本惣目六」を借用し、翌日その目録を返還している。その際に自己の所持しない曲をマークしたと見えて、数日後から集中的に言経の謡本を道晰が借りている。関連記事を『言経卿記』から引用しておこう。

- 一 鳥養道晰ヨリ謡之本惣目六借用之間遣了、（文禄五年六月二日）
- 一 鳥養道晰ヨリ謡之本目六返了、（同六月三日）
- 一 鳥養道晰暮々来了、謡之本メカリ・コテフ・玉ノ井・トウエイ四番借用之間遣了、（同六月七日）
- 一 鳥養道晰ヨリ先日謡之本返之、又ヒハリ山・絵馬・粉川寺・丹後物狂・コオウ等借用之間遣了、（同月九日）
- 一 鳥養道晰ヨリ謡之本返之、又大社・ス、キ・ヨロホシ・高野物語・清重等借用之間遣了、（同月十一日）
- 一 鳥養道晰ヨリ謡之本四番返了、残而大社有之、又ネサメ・望月・はま川・玄上・カウマ等借遣了、（同月十二日）

一 鳥養道晰ヨリ謡之本五番返了、ネサメ残而借用了、(同六月十四日)

一 鳥養道晰ヨリ謡之本返了、(同月十六日)

一 鳥養道晰ヨリ謡之本源大夫・鶏竜田借用之間遣了、後刻返了、(同月二十二日)

一 鳥養道晰ヨリ謡之本三山・玉ノ井・小蝶・鶏竜田借用間遣了、(同月二十五日)

一 鳥養道晰ヨリ謡之本三山・鶏竜田等返了、残而二冊有之、(同月二十六日)

一 鳥養道晰来了、謡之本ハマ川・ネサメ・ハニフ・菅丞相等借用間遣了、(同月二十九日)

一 鳥養道晰へ大和宗恕ヲ呼之間、可来之由有之間罷向了、……謡稽古也、觀世流フシヲ宗恕ニ道晰相尋了、玉ノ井・ネサメ・ハマ川等也、……暮々帰了、(同日)

一 鳥養道晰ヨリ謡之本五冊返了、済了、(同七月三日)

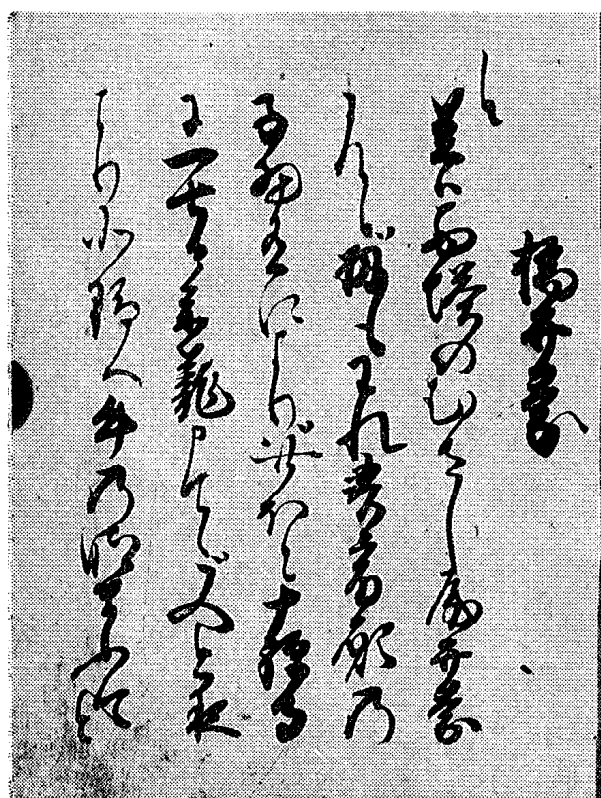
返却についての記事や、借用した謡本と関連する稽古の記事をも引用しておいた。この後にも道晰は断続的に言経の謡本を借用しているが、この期間(文禄五年六月)ほど集中していることはない。二度借りた曲(傍線の分)を除いて数えでも一ヶ月の間に二十二曲を借用しているが、総目録を見た後のことでもあり、以前から努力していた謡本蒐集のため、借用に相違あるまいから、そのほとんどを道晰は転写したものと考えられる。そして、《吉川小本》にその転写の痕跡が明瞭に残っているのである。特に顕著なのが⑩の冊で、《吉川小本》では唯一の八番綴本たる同冊は、

和布刈・胡蝶・藤永・粉川・雲雀山・絵馬・浜川・寢覚

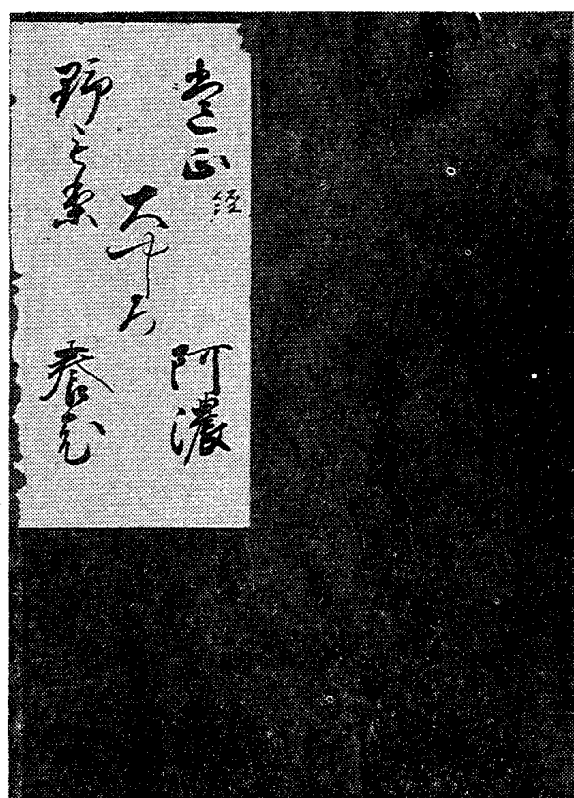
の諸曲を収めるが、最初の《和布刈・胡蝶・藤永》の三曲は六月七日に、続く《粉川(寺)・雲雀山・絵馬》の三曲は六月九日に、末の《浜川・寢覚》は六月十二日に、道晰が山科言経から借用した謡本の曲名と一致している。八番すべてがそうであり、しかも借りた日の順に曲が並んでいる事実と、《吉川小本》が道晰の手沢本であったことを重ね合わせ

て考えるならば、⑩の冊が言経本に基づいて道晰が転写した本そのものであることが明白であろう。言経から借りた本をすべて転写したわけではなさそうで、例えば六月十一日に借りた〈大社〉は、与十郎分の④に含まれ、早くから道晰が所持していた曲であるが、④では後半の節付がない。言経本もそうだったとは考え難いから、借りたものの、既存の④に節付を校合することもしないまま返還した可能性が大きかろう。しかし、わざわざ曲を指定して借りた以上、六月七日分の四曲がすべて道晰手沢本たる《吉川小本》に見えるように、大半を転写するのが自然のはずである。そうした見地からは、六月九日借用分の〈丹後物狂・コオウ(護法)〉、同十一日の〈ス、キ(鈴木。薄ではあるまい)・ヨロホシ(弱法師)・高野物狂・清重〉のすべて、同十二日分の〈望月・玄上・カウマ(降魔)〉、同二十六日の〈呂后・冠〉など、⑩所収曲と前後して借りた十一曲もが《吉川小本》に見えないことが不審である。《吉川小本》だけが道晰手沢本だったわけではないことは「主宗晰」の署名を持つ資料タ《嘩道本》の存在から明らかであるが、同じ時期に借用した本の転写は⑩と類似した形なのが自然である。二十一冊の形の今の《吉川小本》が、慶長初年当時の道晰所持の形から数冊を欠いた形である——右の十一曲の全部または大半を書写した二冊分などが散佚した——ことも、十分あり得るのではなかろうか。

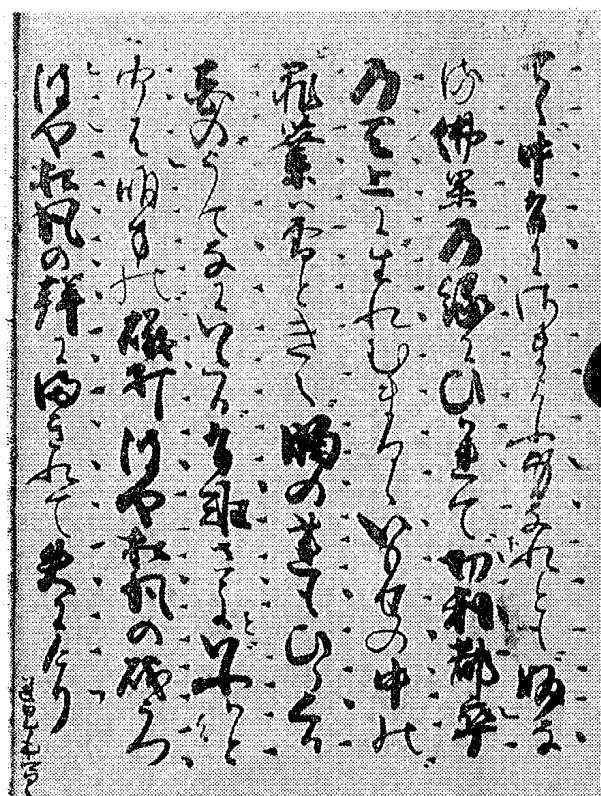
ところで、山科言経が所持していた謡本は、観世流の本が主体であったと考えられる。金春流節付であったらう道晰所持の本を借用して転写したり、毛利家の宗是なる人の流儀不明の謡本を道晰を介して借りて『言経卿記』慶長元年九月二十日、他)写したりもしているが、父の山科言経が永禄六年(一五七三)段階ですでに三百番六十冊の形で所持していた本(『言経卿記』が言経に継承されていたに違いないからである。言経の場合は、毎月の謡講で大和宗恕や淵田玄少(ともに観世流の半玄人)の指導を仰いでいたことを示す『言経卿記』の諸記事(永禄十年五月二日等)から、観世流の謡を嗜んでいたことが明瞭であり、当時の京都の謡が観世一色とも言える状態であったことから推しても、言経所持の謡



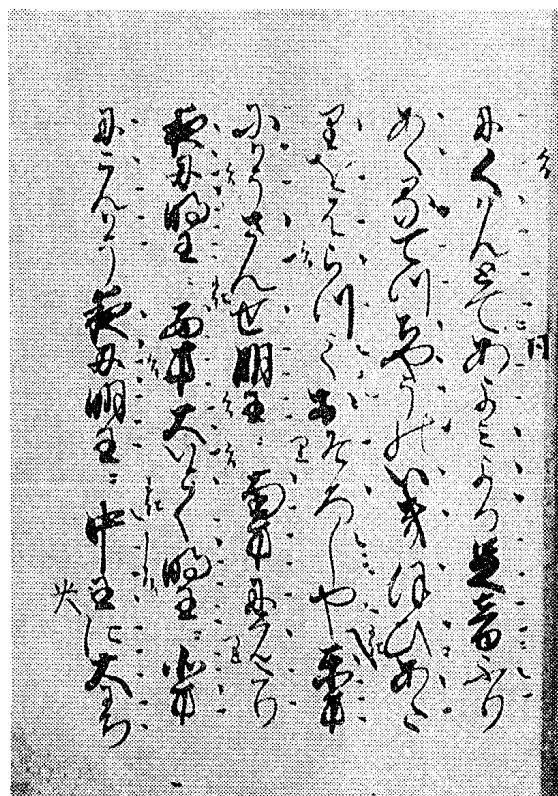
(48) 吉川小本〈橋弁慶〉首部



(46) 吉川小本 ④の冊表紙



(49) 吉川小本〈恋松原〉末尾



(47) 吉川小本〈黒塚〉

本が観世流でなかったとは考え難い。三百番も集めるとなると、後代の道晰らの蒐集と同様、系統を問わなかったであろうが、観世流節付が主体であったことは確かであろう。そうした本を道晰は言経から借りて転写したのである。金春流の謡の玄人であり、謡本節付の専門家でもあった道晰のことゆえ、金春流の節付に変えて写しているものの、その詞章が本来は観世系統である曲が混じていることは間違いない。右に引用した『言経卿記』六月二十九日の記事によれば、道晰は言経本を転写したのであろう（玉井・寢覚・浜川）について観世流の節を大和宗恕に尋ねており、それはこれらの曲が観世流節付だったからと解されることも、その傍証となろう。

遠い曲に観世流謡本の転写が含まれるであろうことは、言経本に基づいた曲のみに限ることではない。現に、⑬の〈恋松原〉は末尾に「道見本写之」と注している（写真49参照）。道見とは六世観世大夫元広の法名であり、子の七世観世大夫元忠の手に成る謡本には道見の本に基づいた由の識語がしばしば見られる。道晰が直接に道見本を転写したことは考えにくく、依拠した本の識語をそのまま転載したのであろうが、いずれにしても〈恋松原〉が観世流の本に基づいていることは明瞭である。⑳の〈岡崎〉末尾の注記「次郎権守作也」についても同じことが言える。これは作者についての注で、『能本作者注文』が同曲の作者を観世弥次郎長俊とするのと合わないが、次郎権守とは長俊の父の観世小次郎信光のことであり、信光を姓も付さずにそう称するのは観世流の人に相違なく、これまた依拠した観世流謡本にあった注記をそのまま転載したものと解される。観世宗節筆の謡本（イダ天）（『観世宗家所蔵文書目録』四19）の末尾にもまったく同文の注記がある。

右の二曲の注記は恐らく氷山の一角的なもので、他にも観世流謡本に依拠した曲が多かったろうことは、先に掲出した『吉川小本』所収の稀曲のほとんどが先行する金春系謡本の伝存しない曲である事実からも、確実視される。他の車屋謡本には例のない観世系統の役名や小段名——狂言役者を意味する「ヲカシ（オカシ）」や、「クリ」（「上」）が車屋謡

本の定形)や「曲」(「曲舞」が車屋謡本の定形)など——を用いた曲が《吉川小本》にかなり混じているのも、底本にした観世流謡本の指定に引きずられたためと解される。

その一方、⑯の〈黒川〉の注「夢想之能五番之内」は、他の車屋謡本系写本の他曲の注記を参照すると、金春禅鳳が夢想に基づいて五番の能——〈初雪・黒川・生田・六浦?・涿瀨〉らしい——を作ったとの傳承を背景とするもので、〈黒川〉は⑨の〈初雪〉や⑮の〈吉野詣〉などと同様、金春系統の本が底本だったに違いないから、《吉川小本》の稀曲の性質は曲によって一様ではなく、その認定には慎重な配慮が必要なはずである。『鴻山文庫本の研究』に指摘したように、車屋謡本の一つたる《吉本小本》に入っている稀曲の多くを他の車屋謡本所収の通行曲と同一視すべきでないことは、以上に述べたことから明白であろうと思う。

〔ハ〕書写年時をめぐって

前項に考察したように、《吉川小本》の⑯の冊は、八番のすべてが文禄五年六月七日から十六日(七・九・十二日に山科言経から借りた謡本をすべて返却した日)までの間に道晰が書写したものと認められる。同様に『言経卿記』によって言経から謡本を借用した月日が知られ、その直後に転写したと考えられる曲が幾つかある。六番綴の⑮の最後に位置する〈玉井〉は、⑯の首部の三曲と同じく六月七日に言経本を借りて九日に返却しているから、その間に、すでに五曲を書いてあった冊の余白に書写したものと考えられるが、道晰は同月二十五日にまた〈玉井〉を言経から借りて七月三日に返却している。数曲に例の見られる二度目の借用は以前に写した分の校正のためだったことが多いらしいが、〈玉井〉の場合はそうではなく、二度目に転写したようである。なぜなら、同じ⑮の冊の二曲目の〈木曽〉が六月二十九日に言経から借りたハニフ(埴生)の別名であり、先に〈埴生(＝木曽)〉を書写し、三曲を隔てて後に〈玉井〉を写した

と考えられるからである。〈埴生〉の返却も〈玉井〉と同日であった。そうしたことから、⑮の全体が六月末頃に書かれたと見ていいであろう。言経本を転写したであろう二曲の間に〈竈祇王・碁・正尊〉が介在しているのは、同じ時期に他所からも稀曲の謄本を借りて写したのだとも説明できるが、言経から借りた〈埴生〉なり〈玉井〉なりが五番綴などの形で、同じ冊に入っていた稀曲と一緒に転写した可能性がより強かるう。言経所持の謄本の主体たる父言経から相伝の三百番本は五番綴だった。言経の代に集めた稀曲は一番綴が多かったらしい。

やはり六番綴の⑯の三曲目の〈菅丞相〉も、〈埴生〉と同じく六月二十九日に言経から謄本を借りた曲である。この冊は末尾の署名が「道晰」ではなく「宗晰」なので一応⑰などより前に置いたが、書風や書式は道晰分と同じく、薄茶色表紙の装幀は⑮⑯⑰に近く、「道晰」と改めた後の文禄四年前後の「宗晰」併用の事実(前節1(二)参照)や、冊末の署名が必ずしも本文書写直後ではないらしい(付載小謄の末に署名の位置する例がある)ことを考慮すれば、⑰⑱より後の書写である可能性もかなり高い冊なのである。〈菅丞相〉が文禄五年七月三日(返却日)の直前の書写で、前後の曲もほぼ同じ頃に書かれたと見ていいであろう。

また⑲の冊(五番綴)の三曲目の〈狭衣〉は、前述の諸曲に先立って、文禄五年三月二十七日に道晰が言経から謄本を借り、四月一日に返した曲である。これまたその間の転写で、同冊の他曲も前後する時期の書写と考えられる。続く四曲目の〈松浦鏡〉が観世宗家蔵の世阿弥自筆本〈マツラ〉とほとんど同文で、観世系統の本に基づいたに相違ないと考えられることも、底本が言経本だったことを思わせ、⑲の全曲を〈狭衣〉と前後する時期の書写と見る推測の傍証となる。道晰署名のある冊で装幀が⑳㉑と同じなので⑲の位置を与えたものの、それは便宜的処置に過ぎず、宗晰・道晰両名の併用や、装幀の相違が必ずしも書写の前後と一致しないらしいことを考慮すれば、⑲が⑯⑰に先行している可能性も十分あるのである。

言経から道晰が借りた謡本と重なる曲としては、以上の他に、④の〈大社〉、⑤の〈三山・野干〉、⑫の〈鶏竜田〉があるが、④⑤は与十郎分であり、両冊所収の三曲が言経本に基づく転写とは考えられない。⑫冒頭の〈鶏竜田〉は、六月二十二日に借用して即日返還し、二十五日にまた借りて翌日返しているが、書風・書式が言経本に基づくことの明確な曲と著しく異なるから、これは校合のため借りたのであろう。《吉川小本》の同曲には「京ノして」「京ノニアリ」などと、京がかり(＝観世流)の本との相違が書き込まれており、それが言経本を校合した結果と思われる。

また⑭の、冒頭の〈花箭倉〉は翌慶長二年一月十一日に、四曲目の〈隠岐物狂〉は同年九月十六日に、鳥養新蔵が言経から謡本を借用した曲である(『言経卿記』)。息子が借りて来た言経本を道晰が書写したことも考えられるが、それ以前に新蔵が借りた多くの曲は《吉川小本》にほとんど投影していない。親子は別々に言経本を借り、別々に稀曲を集めていたらしいのである。従って、新蔵が借りた時に道晰が転写したとは言えないが、二曲ともかなりの珍曲であり、新蔵が写した本を道晰がさらに転写したことなどは想定していいであろう。そうした観点から、⑭の冊は慶長二年になつてからの書写である可能性も否定はできないように思われる。

右に、『言経卿記』の謡本貸借の記事に基づいて書写年時を限定できる曲について述べたが、他にも手掛りがある。やはり『言経卿記』の記事が基であるが、⑭の末尾に付載された小謡五曲の最後の曲は文禄五年五月十四日に、⑮末尾付載の小謡は同年六月十三日に、道晰の所望に応じて山科言経が新作して書き与えた曲である(本章四の末尾参照)。その直後に手沢本の余白のある冊の末尾に書き加えたものであろうから、⑭や⑮は、文禄五年六月以前に書写されていたに違いあるまい。以前とだけでは明確な限定とは言えないが、⑮には別に書写年時を限定できる曲が含まれている。三曲目の〈吉野詣〉がそれで、同曲は豊臣秀吉の命で大村由己が作り、金春大夫安照が節付したとの確度の高い伝承を持ついわゆる豊公謡曲五番の内の一曲であり(他は〈明智討・柴田・北条・高野参詣〉)、文禄三年二月末からの秀吉の

吉野花見に先立って作られ、秀吉自身が二月九日に大坂城で(予行練習か)、三月五日には吉野蔵王堂でシテを舞ったのが初演である。当然、それ以後に⑮の《吉野詣》は書写されたはずで、末尾の小謡が二年後なのを勘案すれば、⑮の全体が文禄四年頃の書写と推測できる。それとの類推で⑭の全体も末尾の小謡とそう隔たらぬ頃の書写と考えたい所であるが、⑭は前半三曲と後半二曲とで書風にかなりの差があつて全体が同じ時期の書写とは考え難く、稀曲を含まないことや付載小謡の曲数が多いこともあつて、⑭と同一視はできないようである。

以上に見たように、主として『言経卿記』によって、『吉川小本』のかなりの曲は書写年時をある程度限定できる。ほとんどが⑮以後に並べた冊に収められた曲で、文禄三・四・五年(慶長元年)、または慶長二年に集中している。道晰についての記事が『言経卿記』に現れるのが文禄三年以後のためでもあろうが、言経と交際するようになって道晰の稀曲蒐集に拍車がかかり、文禄四年前後に手沢本が冊数を増したことは確かであろう。永禄以前から天正初年にかけて書写されたであろう「主与十郎」の署名のある①⑦を基にして、宗晰時代(天正三年頃から文禄初年までの約二十年間)に⑧⑭をじわじわと蓄積し、文禄後半に急激に⑮⑯⑰を増補したという成立事情が、『吉川小本』には存在したようである。文禄五年が改元で慶長元年になった十月二十七日以降には、道晰は謡本の刊行準備にとりかかったらしく、言経から借りる謡本は通行曲がほとんどになる。それらは無論『吉川小本』には投影していない。前述したように《花箭倉・隠岐物狂》を含んでいて慶長二年の書写かも知れない⑱を除いて、道晰の稀曲蒐集熱の終息した文禄末年に『吉川小本』は膨張をとどめたかのようなようである。

〔九〕 総括的評価

資料ハ《吉川小本》が数多くの稀曲を含むことを、(七)の項で同書の最大の資料的価値としてすでに指摘した。(八)の項

ではそれらの稀曲を他の車屋謡本所収曲と同じく下掛りの詞章として受け取ることの危険性を指摘したが、そのことは毫も《吉川小本》の価値を狭めるわけではない。とにかく古い詞章を伝えていること自体が貴重なのであり、それが観世系であるか金春系であるかは、研究者が他本と比較調査して把握し、それぞれの曲の作品研究に生かせばいいことである。古い詞章が必ずしも良い詞章とは限らないであろうが、総じて《吉川小本》に道晰が集めた稀曲の詞章は、素性正しい本に依拠していることが多いようである。⑯の《松浦鏡》が世阿弥自筆本《マツラ》の詞章を継承していることは前述したが、それは文句だけでなく、節付の面もそうなのである。ほとんど演じられず、観世流謡本の古写本も伝存していない曲であることを思えば、世阿弥本を直接の底本とした本を道晰が転写した程度に近い関係にあると見ていいであろう。まだ精査してはいないが、同じように善本に基づいている曲が多いのではなかろうか。

一方、⑳の末尾の《恋重荷》は、以前「恋重荷の歴史的研究」なる論考(『法政大学文学部紀要』第八号(昭和38年3月))を發表した際に言及したことながら、古い演出に基づく天文二十四年(一五五)奥書の観世小次郎元頼章句本などの形とは違って、江戸中期に観世流が復曲した際の形とほぼ同じ文句になっている。復曲に採用された形が当時の改訂ではなく文禄年間にすでに成立していたことを《吉川小本》が示しているわけで、古い形を伝えてはいない曲にもそうした価値が備わっているのである。多くの稀曲の最古の本文を伝えているという《吉川小本》の特色は、稀曲の研究が進むにつれて、いよいよ高い評価を与えられることになるであろう。

稀曲以外の曲の詞章にも、注意すべき点が多々あるようである。①の《葵上》でミコとは別にツレが出る形に役名が記されているのも一例で、道晰自身が後の車屋謡本でミコに統一してしまったのに惑わされて従来は指摘されていないが、青女房が出る古い演出に基づく詞章と認定できる形なのである。《葵上》が永禄以前の書写に相違ない与十郎分の①に含まれている事実が、右の認定の支えになるであろう。複雑な成立事情を踏まえた上で調査することによって、

《吉川小本》所収の通行曲にもさらに多くの重要な問題点を発掘できるのではなからうか。

さて、《吉川小本》は鳥養道晰(宗晰)の手沢本であった。しかも、与十郎と称した青壮年の頃から、すでに老境に達していた文禄五年(慶長元年)までの長期間にわたって集積された本と認められるから、書家としての道晰の成長過程が赤裸々に投影している。謡本節付の専門家としての成長の跡もまた然りである。そこに車屋謡本研究の上での本書の比類ない価値があると言えるであろう。

鳥養流とは言えないような細筆の書体(⑧の〈満仲〉)から太筆を用いた極端に肥瘦の差の激しい晩年の書体まで、あまりにも書風の幅が大きいため、『鴻山文庫本の研究』では一部を宗晰とは別人の筆と見て解題しているが、それは数十年を隔てて書写された本が同居している事実を明確に認識していなかったための錯誤であった。同じ冊の前半と後半とでまったく書風の異なる場合に抱かされる違和感も、余白だった後半にかなりの年月を隔てて書き足したと見なせば、不整合も同一人の書風の変遷の範囲内の現象として理解できる。むしろ、多年にわたって執筆した手沢本たる本書に、執筆時期や書写態度や用筆の違いによる鳥養道晰の書風の幅、および謡本の書式や節付の幅が反映していると見なし、本書の実態に基づいて、道晰の書風の変動や、謡本の書式・節付法の幅を考えるべきなのであった。さうざん迷った末にそうした把握の妥当性を表が納得したのは、何冊かの脆弱化していた綴糸を切るほど《吉川小本》を繰返しひもといった挙句のことであった。後人が同じ迷いを抱かぬように、複雑極まる本書の実態を詳述したつもりであるが、長大な紙数を費やしながらか十分にはその目的が果たされていないのではないかと危惧している。

本書が国の重要文化財に指定されていることは資料ネ《曲舞本》の条に既に述べた。同じ時に重要文化財に指定された資料フ《吉川大本》が、百二十番の揃本で美麗を極める装幀なのと比較すれば、美術的価値においては《吉川大本》が一段上であろう。だが、《吉川小本》は道晰の手沢本である。他人に依頼されて執筆した他の車屋謡本とは違って、飾

らない、普段の道断の筆跡が、若書きの堅い書風から肥瘦の差の激しい円熟した書風まで、多様な姿で躍動している。書道史・謡本史の上で、希有の宝物と評価すべき資料であろう。

「車屋本之研究」のために戦前にすでに調査しておられた縁で、吉川本の三種がまず江島氏のもとに書肆から持ち込まれた際、価格の点で一括購入が叶わず、大本か小本かを選択せざるを得なかった時、江島氏は迷わずに大本よりも小本を選んだと聞く。その見識に敬意を表したい。

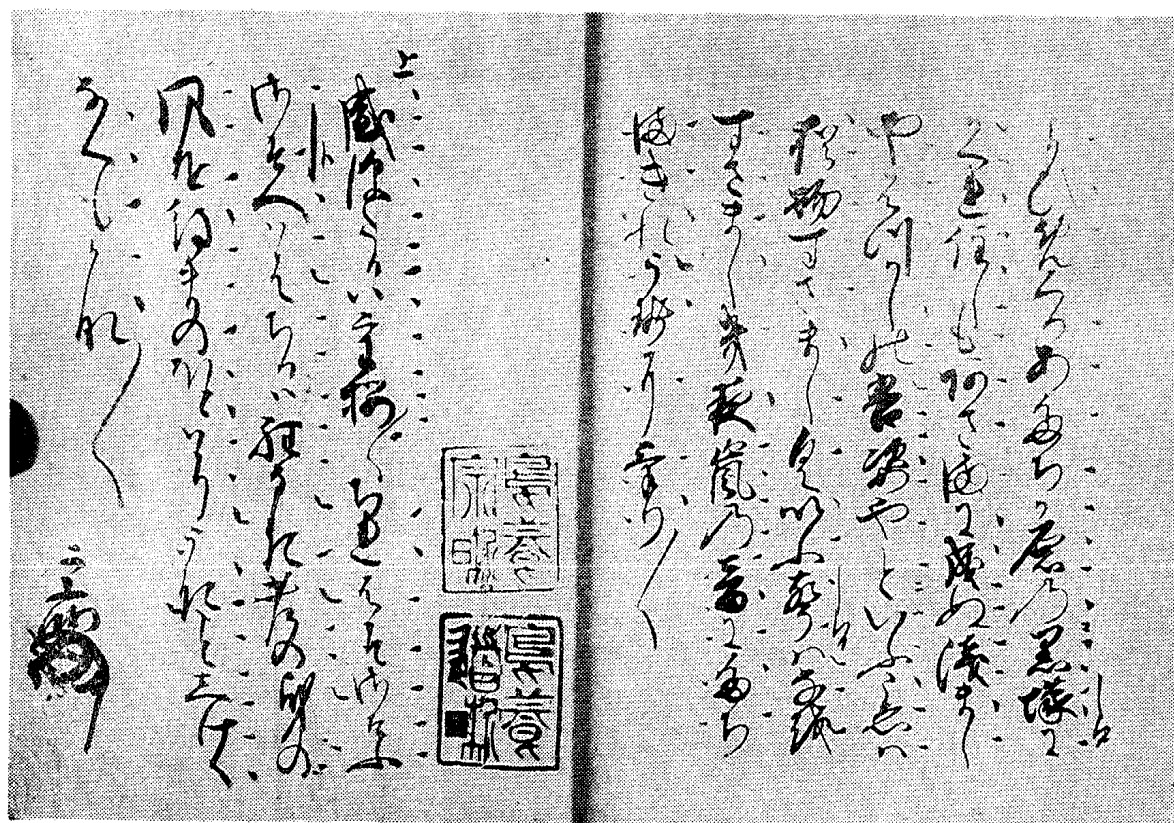
〔既発表分の訂正〕

本稿の既発表分に若干の誤りを見出だしたので、以下に訂正しておく。

(一) 〔『能楽研究』第十三号に掲載〕の分

① 33頁5行 × 「鳥養宗慶書札礼」〔書札礼〕 ↓

○ 「鳥養宗慶所持書札法」〔書札法〕



(50) 吉川小本 ⑥の冊末尾

② 43頁4行 × 天文六年(二五七)生れになり、没した慶長九年には71歳

○ 天文元年(二五三)生れになり、没した慶長七年には71歳

(二)『法政大学文学部紀要』第三十三号に掲載の分

③ 70頁8行 × 〆目闍景清〆の冊 ↓ ○ 〆飛雲〆の冊

④ 88頁3行 × 〆目闍景清〆の冊 ↓ ○ 〆飛雲〆の冊

⑤ 95頁10行目と11行目の間に、四字下げの形で次の二行を追加する。

ちはやぶるその神山のあふひ草 く かへるかつらの枝くも さしそふけふの玉すだれ かはらぬ御代
のためしかな く

⑥ 95頁16行 × 五月の分が、二と ↓ ○五月の分の最初の曲が二と

⑦ 96頁の最初からの四行分を、次の形に改める。

とある「小謡之本三」は、前記の三曲のことに相違なく、この時には浄書して道晰に与えたのであろう。すでに道晰の節付も済んでいたのかも知れない。いずれにせよ、右の『言経卿記』の記事は、新作小謡の作られた経緯を伝える希有の例であり、すこぶる興味深い。

以上の訂正の内、⑤⑥⑦は一連のもので、『言経卿記』慶長元年五月十四日の条に新作小謡二曲の文句が書かれているのを、一曲だけのように錯覚した(メモのしそこない)ことによる誤りの訂正と、それに基づく無用の推測の削除である。